
Parfum

響かほり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Parfum

【Zコード】

N3185X

【作者名】

響かほり

【あらすじ】

榎紫苑は自分の職業（俳優）を隠して、従兄弟である榎健斗のクリニックへ不眠治療に通っていたが、症状は徐々に悪化するばかり。一年間、ずっと自分の診療介助についてくれている年上看護師の吉良は優秀で、それなりに気に入っていて、なんとなく気になる存在。

愛や恋という感情を否定し、女性と深く付き合ひ事のなかつた紫苑は、従兄弟の口説きテクすら通用しない吉良に強く興味を惹かれはじめる。

それは恋愛感情ではなく、玩具を手に入れるような、自分にも靡かない彼女を口説き落とす遊びの様な感覚だった。..

一方の吉良あげはは、高時給につられた特別診療（榎紫苑の診療介助）で時間外手当をゲットして、僕しく貯蓄生活をしながら恋愛ナシのおひとり様生活を満喫中だった。それが、これまで挨拶程度の口説き文句しか言わなかつた榎紫苑の変化により一転。過度なエロスキンシップをする榎紫苑に彼女のアイデンティティは崩壊寸前！榎紫苑への評価はダダ下がり。

そんな二人の間に恋は芽生えるの！？

『Sweet hug』の吉良あげはと榎紫苑が付き合つ前のお話。

榎紫苑と吉良の視点が交互に展開する一人称表記の小説です。他HPにて連載掲載している物を、改稿・転載しています。

1 → 紫苑 side → (前書き)

二人の付き合つ前のお話を、改稿掲載開始しました。
ゆつくりペースでの更新になりますが、Sweet hugとは
違つた二人を楽しんで居たければ幸いです。

第一章 華麗なる神一族

はじめに気になったのは、彼女の香り。

近付いて微かに分かる程度の、淡いハーブの芳香。

その香りに触れる時だけ、俺は不思議な安息感に包まれる。
恐らくラベンダーと、何かが混ざっているはずなのだけれど、俺にはそれが何の香りかは分からなかつた。

ずっと気になっていたけれど、一度も相手に確かめたことはない。彼女に会つて二年になるが、挨拶程度の会話か、必要最低限の会話以外はした事がない。相手も俺も、私情で話しかけるようなことのない仲だ。

相手は、俺が通う睡眠治療専門のクリニックの看護師。

苗字は吉良、名前は知らない。

ケーシーとかいうツーピースのパンツタイプの機能的な白衣の胸

元に、そう苗字が書いてあつた。

身長は一七〇? 前後で、細身だがメリハリのある女性らしい体型をしている。

顔は卵型で、ダークブラウンの目は大きめでくりつとし、睫毛も長い。鼻梁はすつきりしていて、唇は少し厚め。

俺より年齢は四、五歳年以上だと聞いているけど、肌理細かく張りのある色白な肌や、幼く見える顔は、どう見ても俺と同じくらいにしか見えない。

容姿を評価するなら、中の上。

顔自体は特に目立つた美人ではないし、色氣は皆無。

身だしなみには気を配つて いるよう で、化粧に手抜きはなく、いつ てもナチュラルメイクで清楚な印象を受ける。

まあ、仕事中の看護師に女の色氣をふりまかれても困るけど、接客と いうか俺への応対は丁寧で女性特有の媚を売る様な裏が見えな い。

徹底して看護師としての立場を崩さず、俺が挨拶程度に口説いた 言葉もあつたりかわして、業務をしつかりとこなす。

かといって、つんけんしてもいいし、どちらかと言えば笑顔を 良く見せて人を和ませる雰囲気がある。気配り上手で俺は彼女が付 いた診療中に不快感を覚えたことはない。

俺が口にするよりも早く、空調一つ、照明一つにしても調節して くれる。かゆい所に手が届く、といつのは彼女の様な配慮の事を言 うのだろう。

彼女は一個人としても有能だ。

自分で言ひの も何だけれど、俺は女に不自由したことはない。常に 言い寄つて来る女がいる事に同性から羨望を抱かれる事が 多いが、結構、鬱陶しい。

馴れ馴れしく自分を売り込むのはまだいい。

許せないのは、交際していようとしていなかろうと、節度もなく 我が物顔で図々しく俺の仕事や私生活を根掘り葉掘り聞いてくる女。 仕事だろうと私生活だろうと、土足で踏み込んでくるような女には嫌悪感しかない。

その点、彼女は何も言わなくても、俺が侵してほしくない絶対領 域に踏み込んでこない。

他愛ない会話だけで、俺の事には一切触れて来ない。だから、診 療中の居心地は良い。

最近、このクリニックに 来ると、いつも彼女の姿を眼で追つてしまつ。

理由は良く解らない。何となく、目が離せない。

「…神さん、やめてもらえませんか」

呼ばれて、ふと我に返る。

ティー・ブラウンの短い髪の彼女は、困ったように俺を見下ろしていた。

「あ…俺、何かしていましたか?」

「そんなにガン見なさると、わざと針を刺し間違えますよ?」

治療室の寝台で横になっていた俺は、俺の腕に点滴を刺そうとしていた彼女を凝視していたらしい。

「…わざと?え?わざとって、何?」

なんでもないフリをしているけど、本当は俺、注射の類が大嫌いなんだ。

なのに、わざと打ち損じるつもりなのかと、内心で冷や汗をかいだ。

が、彼女は既に点滴の針を刺し終えていて、テープで管の固定も終えて、道具を片付けていた。

痛みすら感じさせない彼女の注射の腕前は、俺が知る医者や看護師の中で一番だ。

いつもながら、手際が良く鮮やかすぎて感服する。

「貴方が少し院長に似ているので、ちょっと苦手といつか…日頃の恨みが…」

彼女が勤務するクリニックの院長は、俺の十一歳年上の従兄弟、榎健斗。

兄弟と疎遠な俺には兄貴みたいな存在で、向こうも何かとかまつ

てくれる。

が、天上天下唯我独尊な性格で、女癖が異常に悪い。
彼女は健斗好みのフェロモン系ではないが、プロポーションは完璧に好みの部類だ。

「もしかして貴女、健斗の愛人？」

吉良の形の良い柳眉が片方、ピクリと動く。
表情が心なしか険しくなる。

“もしかして、地雷を踏んだか？”

俺の想像とは裏腹に、ふつと、彼女は吹き出し、横を向いて必死に笑いをこらえる。

「ないない」

しばらくして笑いを収めた彼女は、手をひらひらとさせて軽く答える。

いつもは理知的な彼女の顔が、少し幼く見えた。

「院長と出会つて八年経つけど……愛だの恋だのって、一度も感じたことないなあ……」

独り言のように彼女の口から洩れた言葉は、いつもの丁寧な口調ではない。さつとこれが素の吉良の喋り方だろ？。

「そんなに長い付き合いなのに、何もないの？」

傍に居る女に手を出さないなんて、正直、従兄弟の手癖からいつて考えられない。

吉良は困った様に首を竦める。

「自分の部下に手を出す様な男の下でなんて働けないし」

そう断言した吉良は、あわてて口元を押える。

「すみません。患者さまに、失礼な言い方を…」

「ああ、気にしないで。俺、堅苦しいのは嫌いだから

「そういう訳にはいきません」

俺が神姓だからなのか、吉良は終始言葉遣いが丁寧だ。

医療法人『聖心会』を運営する神一族絡みの人間は、医療業界の人間にとつては、かなり怖い存在らしい。

『聖心会』というのは、日本でも五本の指に入る巨大総合病院『いずみ病院』が母体となり、福祉施設や老人保健施設などをいくつ

も抱える。

財界人や政界人も良く利用するため、太いパイプもいろいろあるようだ。

事実はどうか知らないが黒い噂もある。

敵に回すと、日本中の病院で雇つてもらえなくなる…とか。

それだけ、『聖心会』が医療業界で力を持っていると、いうことのようだけれど。

従兄弟の健斗が経営するこの榎クリニックも、無論『聖心会』の法人名が付いている。

その『聖心会』の創始者であり、一代で『聖心会』を大きくしたのが、榎虎之助。

従兄弟の健斗と俺の祖父に当たる人で、俺が五、六歳のころに、老衰で大往生ともいえる年齢で亡くなった。

医療系の財閥の出身者で、医者と政界者が多数を占めた榎の嫡子として生まれた祖父は、政界への道には進まず、医者となつた。

脳外科医として世界にも名を馳せ、私財で『いずみ病院』を立ち上げ、後継者育成のために尽力し、優秀な医者を輩出したりもした、実はかなりすごい人らしい。

偉大な話をよく聞かされるが、俺の記憶にあるのは、ファンキーなじい様の姿だけ。

ボケたふりをして使用人や自分の子供に悪戯を仕掛けたり、子供みたいに何にでも興味を持つて若者の遊びにも進んで参加する。

しかも、ものすごく負けず嫌いで、こと勝負事に関しては、子供相手にもいつだって真剣勝負の人気ない年寄りだった。

とにかく好奇心と悪戯心の塊みたいな人で、俺はよく遊んでもらつた記憶がある。

俺は、じい様が好きだった。兄弟や父親より誰よりも

妾腹の子供として肩身の無い場に置かれた榎の家の中で、一番人間らしく俺を扱つて、孫として目をかけて遊んでくれた唯一の人間。未練のない榎の家で楽しかった思い出は、ほんの一年だけ過ごし

たじい様との事だけ。

「…榊さん?」

不思議そうな顔で吉良にみられ、俺は我に返る。

「何か、面白い事でも?」

じい様のことを思い出しているつちこ、自然と唇の端が緩んでいたらしい。

俺は表情を戻し、何でもない様に愛想笑いに切り替える。

「いや。貴女は堅苦しいなあと、思つて。もう少し、楽に話したらどう?」

「院長命令なので、仕事中はこの喋り方をやめるわけには…」

「健斗がどうしてそんな命令を?」

「このクリニックに来院される患者さまは、上品な方が多いので、あまり砕けた言葉を使うとクレームが来てしまいます」

大方、健斗担当のセレブな女たちだと、容易に想像がつく。
そして、健斗のそばで働いている女性職員に対して向けられる、嫉妬と羨望も。

「健斗がらみで、女性の患者から嫌がらせとかされたことないの?」

健斗の事だ。それなりにそう言つた手合いの人間を対処できる人間を置いているとは思う。

だが、吉良を見て要る限り、失礼とは思うが、彼女が巧く嫉妬を含んだ攻撃をかわせるようなスキルを持っている様にはとても見えない。

「そんな真似を患者にさせると云つた抜かりが、俺にあるとでも言いたいのか、お前は」

処置室の入り口に視線を向けると、白衣姿の従兄弟が腕を組んで立っている。

切れ長の双眸が、眼鏡越しに不敵に笑っている。

唇の端には皮肉な笑みまで見える。

加虐心旺盛な極悪顔をしているはずなのに、持つて生まれた美貌に色氣と華を添えるから不思議だ。

2 (後書き)

お気に入り登録、評価ありがとうございます。
急に寒くなってきたので、皆様お風邪など召さずませぬよう。

「健斗の田の届かない所であるかも知れないだろ。女なんてのは、影でこそするのが好きな人種だ」

「その陰険な人種が、そこにいるぞ？」

従兄弟は吉良に視線を向ける。

俺が彼女を見ると、吉良は苦笑している。

怒りとか不愉快という、負の感情で現れたものではなさそうだ。どちらかといふと、呆れている感じだ。

「陰険なんて言つてないだろ」

「なんだ、てっきり吉良が陰険で姑息だと言つているのかと思つたぞ」

「別に吉良さんのことを陰険とは言つていない……」

「ほお？ 姑息とは認めるのか」

「違うから。吉良さんの事じゃない」

「では、吉良は女ではないと」

「…健斗、言葉の綾で、上げ足を取らないでくれないか」

意地の悪い従兄弟を睨めば、健斗は鼻で笑う。

「院長、私をダシに使つて遊ぶのは止めてくださいね。榊さんが困つてますよ?」

助け船を出す様に、吉良が健斗を窘めれば、健斗はこやりと笑う。

「俺も榊なんだがな?」

「もう、すぐそやつて上げ足を取る。悪い癖ですよ」

「そんな俺に飽きもせず八年近く連れ添っているのは、お前だろ。

そろそろ、愛でも芽生えただろ。俺に告白でもしたらどうだ？」

「それは連れ添うのではなく、付き合わされてる、です。ちなみに

に、愛じやなくて腐れ縁で結ばれているんですよ、院長」

聞いている俺が恥ずかしくなる様な誘惑に満ちた声で言葉を投げた健斗に、吉良はさりとて「ティッシュボールクラスの言葉を返し、俺は思わず吹いてしまう。

こんなにあっさり従兄弟の口説きをかわす女性を、俺は初めて見た。

笑った俺を一睨みして処置室に入ってきた健斗は、吉良の手から点滴の道具が入った膿盆を取り上げる。

「吉良、そもそも約束の時間じゃないのか？あいつを待たせるのか？」

「え？…嘘つ、こんな時間！？大変、遅刻ですっ！院長、私これで失礼します！」

腕時計をみた吉良は、驚いたよつよつよつと俺たちに向かって出て行つた。

あの慌てぶりは、デートか。

彼女の背を視線で追いかけ、その姿が消えた直後、鋭い視線を肌に感じた。

視線をそちらに向ければ、健斗がじとじと俺を見ている。

「ナースを口説くなら、よその病院でやれ」

べつに口説いてなどいないが、健斗が本気で注意しているのが分かる。

「そんなに大事なら、首輪でも付けて檻に入れておけば？」
「出来るものならそうしたい所だ」

俺が寝ている診療台の横にある丸椅子に腰を下ろした健斗は、深くため息を漏らす。

そんな物憂げな従兄弟を見るのは、初めてだつた。

そもそも、健斗がその気なら、女はいくらでも落せる。
気弱な発言自体、あり得ない。

だが、さっきの一人のやり取りを見えれば、吉良には俺達のやり方は通用しないと言つのが分かる。

落とすには、厄介な相手なのかもしれないが、健斗に其処まで言わせる女は、健斗の妻になつた美菜様以来かもしれない。

「何、そんなに吉良さん大事？」

「当たり前だろ。高い金を払つてあいつを引き抜いたのは、ほかの男に易くくれてやる為じやねえぞ」

あまりにストレートな発言に、俺は従兄弟を凝視する。

いまだかつて、健斗がそこまで女に固執したのを見たことがない。美菜様の時も無論、固執はしていたし榊の力を使つてもいた。だが、金の力を借りると言つやり方は、健斗にとつては邪道。

吉良のことを気に入っているのは、診察に来る度、健斗の様子を見ていれば分かるけれど、スマートな口説きを重視する健斗が露骨に金銭を動かすのは、吉良に異常なこだわりがあるとしか思えない。

「この俺のペツトかつ、有能な仕事の相棒だぞ? ビーナの馬の骨に搔つ攫われるくらいなら、俺の愛人に据える」

その一言に、何んなりする。

言つちやつたよ、健斗の奴。

仕事の相棒よりも先に、ペシトつて。

健斗にとつての吉良の一一番のポジションは、サドつ氣を満たしてくれる玩具なのか？

しかも、女とは浅く広く付き合つ健斗が、愛人にしても良いくらい、吉良のことは気に入つていると言つてゐるわけだ。

「無論、女に本気にならねえお前にしも、やらねえぞ？」

俺にすり、そんな父親的意見で牽制をかけるくら」。

「…吉良さんも、面倒な男に見染められたものだね」

「女絡みのお前は、絶対的に信用できない」

「健斗に言われたくないよ」

反論すれば、健斗があり得ないほど嫌な顔をした。

「…お前、身を慎め」

身を慎む？

健斗からそんな台詞が聞けるとは、思つてもみなかつた。
一番、使わなさうで、不似合いな人間なのに。
まあ、俺も人のことは言えないが。

「毎回毎回、別の女とのゴシップ記事なんざ撮られやがつて。節操なしに女を抱いたりするから、面倒事が起るんだ。遊ぶ女は選べ。人気が落ちてもしらねえぞ？」

珍しく健斗に心配され、俺はその慣れない相手の心遣いに笑つてしまつた。

俺の職業は俳優。時々、雑誌のモデルもする。

芸名は“上坂伊織”

一応、それなりに名前は売れているし、この何年か、ありがたい事に休暇を取る余裕すらないほどスケジュールも埋まつて、仕事は巧くいつている方だと思う。

世間ではイケメン俳優とか、そんなカテゴリーにくくられている。それも、母親譲りの異国情緒あふれる美貌があつたからこそなんだろうけど、親父の血を受け継いでも、それなりに良い顔立ちにはなつただろう。

出来れば、どちらの顔にも似たくなかったというのが本音だが、子供は親を選べないから諦めるしかない。

自分の顔は好きではないけれど、この顔で得をしている事もある

し、捨てられる物でもない。使えるものは利用すればいいと、子供の頃に腹をくくつた。

親父にすれば、俺の顔を見る度に母さんを思い出して不愉快になるだろうから、せいぜい有名になつてテレビに顔を出し続けてやる。そんな復讐心もあつて、この業界を選んだのも今の俺がある理由の一つ。

顔のせいで相手から言ひ寄つてくるから、女に苦労したことも多い。

そのせいか、よくスキャンダル記事を週刊誌に書きたてられる。

「あれは、ほんと捏造記事。映画の共演者との熱愛は、ほんと話題づくりのための仕事の一環。手なんか出してない」

「クラブで毎回、女を持ち帰るとかいうアレは？」

「…何、健斗、週刊誌とか読むの？」

妙に詳しい事情を尋ねてくる相手は、ゴシップ雑誌はほんと読まなかつたはずだが。

「受付の絢子が、お前のファンでな。お前の載つた雑誌を、吉良と見て話している所を、聞いただけだ」

その言葉に、俺は背筋に嫌な汗をかく。

「…もしかして、吉良さん、俺のこと気が付いているのか？」

「さあな。あいつの芸能関係の知識は、無さ過ぎて困るくらいだ。

吉良は仕事以外で人の顔と名前を覚えられない、残念な記憶力だからな。一体どこまで絢子が教えた芸能人を把握したのかは、些か謎だ

俺としては都合がいいのだが、そつなく物事をこなす吉良にそん

な欠点があるのは、意外だつた。

「もつとも、お前の素姓に気付いても、知らないフリを通すだろう。知つたところで、患者の事は一切、他所には口外しない女だ」「彼女、信用できるのか？」

「俺の選んだ女に間違いがあるとでも言つのか？」

ほかの人間が聞いたら誤解しかねない言葉に、俺は苦笑が浮かぶ。

「女を見る目だけは、認めるよ」

健斗は、人の本質を見抜くのが巧みだ。特に、女性のそれは、健斗が言うのなら、問題ない。

その辺は信用している。

まあ、吉良が信用に足る人間でなければ、俺の診察に立ち会わせることなど、そもそも健斗はしないだろう。

「で、噂の真相はどうなんだ？毎回、お持ち帰りか？」

そこが気になるのか、健斗は話を戻した。

「いや、持ち帰らないよ。第一、サカリがついているのが多いから、後々面倒くさい。一番、相手にしたくない」

後腐れのある様な付き合い方など一切しないし、リスクは常に最小限に抑える配慮もしている。

どの女とも関係を持つのは一度きり、俺が相手に惚れる」とは一度もない。

だから交際をしても長くは続かない。そのせいで俺は『恋多き男』という、おかしなレッテルを貼られている。

女が特別好きと言つ訳でもない。ただの時間つぶしだ。

最も、最近は仕事の忙しさも手伝つて遊ぶ時間どころか眠る時間もない。余計に、不眠症に拍車がかかっている。

仕事をこなすだけの体力維持も、難しくなつてきてている。

だから、健斗のクリニックに内緒で通つて、不眠症の治療をしつつ、時々、こうして栄養剤入りの点滴を打つ。

女を見たら口説くのが神家の礼儀だが、最近は口説く気力もなければ、女と遊ぶ気分にもならない。

けど、そんなことを同族の健斗に言えば、『お前は去勢された犬か』って、突つ込みが来るのも分かり切ったこと。

4（後書き）

お気に入り登録、お気に入りユーチューバー登録ありがとうございます
最近、私の天敵花粉が猛威をふるつて、マスク生活も相まってか
なりの酸欠状態。

なので、一応のチェックはしていますが、誤字脱字などたくさん
あるかも…

発見したらメッセージや、活動報告の所からでも教えていただけ
ると助かります。

皆様は、花粉や風邪に負けませんよう、お身体大切にしてくださいね。

それに、これ以上、健斗に迷惑かけるのもまずい。

今ですら、時間も曜日も選ばず、俺の仕事の合間に診てもらひつている。

その間隔も最初は月一度程度だったのが、このところ週に一、二度ペースになつていてる。

健斗は日と時間を選ばない俺の依頼に対し、一切の文句を俺に言つことはない。

性格はサディストだが、意外に面倒見の良い一面がある。だが、それに甘えてばかりいても、俺の症状が良くなるわけでもない。

「後腐れない女が、一番だね」

「何、飄々と言つてやがる」

「眠れない時間を潰すために、女と遊んで何が悪い？」

「俺はお前のその発想力が理解出来ん。女と遊ぶから余計に疲れえんだろうが」

もつともな意見を放った健斗は、俺の前髪に手をのばして乱暴に搔き乱す。

「女遊びは止める。そのうち、ぶつ倒れるぞ」

「…そうだな。女遊びは少し控えるよ」

一瞬、健斗の表情が険しくなる。

「てめえ、一円ぐりには完全に断つぐりと言えないのか」

左右のこめかみを押さえるように頭を掴まれ、ぐっと力を込められ、凄まれる。

容赦ない痛みが、俺の頭を襲う。

「いってえだろ！ 健斗っ！」

乱暴に健斗の手を振り払い、従兄弟を睨みつける。健斗は鋭い視線で俺を見下ろしていた。

「医者（俺）の命令が聞けねえのか？ それとも、点滴が出来るからつて調子乗つてんのか？ 今度から、俺がまた点滴してやろつか？」
「それだけは、やめるつーお前、絶望的に下手くそなんだからー！」

何度も何度も針を刺されるなんて、たまつたものではない。

あんなもの、拷問に近い。むしろ俺を殺す気だとしか言いようがない。

健斗に点滴をされるのは、二度と御免だ。

「吉良以外、絶対、させないからな！」

彼女は注射や点滴が上手い。痛みも恐怖心も感じさせない。だからまだ、許せる。

健斗は俺の慌て様に、皮肉気な笑みを浮かべる。

従兄弟がこの顔をしている時が、一番、活き活きして見えるのは俺だけだろうか。

「随分、吉良を気に入ったようだな？」

「…お前や俺に靡かない時点で高評価。点滴の腕前も申し分ない。

俺の事をいちいち詮索しない。その二点で、俺の看護師として文句はない

「女を高評価とは、珍しいな？」

「だからと言って、女としての彼女と深く関わるつもりはない」「ついでに、他の女をつまみ食いするのも止めとけ。治療の為に、

一ヶ月、女は抱くなよ？」

「…何で一ヶ月なんだ？」

「お前にはその辺が、我慢の限界だろ」

「何の我慢だよ」

「性欲」

「…人の性欲限界点を推察するの、止めてくれないか？」

まあ、無駄な体力を消耗しないようにするために、言つていいことは分かる。

健斗としても、俺の不眠症が酷くなっていることを、気にはしているのだろう。

だから、体を労れと暗に言つているのだ。
全く、素直じゃない親切なアドバイスだ。
不眠症の原因は、はつきり分かつている。

分かつてはいるけれど、俺自身でも、医者である健斗ですら、それはどうにもならない事だから。

「それでなくとも、真夜中に吉良を引っ張り出すのは避けたい。この界限は、変質者が良く出るからな」

「変質者？」

「露出狂やひつたくり程度ならまだいいが、強姦事件もあるからな。夜は出来る限り俺が送迎をするが、そうもいかない時がある

今日の様な昼間ならまだ人目が多いが、夜の一人歩きは何かと危険だ。

俺のせいでも吉良に何かあっても後味が悪い。

夜に来るのは、出来るだけ避ける様にするかと思うが、仕事上、飽く時間は夜が多い。

つまり、健斗は遠まわしに俺に診療に来るのを減らすよつ、私生活をどうにかしようと云いたいようだ。

「昼に来るよう努力は一応するけど、期待はしないでくれよ
「どうあっても慎む気がないのか、お前に」

「榊から女遊びをとつたら、生き甲斐が無くなるんじゃないのか？」

「あのな…お前に本当に必要なのは、女でも、栄養剤の入った点滴でも、睡眠導入剤でもねえ。心身共に癒される場所だ」

健斗は笑うでもなく、怒るわけでもなく、俺に諭すよつて呟いた。

俺は、曖昧に笑うことしか出来なかつた。

そんなもの、今までに一度だって得た事がないのだから。

第一章 金が結んだ縁

二年前、その人を初めて見た時、新手の不審者かと思つた。

彼の人は、推定一八五？前後の長身で、院長よりも少し背が高い。均整の取れた骨格で、決して華奢ではない体格をしていたから、職場のあるビル内のエレベーター前で隣に並んだ時の威圧感はむしろ恐怖心に近いかも知れない。

服装はパークーにジーパンというラフな格好。

それだけなら、ごく普通だつたんだけど。

深夜の時間帯だというのに、その人は淡いグレーのサングラスをしていた。

しかも、パークーのフードを田深に被り、伏し目がちで顔を隠している。

エレベーターと一緒に乗り合わせた時、相手は私から顔を逸らし、そわそわ落ち着かない様子だった。

エレベーターについている、防犯カメラの映像をちらちら見ているし。

明らかに拳動不審。

しかも、ビルは小規模でテナント数も少なくて病院がほとんど。夜に入り出ることは、ほとんどないはず。

それに、相手は降りる階を押していない。

その当時、周囲では変質者が出ると、病院に回ってきた回覧板に書いてあつた。

“やだ、噂の変質者？どうしよう…院長、もうクリニックに来てる

かな……

院長に急遽、特別患者を見るから出て来いと呼びだされて来たもの、やっぱり女の一人歩きは危険だったかな。

今日は何故だか院長が迎えに来るつて言つてくれたけど、院長の所有する車は全部、スポーツカータイプでエンジン音がかなり大きい。

だから、控え目に走行したとしても、住宅街を通るとかなり近所迷惑になるから、色々気を使うので丁重にお断りをした。

でも、次回からは深夜なら絶対に院長と一緒に来よう。で、その院長が私より先にクリニックに来ている確率は五分五分で、微妙な所。

自分は女としては長身の部類ではあるけれど、さすがに一五?近い身長差と、性別と体型の違いからくる筋力差はカバーできない。

“こぞとなつたら、院長から教えてもらつた護身術で逃げよつ……”

『抱きつかれたら、まず思いつきり足を踏みつけてやれ。油断したら、素早くかがんで野郎の腕から抜け出して、遠慮なく金的かませ。いつも、女に変えてやるつもりで、全力で叩き潰せ。男はどうもこれで撃沈だ』

一応上流階級の人なのに、院長はかなり品の無い事を平氣で言つ。『丁度そこに良い検体がいるしな』と、男性スタッフの五藤さんを指さして言つたので、彼が自分の股間を押されて竦み上がつて逃げていたつけ。

実践はしていなければ、みつちりレクチャーは受けたので、とりあえず相手を油断させてから攻撃すれば逃げ出せる…かな?ちょっと心配。

でも、そんな護身術を教えてくれる優しさがあるのに、深夜に仕

事で呼び出すのはどうにかならなかつたのかしり。

高時給の甘い誘惑に乗つてしまつたのは、私なのだけれど…。
だつてね？

時間給、二倍の特別労働よ？

看護師のバイトの時間給は、普通のコンビニのバイト代よりずつ
と良いの。

その時給が深夜料の加算された状態で二倍だと、キャバクラの新人キャバ嬢の時間給より良いの。

一生を独身で生きるつもりの私にとって、老後のための蓄えは少しでも多いほうがいいからつて、考える間もなく即決してしまつた私も…やっぱり悪い。

院長の下で働くと、予想外にお金もかかるし。

圧倒的に毎日の洋服代なのだけ…。

勿論、今回の特別業務のお給料を弾んでくれるのには理由がある感じだけど、理由は聞くなど院長に最初に念を押された。

とりあえず、呼び出されたらいつ何時だろつと『絶対に来い』と
いうのが院長の命令。

つまり、訳ありで我が仮の通用するVIPな相手が、診療の相手
だと言う事を暗に言われたことになる。

まあ、VIPの対応をするのも初めてではないし、深夜に呼び出
されるのもオペ呼び出しで慣れてはいるんだけど、この状況は、特
別出勤初日にして、既に心が折れそう…。

つて、思つてゐるうちに、エレベーターが目的の四階で止まり、
扉が開く。

開いた瞬間、相手の男の人があく。

先に降りていく相手の動きがおかしくて、後ろ姿を見ながらとり
あえずエレベーターから降りた。

不審な動きという意味の拳動的おかしさではなく、病態的なおか
しさ。

明らかに、足元がおぼついていないし、ゆらゆらして身体が安定

していない。

お酒の匂いはしなかつたから、酔っぱらつてしている訳ではないのこ

。：

“もしかして、体調が悪いのかしら？”

顔がほとんど見えなかつたから、顔色が良くわからなかつたけど、何となく放置してはいけないつて、看護師としての勘が訴えてくる。ふらつきながら、『榎クリニック』と書かれた、私の職場の入り口でその人は止まつた。

すりガラスの自動ドアは開かない。

でも、院内に電気が灯つているから、院長が先に来ているようで、内心ほつとする。

“うちのクリニックに用事？もしかして、院長の言つていた特別な患者をまつて、この人？”

「うちは睡眠外来が主体の心療内科のはずなんだけど……。どう見ても、相手は救急外来で診てもらつた方よさそな感じ。必要なら、救急搬送した方が良さうなのでそれも頭に置いておく。

ピンポン

壁に肘を付き、腕で体を支えるようにして彼はインター ホンを押した。

『なんか用か』

ほどのく、そつけない返事が聞こえる。

“…え、その返事で良いの、院長？普通、どちら様とか聞きませんか？”

応答の対応が悪い事に動搖している私をよそに、インター ホンを押した相手は、ぼそりと呟いた。

「俺、さつさと入れてくれ…」

『どこの俺様だ』

「…紫苑だ」

『ああ、知ってる。待ってる』

通話が切れた途端、紫苑と名乗った彼は壁に腕をついたまま、ゆっくりと私を振り返る。

サングラスをしていても分かる、日本人離れした顔に、少し驚いた。

“流暢な日本語を喋る美形外国人だわ！”

美形は榊一族で見慣れているはずなのに、その人の整った顔は美形に興味の無い自分でも息を飲んでしまうほど綺麗。

ある意味この美貌は兇器。絢子さんや結城さんが見たら間違いなく絶叫するだろうなと思いながら、相手を觀察する。

白色系人種の肌だけど、顔色はそれ以上に血の気がない蒼白状態。疲労困憊した表情で、今にも崩れ落ちてしまいそうな危うさがある。

どこかで寝かせて休ませた方が良いのは、明らか。

「何か用？」

警戒するように、その人は私を見ていた。

日本語が流暢で助かつたかも。

「用があるのは、貴方にではなく此処に、です
…此処って…この病院？」

私が指をさした方向を見た相手は、再び胡散臭そうに私を見る。

「ええ。クリニックの職員なので
…職…員？」

いぶかる相手に、私はバッグから鍵を取り出して見せた。
院長が来るよりも先に、自動扉の上下に付いている鍵を開け、手
動で扉を開き、立っていることも辛そうな相手を見る。

「とりあえず、待合室のソファで横になつてください。顔色が悪い
ですよ」

何を驚いたのか、今度は相手が驚いた顔をして私を見ていた。

「…大丈夫ですか？一人で歩けますか？」

手を差し出せば、今度は凝視された。

「どうしました？歩くのも無理ですか？」
「いや…ただ、エレベーターに乗つたら、目眩がしてきて…」

そう言いながら、私の手を取ろうと一歩踏み出しかけた相手は、そのまま前のめりに倒れかかる。

“危ない！”

とにかく相手を受け止めようとしたけど、相手が無防備に勢いよく覆いかぶさるように倒れてきたので、相手が頭をぶつけないように支えつつ、そのまま一緒に座りこむように崩れ落ちる。なんとか頑張つて一緒に倒れる事は免れたけど、代償に私は自動ドアで背中をぶつけた。

「いたあ…ちょっと、大丈夫ですか？」

自分の体重プラス相手の体重分の衝撃は、結構きつい。それでも、相手の安全を真っ先に確認してしまったのは、看護師の性。

彼がぶつけた所はなさそうだが、相手からは返答がない。意識消失しているようだつた。

慌てて、相手の手首にある動脈に触れてみる。脈拍は規則正しく、緊張もあり良くな觸知出来る。呼吸も規則的で、緊急性を要する様子もない。ひとまず、安心。

「何やつてんだ、お前ら」

ほつとしたのも束の間、そんな声が聞こえて院内に視線を向ければ、呆れたような院長が腕組をしてそこに立っていた。

§

榊紫苑との出会いは、そんな感じで、怖さと痛さに脚色された。

何度思い出しても、どう解釈をしても良い思い出ではなかつた。おまけに、どうで女に節操のない院長の親族だと聞かされて、げんなりした。

榊一族の女癖の悪さは良く分かつてゐたし、出逢いの印象最悪のせいで、良い印象がこれっぽちも浮かばなかつたつけ。

とどめに、意識を取り戻した榊紫苑の一言が、私の心のフラグを大きく『嫌い』に傾かせた。

「俺に抱きつかれるなんて、ラツキーだね？」

大丈夫かと問い合わせた私に対し、「大丈夫」とも、「御免なさい」とも言わず、「ラツキーだね?」…。

人に向かつて倒れて來たくせに〜つ！

私の背中はその後、二日間も打撲で痛かつたのに！

痛いのを我慢して、院長と運んで処置室の寝台に乗せて、点滴までしたのに！

言つに事欠いて、「ラツキー」？

わがままと傲慢は、上流階級の特権ですか？

それとも超絶美形だからこそその暴挙ですか！？

特別時間給を貰つてなかつたら、相手が真つ青な顔をしていなか

つたら、私は榊紫苑を迷わず殴っていたかもしない。

それをグッと堪えて、笑顔を返したあの瞬間の自分を褒めたい。でも、「セクハラで訴えますよ?」とは、返答したけど。

「貴女、おもしろい人だね?」

何も面白いことなんて言っていないのに、榊紫苑は青灰色の双眸を細めて笑った。

こういう人種は、適当にあしらってかわして、深く関わらない方が良い。

完全に自分中心でしか物事を考えないから。

その点で、院長と榊紫苑は酷似していた。

だから、特別勤務は付かず離れず、仕事だけを淡々とこなそうと決めた。

その後、榊紫苑も診察に来る度に、顔を見ればあいさつ代わりに一言、口説き文句を言つけれど、それ以外は私が問いかけなければ何も言つてはこなかつた。

あからさまに、自分に踏み込まれたくないというオーラも出していたし、いつもピリピリしていた。

気難しい性格なのか、人間が嫌いなのか、近寄りがたい人間ではあつた。

彼の特別診療に立ち会つようになつて一年、会話らしい会話なんて、ほとんどなかつたから、この間のちよつとした会話は、ある意味、画期的な出来事だった。

「吉良、明後日の午後、あいつが来るから準備しとけ

「…え?」

月曜日の午前診療が終わり、休憩室で院長と向かい合ひつつお弁当を食べていた私は、耳を疑う。

神紫苑が来たのは、昨日。

最初はひと月に一度くらいだったのに、最近は週に一度のペースに狹まっている。

「診察…じゃないですよね?」

「点滴だ」

内科の病院ではないので、いつも頻回に点滴をするのは、レセプト的に色々問題が出るのではないだろうとかと思いつのだけれど…。

「そんなに体調が悪いなら、神の母体病院に受診した方が良いんじやないですか?」

「お前が良いんだと」

しどの天ぷらをつまんでいる箸で、院長は私を指さす。

「院長、行儀悪いです」

「お前、突っ込む所、そこか?」

「ほかに何があるんですか」

「…紫苑は、お前以外に点滴させたくねえと言つてこい」

しどを頬張りながら、院長は鼻で笑う。

そして、人の弁当箱からだし巻き卵を至極当然のようにかすめ取る。

「ちょっと院長!人のおかずに、手をつけないでください!..」

思わず立ち上がり、抗議した私に、院長は出前でとった天ぷらそば定食のえび天をつまんで、私の弁当箱に乗せる。

「文句あるか」「うつ…ないです」

本当は、ちゃんと院長用で用意しただし巻き卵を全部食べているから、コレステロール値が上がるから駄目ですって、言いたかつたけど。

お弁当箱からはみ出すくらい大きな海老が、文句を言つないと院長の代わりに無言で主張している。

文句なんて言えない…だって、海老、大好きなんだものっ！
上手に口止めされて腰を下ろした私は、勝ち誇ったように私の弁当箱に乘る海老の天ぷらと、院長を交互に見る。

「院長、私の目から見て…榊さんの体調が良くなっているようには、どうしてもみえないんですけど」

「俺にも、悪化しているようにしか見えん」

「治療、上手くいってないんですか？」

「正直、お手上げだ」

院長にしては珍しく、気弱な発言だった。

普段の人間性は大いに問題ありだけど、医者として院長は有能だつたりする。診療時間帯の患者様に対する院長の態度は、詐欺師。誰ですか、その優しい声と口調で聖人君主の様な微笑みを浮かべる人は！って、素の院長を知っている人は、誰しも一度は驚く。だから女性の患者様が多いのは否めない。

そんな擬態的な変化もさることながら、幼少期から医者としての英才教育を受けていると豪語するだけあって、大方の患者は治療によつて、快方に向かう。

多少の憎悪はあつても軽快するし、著しく悪化するようなことはほほない。

今回の様に、目に見えて悪化の一途を辿っているのが分かる事自体がない。

院長が成す術なしだといづつも事態は、今まで一度もない。

「本来なら、仕事を休ませたい所だ」

「榊さんの仕事、そんなに大変なんですか？」

「気になるのか？」

「ええ…まあ、多少」

「榎グループには一切関与していない仕事だけは聞いているけど、来る度に顔に疲労の色が濃いのを見れば、いくら嫌いな相手でも気にはなる。」

「俺はてっきり、紫苑のことを嫌つてると思つたが？」

「仕事中、表情とか行動に出でました？」

「いいや。ただ、紫苑が来る話をした時は、顔に出る

「無意識に顔に出るくらいだから、露骨なんだうなあ。」

「仕事中に出なによつた氣をつけようと、自分に言い聞かせる。」

「嫌いってのは、否定しないのか？」

「しませんよ。でも、それは仕事とは関係ありません

「自分の主観的感情と、仕事は別物。

「患者として相手が目の前に立つ以上、看護師としてやるべき」とはやる。

「それが、私のモットーでもあるし。」

「患者さまが苦しむのは、やつぱり嫌ですから……どうにかならないかなあと」

「良くなりや、顔を突き合わす必要もないからな」

「嫌みの様に言い放つた院長を、私は軽く睨む。
院長は首をすくめる。

「あいつが眠れるようになることは、あいつ自身が癒されねえとなあ

「ストレスが溜まりやすい仕事なんですか？」

「仕事をしない方が、ストレスなんだよ」

「…ワーカーホリック（仕事中毒者）ですか？」

「いや。仕事で限界まで疲弊しないと眠れないだけだ。だからある種、仕事の虫だな」

「スポーツとか趣味で身体を動かすのはどうですか？」

「色々させたが、思うようには効果が出なかつた。仕事がない時は過緊張状態になつて、睡眠導入剤も安定剤も全く効果がない。恋人でもいればまた違うんだろうが」

「いないんですか？モテそうですけど？」

「お前、仕事で自分を顧みない男と、付き合いたいか？」

「昔なら、厭だと思います」

「今なら良いのか？」

「恋愛自体を捨てた身なので、判断できません」

恋愛なんてもう何年してないだろ？

一〇代前半は、院長と美奈先生に散々邪魔されて、恋人と長続きした記憶がない。

一〇代半ばになつて、両親のことで人間不信になつて、恋人と長続かいとも思わなくなつちゃつたし。

いま最大の関心は、いかに老後の資金を貯めて、お一人様の生活を有意義かつ安定に送れるようにするか。

心が枯れているなあつて、我ながら思つ。

「若い女が、人生の大半の喜びを捨てるな」

呆れたように院長は、ため息をつく。

人の恋愛を潰しまくつた人間の言葉とは、とても思えない。

しかも、人生の大半つて、院長はどれだけ恋愛に重きを置いているのだろう。

「残念ながら、私の老後に必要なのは、愛じゃなくてお金ですから

「どうせなら、欲張つて一つ手に入れろ
「贅沢な無茶振りですね」

心配されているのか、邪魔されているのか、正直分からなくて、
思わず苦笑いしてしまった。

「…で、話がそれましたけど…。榊さんは、人に弱みを見せたがらない性格ですから、恋人がいても、あまり現状と変わらない気がしますけど」

「どうして、紫苑の性格が分かった？そんなに、話もしないだろ」「点滴をしている時に、もしかしてそつかなつて」

「点滴？」

「榊さん、駆血帯くけつたいを巻いた腕に必要以上に力が入っているし、針を刺した後は、異常にくらい掌に汗をかいしているんです」

「それがどうした」

「注射や点滴が嫌いな人に、良く見られる特徴なんです。でも榊さんは顔色一つ、態度も全く変えずに表面上は平静を装っていました」「それだけで判断するのは早計だろ」

「やせ我慢は、私が知る榊一族全員に共通する性格でもありますから」

「

不意に、院長が唇の端を緩める。

「お前に読み取られるようじゅ、榊の一族も脇が甘い」

自分が貶されたのか、判断に困る微妙な言葉だった。

あえて何も言わない方が良い気がして、再び箸を動かしはじめた。院長も、何も言わず同じように食事を再開する。

静寂の中、お弁当を食べながら、私はぼんやりと考えていた。

院長が、榊紫苑の話をいつもはぐらかす理由を。

恐らく、意図的になされているそれは、私が特別時間給で働く理

由につながつてゐるのだろうと思ひ。

だからこの一年の間、深く話を掘り下げる、院長に聞くような真似もしてこなかつた。

神紫苑に直に問うことも、意図的に避けてはきた。
良いアルバイトを失うのが、厭だつていうのが大きな理由だけど、それ以上に、深入りするなど、彼らに見えない境界線がある様に感じていたから。

神紫苑に対する第一印象もあつたから、余計に触れてはこなかつたけど。

でも、最近の神紫苑の様子を見ていると、それではいけないよう気もしてきた。

少しあつれているし、顔色もずっと悪いまま。

彼の治療は、院長にしては珍しく思うように進んでいない。

普段なら、常勤で来ているカウンセラーさんと連携もするのだけれど、時間外にこつそりやつてくる神紫苑にはそれも出来ない。駄目もとで、一度、神紫苑と話をしてみようかな。

彼が心を開いて話をするとは、到底思えないけれど。やらないうりはまし。

「…どうした」

院長の声に、はっとして顔を上げる。

お弁当を見つめたまま、手を止めていたらしい。

「なに海老天と見つめあつてんだ」

「いえ…ダイエットの為に衣を外して食べるか、欲望に任せてそのまま食べよつか迷つてました」

院長に言えば、余計なことをするなつて言われそうな気がして、あえてそっぽぐらかす。

「遠慮なく欲望に溺れる。ダイエットなんぞ考えなくても、必然的に痩せるように仕事を振つてやる」

「…鬼ですね」

「愛だと言え。うちの社員規定、忘れた訳じやないだろ?」

その言葉に、うつとなる。

うちのクリーナーは院長の独断と偏見で、男女問わず職員は、かなり容姿の綺麗な人がそろっている。

私の容姿は例外としても、美人どころが揃っているし…どこの社員規定に、個人個人に対してスリーサイズのアウトラインを設ける所がありますか?

妊婦さんになつた場合は除外だけど、規定を超えるサイズになつたらクビとか、あり得ない。

しかも、スリーサイズを見ただけで言い当てる院長に、偽りの自己申告など無意味だし。

院長曰く、体形変化は日々の自己管理ができているか否かを、観覚的に簡潔に判断する事が出来るから…らしい。

容姿に対するこだわりは強いけれど、仕事能力の無い外見だけのナルシストな人材は絶対に入れないから、院長の審美眼は悔れない。痩せすぎも「醜い」と言があるので、ベストバランスの維持は難しい。それでも体型維持を意識的に努めているせいか、職員はほぼ風邪ひとつ引かないから、健康管理にも役立つてゐるみたい。

侮れないわ、院長…。

「雑用係のお前に抜けられると、俺が面倒だからな」

「…『雑用係』を強調して言うの、止めてくださいよね」

「わがままな女だな…ともかく、明後日の午後は残れよ?」

「分かりました」

わがままは貴方の専売特許でしょ？と、言いたいのを飲みこんで、私は海老天を箸でつまみ、大きな口でかじりついた。

第三章 二人の俺

「お、伊織じやん。久しぶり」

雑誌の表紙撮影が終わった後、控室に戻ろうとスタジオの廊下を歩いていた俺を、神崎亮が呼びとめた。
亮は中性的な顔立ちで、しかも童顔。体型は華奢で、身長は平均値。

一見すると儂げな印象の男だが、ロックバンド『*b e l l a d o n n a*』のボーカルをやっている。

見た目に反して、性格も歌い方も、バンド活動もかなりアグレッシブ。

同じ事務所に所属している縁もあって、俺の一・二年上だが、良くなつるんで遊ぶ仲間もある。

「亮？ 何でお前が此処に？」

上坂伊織の時は、榎紫苑の時と違い、自然と言葉づかいや声音が変わるから、我ながら不思議だ。

「今度ソロで新曲出すから、これからそのインタビューと雑誌用の撮影…って、お前、なんか瘦せたか？」

亮が不思議そうに俺を覗きこむ。

最近、食事も満足にしていないから、体重がかなり落ちた。けど、それを人に言つことはない。

「ああ、すこし体を絞りこんでるからな
「それなら良いけど。最近お前付き合に悪いから、調子悪いのかと思つてや」

「違う。小さい仕事が多くて、時間が合わないだけだ
「じゃ、伊織はいつ暇だ？」

「そうだな…今日はこのまま私用があるから無理だな。一週間くらいすれば、夜は暇になる。何かあるのか？」

「あ？俺の連れの仲間に、お前のファンつて女がいるんだ。そいつがお前に会わせやつてやへんな」

思わず、失笑が零れる。

つまり、亮とは何のかかわりもない他人つてことか。

亮の表情からして、乗り気ではないのがわかる。

俺も同じように亮を紹介しろと言われたこともあるし、何となく、亮の今の気持ちは分かる。

「亮、俺の事ちゃんと言つてあるだろうな？」

「遊びでしか付き合わねえし、一度はねえつて？言つてあるぜ？それがでも良いからとか、何遍断つてもしつこいから、マジウザくへ。

野郎ならぶん殴れるのによ」

亮の直接的な知り合いなら、顔を立てて会つのは構わないのだが。正直、初めからつまみ食いされることを希望して、礼儀知らずに強引に会わせるとか言つ女は、下手に断つても、引き受けても面倒くさい。

だから亮も、断りつつも、俺に話を持ってきたのだろう。

「俺に彼女がいるから、無理って言つて」

その一言に、亮の一重の双眸が驚きに見開かれる。

「お前が、女を一人に絞り込む？あり得ねえ、ってか、信用されねえだろ」

笑いながらバンバンと俺の腕を叩く亮に、俺は首をすくめる。
そんなにあり得ないことかと、ちよつと自問してみるが、確かに
不似合いな気はする。

俺が女に本気になるなんて。

だが、それを亮に見透かされているのは、癪に障る。

「だいたい、本命の女なんていないだろ」

「俺の心を一年間、ずっと占めている女なら居るぞ」

「…つづそー」

大げさに驚いて見せた亮に、俺は鼻で笑う。
こいつをからかうと、おもしろいから好きだ。
もつとも、俺は嘘を言つてはいない。
ずっと気になつてゐる女性ならいる。
恋愛感情ではないけれど。

「何、片思い？プラトニック？お前が？マジか！お赤飯炊くか！」

なんだ、そのお赤飯つて。
祝い事レベルの話か？

「よし、分かつた！女の方は断つてやるから、その話、今度、じつ
くり聞かせるや。赤飯食べながら聞いてやつから！」

いや、何も分かつてないだろ、亮。

しかも、赤飯からい加減、話を逸らせ。

そんなに赤飯が食べたいのか、お前。

そう突つ込みたかったが、あまりに純粋に喜んでいる亮がおもしろくて、そのまま話を否定もせずに、今度、食事をする約束をして別れた。

§

マネージャーの熊井^{くまい}が運転する車の後部座席に、俺は座っていた。スマートガラスが張られた車内で、俺はカラーコンタクトレンズを外し、スーツからラフな格好に着替えを済ませた。髪型も少し崩して、服装に合わせる。

「伊織、その恰好すると、全然別人だなあ」

ルームミラーで俺の姿を確認した熊井が、鏡越しに人好きのする笑みを浮かべる。

学生時代、レスリングをしていた熊井は俺と同じくらいの身長に、かなり厳つくて怖い風体だが、気が優しく気の良いくらいマメな三十路男だ。

「目の色が違うだけで、結構印象つて変わるし」

「見慣れないからだろ」

「それにしたって、よく化けてる」

「上坂伊織^{かみさかいおり}が医者通いなんて、記事は嫌だからな」

仕事中は、ヘイゼルカラーのコンタクトを入れているが、俺の本来の瞳の色は、ブルーアッシュ。今はカラー・コンタクトを外している。

髪もダークブラウンに染めているが、地毛はブロンド。

眉や睫毛も合わせて染めるのが、結構面倒くさい。

仕事がらみだからそもそも言つていられなくて渋々、マメに手入れはしている。

髪の色だけは、個人的な外出するときはウイッグを使ってみたりする。

変装気分で、これはこれで楽しめる。

「こうして見ると、伊織に似た外国人って感じだな」

「クマもカラコンすれば？その体格なら、外国人に間違えられるぞ」「純日本人顔の俺がそんなものをして、気持ち悪いだけだろ」

「意外と似合うかもよ？」

「いや、遠慮しとくよ」

熊井は力なく笑いながらそう答え、しばらく無言で車を運転する。

「しかし、今の医者でいいのか？伊織、全然良くなつてないだろ？」

「…良くなつてないのは、十年前から同じだ。今に始まつたことじやない」

もつとも、熊井が俺のマネージャーになつたのは四年前で、それより以前のことを熊井は知らない。

昔は私生活からして荒み過ぎていたから、これでも随分、大人しくなつてまともになつた方だ。

「他の医者は悪化しかしなかつた。今の所は現状維持できる上に、点滴が上手い看護師がいるからそれで良い」

「まあ、腕が痣だらけにならなくなつただけ、ましな気はするけど俺は、あんまり不眠症の治療つてのは分からなかんなあ…」

何か変な病気かと思われるくらい、腕に痣を作っていた頃の俺を

知る熊井は、複雑な顔をした。

「それに古い付き合いの医者だ。俺の事を口外する真似もしないし、何かと融通も利くから楽なんだよ」

「お前が良いつて言うなら、良いけど…無理するなよ?」

「大丈夫だ…お前にそ、俺の体調気遣つて、こつそり仕事量を減らしてるだろ。上から言われないか?」

「伊織がぶつ倒れたら、話にならないだろ? その辺は、上手く上に話をしてあるから。とりあえず元気になつてくれよ」

「…努力はするよ」

努力でどうにかなるのなら、医者なんていらないけどな。
ここ十年、心地よく眠れた記憶はない。

疲れきつて、意識を失うようにわずかに眠るか、浅い眠りで訳のわからぬ夢をエンドレスで見続けてぐったりするか。

眠ることが苦痛で仕方がない。

けれど眠れない、記憶力が落ちる。

仕事に影響するのが、不眠の最大の難点だ。

俺は、ビルの群生する狭い空を、何となく見上げる。

久しぶりに見る真昼の太陽は、相変わらず主義主張の激しい熱さをまき散らす。

夏らしい夏を過ぎさなかつた俺に、まるで夏を味わえとばかりにジリジリ照りつけてくるよううつで、うつとうじ。

暑苦しいのは嫌いだ。

暦の上では初秋に差し掛かつたのだから、暑さも太陽も大人しくなれば良いのだ。

思わず舌打ちし、その音ではつとなる。

「…マジか」

「どうした?」

「なんでもない」

額を抑えながら、深いため息が漏れる。

くだらない事で苛立つた自分自身に、呆れた。

健斗の経営する病院から少し離れた所で車を降り、俺は時間つぶしの為に近くにあったコンビニに入った。

まだ一三時少し前。

健斗と約束をした時間には、まだ時間がある。

今日は平日だ。あまり早く行って、余計な職員と顔を会わせたくなかつたから、何を買う訳でもなく、時間つぶしで少し店内を見て回る。

いついた場所にすら滅多に入ることはないから、見ているだけでもわりと面白い。

最近は、ATMがコンビニの中にあるとか、栄養ドリンクが売られているとか、弁当もわりと種類が豊富なんだとか、俺がCMに出た事のある菓子があるとか…

そんなことを思いながらぶらぶらする。

“あれ…”

ペットボトルの陳列してある冷蔵庫の前に、見慣れた白衣の後姿がある。

すらりとした長身に、ショートの髪。

俺はそっと、相手に近づいてみる。

ガラス扉越しに映る相手の顔を見て、当人だと確信する。彼女は何やら真剣に、陳列されたペットボトルを眺めている。

「不経済だわ…」

ぼそりと呟いた彼女の隣に、黙つて立つと、相手は不思議そうに俺を見上げる。

「わっ、わ、神さん！ 何で……」

一歩身を引いて、心底驚いた顔をする吉良に、俺も驚く。
そこまで驚くようなことなのか？

「…何が不経済なの？」

「コンビニで、スーパーと比べると、どうしても値段が高いんで
すよね……」

「そうっ！」

俺は「コンビニでも、スーパーでも買い物をほとんどしないから、
どう違うかなんてさっぱりわからない。

「で、何を買つつもりだったの？」

「院長の食後のコーヒーを煮てるためのお水です。お水の銘柄を変
えると、途端に機嫌が悪くなるので……」

そう言いながら、ガラス張りの大きな扉を開き、一リットル入り
のミネラルウォーターを手にとつて、買い物籠に入れゐる。

「神さんは何を買われるんですか？」

「俺は良いの。時間つぶしだから」

「時間潰し？」

「約束した時間より、ずいぶん早く仕事が終わつたから」

「そなんですか…お昼ご飯はもう食べられました？」

「あ…まだだけど」

吉良は、不意に破顔する。

「よかつた。院長に言われて、お弁当を三人分作ってきてたんですね
よ」

普通、単なる看護師が医者に言われたからって、そんな物を作つて持つてくることなんてないよな？

健斗にいたつては、そもそも女の手料理は嫌いなタイプだ。
俺が知る奴の歴代の彼女にすら、手料理を作らせない。
作られても、絶対に食べない男だ。

一体、健斗と吉良の関係はどうなつているのだろう。

この間は、否定していたけど、どこか怪しい。

不倫していようが恋愛していようが、特殊な関係だろうが、俺には関係の無い話だから、普段はあまり他人に対して興味がわかないけど、吉良のことはどうしてか気になる。

俺の周りに居た女とは、どこか違うせいかもしれない。

「たぶん、榎さんは何も食べずにくるはずだし、自分は忙しくて外で食べる時間もないからって、ほぼ脅迫的…あ、いえ、何でもないです」

レジへと歩きながら、俺に説明していた吉良は、途中で言葉を濁した。

困った顔をしているあたり、本当に脅迫まがいに命じられたのだる。

レジで会計を済ませ、長財布に小銭とレシートをしまつて、吉良を見ながら、俺はレジ袋に入れられたペットボトルを手に取つて、先にコンビニを後にする。

その後を、吉良が慌てて追いかけてきた。

「神さん、すいません。荷物持ちます」

手を差し出してきた吉良に、俺は立ち止つ、手をのばして吉良の
その細い手を握る。

吉良が一瞬、その握つた手を見て固まり、俺を見上げてきた。

「これは、何の冗談でしょ?」

「女人に荷物を持たせるなんて、男のすることじやないでしょ」

「そうじゃなくて……」

つながった手を持ち上げ、吉良はそれを強調するよつこ振る。彼女の表情が、どことなく険しい。

「これです、こ、れ」

「なに？ 指をからませる、恋人つなぎの方が良かつた？」

「…違います。どうして、手を繋ぐんですか？」

「出された手を、手ぶらで返すのも何だから」

呆れたよつな顔をして、吉良は俺を見る。

「その発想が分かりませんから。素直に手を離して、荷物を下さる」

「やだ」

「…その返事は、私が嫌です」

「」の俺と手を繋いでいるのに嫌だなんて、一体、吉良の感性はどうちらを向いているのだろうか。

女性受けは良いと自負しているだけに、吉良のこの反応は俺の自尊心を傷つける。

「つ、ちよつと、榎さん…？」

俺の手を一生懸命振りほどくとする吉良の手を引くよつこ、俺は歩き出す。

初めは少しだけからかって遊ぶつもりだったけど、気分が変わった。

照れるか、少しでも嬉しそうな顔をしたら、すぐに手を離すつもりだったけど、露骨に嫌そうな顔をされると、意地でも離したくなかった。

「わ、榎さん、ほんと困ります……」わい、ませー

吉良は手をつないだ恰好のまま、不意に俺の背後に纏れて止まる。俺は彼女のせいで後ろに引っ張られ、吉良とぶつかるまつして立ち止る。

俺に背を預けるようにした吉良が、「だから、困るって言つたの」と、力なく囁いている。

何事かと思い前方を見れば、あんぐりと口を開けた女がいる。年齢は三十代半ば、一般人としては文句なしに洗練された華やかな容姿をしている。

「…誰？」

「同僚です……」

吉良が答えると同時に、少し先にいた女性が駆けてくる。女性はものすごい勢いで駆け寄り、俺の背後に回り込む。

「あげははーん、何で隠れてるのよーー！」

“あげははーん、ああ、名前か”

期せず吉良の名前を知った俺は、吉良に向き直る。手は繋いだまま

卅。

「やだもー、彼氏と制服デートなんて、マニアックすぎーーー
「あ、綺子さん、痛い…」

絢子という女性に、肩をばしばしと叩かれ、吉良は困った顔をする。

「彼氏なんていないって言つてたのに、あげはけやんつたら～」

「あの…絢子さん…この人…彼氏じゃ…」

「またまたあー！こんなイケメンと、手つなぎ『トートしながら何言つてるの。ほれ、お姉さまに紹介して『ごらんなさい』」

何というか、あまり人の話を聞かない感じが、俺の苦手な人に似ている。

俺は、相手に愛想よく笑みを浮かべる。すると、相手は俺の顔をまじまじと凝視する。

「…貴方、上坂伊織に似てるわね？」

一瞬、背筋が冷える。

そう言えば、健斗が『受付の絢子』という女性が、俺のファンだと言つていたな。

多分、この女性がそうなのだろう。

とりあえず、かわさなくては。

「What? Say it again.」

首をかしげて尋ねると、一瞬にして相手は固まる。

おおよその日本人は、流暢な英語で問われると思考回路が停止する。

「絢子さん、この人、日本語が通じないみたいで、手を離してくれないの…助けて？」

俺に話を合わせてくれたけど、本当この状況を何とかしてほしいのか、吉良の言葉は相手に縋る様だった。

「む、無理無理無理っ！失礼しますう」

「あ、絢子さん…」

勢いよく踵を返した相手は、猛ダッシュで走り去った。

思惑通りだ。

悲壮感たっぷりの表情で相手の後ろ姿を見送っていた吉良は、ちらりと俺の方を見る。

物言いたげな表情で俺を見た後、深いため息と共に視線を逸らす。

「あ…絶対、絢子さんに勘違いされたわ…」

「俺が相手じゃ不服？」

「不服以前に、セクハラですから」

「手を繋いだだけで？」

「セクハラって言つのは、受けた側がそう感じたら、確定するんです」

す

つまり、俺にこうされるのは不愉快だと言う訳だ。

嫌がられているにも関わらず、俺は何故だか愉快な気分だった。

記憶のどこを辿つても、女性から拒まれた記憶がない。

じつこいつ吉良の反応は、新鮮でいい。

「いい加減に、離してくれませんか？」

「嫌だつて言つたら？」

刹那、クリニックのある方に顔を向けていた吉良の表情が歪む。口角を緩やかに釣り上げたそれは、いつも仕事で見せる人好きのする微笑み。

「…院長の点滴、痛いでしょ？ ねえ…」

ぼそりと呟かれた言葉に、思わず俺は吉良から手を離した。吉良はそのまま一人で歩きだす。

“なんだ？まさか、俺が注射苦手だつて、気付いているのか？”

単に、注射の下手な健斗に点滴をさせよつと田諭んでいるだけだろうか。

いざれにしても、ただの牽制にしては悪意を感じる。心臓が早鐘を打つて、嫌な汗が止まらない。

これまでの優しく人当たりの良い印象など、一瞬にして消し飛んだ。

考えてみれば、わがままな健斗の下で屈せずに働けるくらいだから、単に優しいだけの弱い人間ではないはずだ。

“これだから女は恐い”

色々な意味で、吉良は俺の予想を裏切ってくれる。

「神さん。水を早く持つて帰らなこと、院長に叱られてしまひんどうけじ」

少し先で足をとめた吉良が、俺を振り返る。

普段と変わらぬ表情で。

彼女の手は、俺に差し伸べられる。

それは、レジ袋を渡せと言つてこむのだらう。

吉良も意外と、頑固な性格をしてこむが、俺も俺の信念を曲げるつもりはない。

俺はそのまま歩き出しつゝ立ち止つてこの距離を追い越していく。

「あ、ちゅうと、神さん…」

少し大股で歩けば、歩幅の少ない吉良が少し早歩きで付いてくる。

「袋、持ちます。貴方に荷物を持たせたり、院長に叱られます」

「そう言つなら、賭けてみる?」

歩きながら吉良を見れば、彼女は不思議そうな顔をしてこむ。

「賭ける?」

「俺は、俺が荷物を持つていても、健斗が文句を言わない事に賭ける。吉良さんの予想が当たつていたら、俺は吉良さんの話つことを一つだけ、聞くよ」

「そんな一方的…」

「勿論、俺の予想が正しければ、吉良さんは俺の話つこと、一つ聞いてよ?」

「…それって結局、神さんが荷物を持つ事になつませんか?」

健斗も女に荷物を持たせるような真似はしない。この賭けは必然的に俺の勝ちだけど、吉良は単純に まだ俺が荷物を持つことここだわっている。

自然に、自分の顔に苦笑いが浮かぶのがわかる。

俺の周りにいる女は、大抵、男に持ち上げられることに慣れていて、男を道具程度にしか考えていない。

荷物を持たせることなど、一抹の疑問も浮かべない。

吉良はなんというか、男への甘え方を知らない。

男慣れしていないのか、可愛げのない性格なのか…それとも、

「健斗に怒られるのが嫌？」

「そうではなくて…顔色の悪い人に荷物を持たせるのは、看護師としてはちょっと…それに、院長は貴方に荷物を持たせた事を叱ると思いますから、たぶん、私の方が賭けに勝つと思います」

言い辛そうに、吉良は答えた。

言われて俺は自分の顔に触れる。

「俺、顔色悪い？」

「…もしかして、自覚ないんですか？」

つまり顔色が悪いから、持たせるのは嫌。そして、自分が賭けに勝つから嫌。という構図なのか。

“なんかムカつくな”

何故ムカついたのか、自分でも分からず首をひねる。

「あ！」

吉良が思わず声を上げ、俺は吉良の視線の先を見る。

いつの間にか、俺たちは吉良の勤め先のあるビル近くにいた。ビルの入り口で、俺たちを見ている男の姿がある。

紳士的な服装をしているのに、煙草を咥えながら不機嫌丸出しの従兄弟は、さながら暴力企業の若頭の居住まいだ。

「遅い！俺のコーヒーを早く淹れろ！」

吉良を見るなり、コーヒー中毒の健斗がそう言い放てば、吉良は苦笑する。

「コーヒーがないと、院長、いつもこんな感じなんですよ」

そう言えば、昔健斗が一人暮らしをしていたマンションに居候した時も、コーヒー切れを起こすと良くキレイていた。

健斗は、キレると口より手が出る。そのせいで、それで何度も健斗と殴り合いの喧嘩になつた覚えがある。

今は文句を言ひ程度なのだから、健斗にしたら随分良心的なキレイだ。

男と女でキレ方が違うのは、流石、フリーストと叫つた所だ。

「あれならまだマシなレベルだよ。酷くならないうちに、コーヒー飲ませてやつて」

「荷物、運んで下さつてありがとございました」

吉良はそう言って、俺が差し出した手から「コンビニの袋を受け取つて、ビルの中へと小走りで入つていく。

健斗は携帯灰皿に煙草を押しつけて火を消し、近付いた俺を見る。

「そんな顔色をしてる時くらい、吉良に荷物を持たせとけ」

「は？ 健斗、熱でもあるのか？」

「莫迦か、お前は。少しは自分の体調くらい自覚しろ」

従兄弟にそう言われて、睨みつけられた。

まさかの俺叱られで、俺は自分が提案した賭けに負けた。

第四章 美形との食事はろくでもない

カウンセリングルームの机上に広げられた重箱。

二人掛け用のテーブルセットに、椅子を一つ持ち込み、小さめの正方形のテーブルいっぱいに広げられた三段のお重。

中身は、量より数、数より見た目、見た目より味の院長の要望で、和食が中心。

里芋の煮物、お浸し、ひじきの煮つけ、だし巻き卵等々…普通の家庭料理ばかりで、自分で言うのも何だけど地味。

でも、今回は珍しく院長から海老フライ、唐揚げ、ハンバーグのリクエストもされたので、しつかり納めてみた。

ご飯はフリカケ類をまぶすと、「米の味を殺す気か」と、院長からクレームが来るけれど、うす塩味のおにぎりと、紫蘇のおにぎりを半分ずつにした。

ピクニック用の紙皿と割り箸で、すこし色気はないけれど、その代わりに部屋には稀有な一人の美形男子がいる。

私の両隣、左側には院長、右側には榎紫苑。知らない人が見れば両手に花状態。

その見目だけは文句なしに優秀な男一人は、何故だか子供みたいな喧嘩しながらご飯を食べている…。

「お前、まだ少し巻き卵食べやがったな」

「ケチくさい…まだたくさんあるじゃないか」

「いいや、減る…」

「…どれだけ卵が好きな訳、健斗」

「お前は、他のもんでも食つてろ。ニンジンとか、ニンジンとか、ニンジンとか」

「良い大人が、嫌いなものを俺に押し付けないでよ」

「オレンジ色の悪魔を、俺の皿に入れるな！」

「ちょ、俺の皿に移すなよ！俺だって、ニンジン嫌いなんだよつー」

私は一人のやり取りを聞きながら、緑茶を淹れた急須を持ち、三人分の湯飲みにお茶のおかわりを注いでいく。

“ 大きな子供ね、これじゃ… ”

四捨五入したら四十代の男と、二十五を迎えるであろう男の口喧嘩とはとても思えない。

しかも、黙つて立つていれば十人中九人は見惚れる美形の男なのに。

全力で人参の擦り付け合いをするなら、そつと重箱に残してくれればいいのに、どうあつても相手に片付けさせようとする気が双方にありありと見える。

それなりに付き合いは長いけど、こんなに子供っぽい院長を見たのは、初めてかも。

榊紫苑も、なんだか楽しそう。

顔色が悪いから食欲もないかと思ったけど、わりと箸の進みは良くてすこしほつとする。

お茶を配りながら、そんなことを考えていた。

既に、重箱は殆ど空。

気持ちいいくらい綺麗に。

作りがいのある食べ方をしてくれる人たちに、無意識に笑みがこぼれた。

もし兄弟がいたら、こんな感じで、「飯とか食べてたのかな。

私は一人っ子で、共働きだった両親とも一緒に食卓を囲んで「」飯をしたつていう記憶もあんまりない。親戚とも疎遠だったから、賑やかな食事をしている田の前の一人のやり取りが羨ましく思える。話しあえる兄弟がいたら…私と両親の仲も、もっと違う形になつていたかもしれない。

でも、それは全て仮定の話。

考えても、今の現実は変わるものじゃないし…。

「…吉良さん？」

呼ばれて、我に返ると榊紫苑と院長が私を見ていた。
どうしたんだろう。

「…何か？」

「泣きそうな顔しているよ？」

言われた意味がわからなくて、私は首をひねる。

「…そうですか？」

二人は同時に頷く。

「そんな、息ぴったりで肯定しないでください」

何を思つたか院長は、箸でだし巻き卵をはさんで持ち上げ、私の前に出す。

「口開ける」

「…はい？」

「泣きそうな顔をするくらいなら、欲しいと、はつきり言えば良い

だろ？」

「違いますよ…。それは、院長が遠慮なく食べてください」

卵焼きを物欲しそうに見ていた訳ではないのに、院長は手を下げる。険しい表情のまま私を見ている。

「男が一度、女の前に出したものを下げるか。さつさと口を開ける。皿は出すなよ」

つまり、私の意思に關係なく、このまま口に入れつつもりらしい。恋人でもないのに、そんな真似なんて無理！ 恋人でも恥ずかしくて死んじやう。

でも、そんな動揺を悟られると院長に遊ばれるので、努めて冷静に返答をする。

「…新手の嫌がらせですか？」

「俺に対するお前の愛を、試してやっているんだ」

愛とか、意味が分かりませんけど、院長…。絶対に確信犯の嫌がらせだと分かり、私はちらりと榎紫苑を見る。ものすごく怪訝そうな顔をして、私を見つめている。この表情は、一〇〇%誤解している顔だわ。

「なに、やつぱり付き合つてるの？」
「違う…」

言いかけた時、立ち上がった院長に突然、左側に顔を向けられる。何事かと思えば、口の中にだし巻き卵が入った。

「……」

私の顎を捉えていた院長がニヤリとした瞬間、そのまま院長の顔が近付いてくる。

かわす間も無いまま、院長は私が咥えていた卵焼きに齧りつく。唇に触れるか触れないかの、際どい所まで近付いていた院長は、すぐに離れる。

だし巻き卵の大半を奪い去つて。

あり得ない事態に、体と思考が凍りつく。

院長は何事もないかのように、奪い取つた戦利品を食べ、淫靡に笑う。

あんぐりと開いた私の口から、ポロッと残された卵焼きが落ちる。

「勿体ないことするな」

なんなの、今日の院長は！

いくらなんでも、嫌がらせの度が過ぎている。

“「…こんな恥ずかしい真似、よくも…。」”

その場から立ち上がった私は、力の限り叫んだ。

「セクハラつ！変態つ！口親父つ！何考えてるんですかーーーっ！」

「つれない事を言つたな、honey。」

「誰がhoneyですかつ！人で遊ぶの止めてくださいって、前から言つてるじゃないですかあつ！」

「真つ赤な顔して、初だな」

私の怒りなんてまるで歯牙にもかけず、鬼院長は不敵に笑い、榎紫苑は何を思ったか大爆笑していた。

§

「はあ…」

何度もため息だらつ。

給湯室で紅茶を入れていた私の口から出るのは、もうため息しかなかつた。

あんな嫌がらせをするなんて、水を買いに行つた帰りが遅かつたことを、院長は相当根に持つてゐるに違ひない。だからと言つて、あれはあり得ない。

「…はあ」

「吉良さん、そんなに溜息つくと、幸せが逃げるよ？」

鼻梁に香水の香りが届いたと同時に、不意に右の耳元で声がして、慌てて目の前のティーカップから声のする方に顔を上げる。

吐息がかかるほど近くに、榎紫苑の綺麗な顔がある。

「なつ！」

思わず仰け反れば、手に持っていたチャイナ・ボーンの紅茶ティーポットを危うく落としそうになる。

ナルミ製の、ミラノのティーポット。

“一つい二万円弱！”

危ない以前に、物の値段が脳裏をよぎり、一瞬にして血の気が引く。

私の掌からティーポットが零れ落ちるより早く、私の両脇から腕が伸びて、ティーポットは私の手ごと大きな男の掌で支えられる。中身は既にティーカップの中に注がれていて、零れることも、火傷することも無かつた。

「危ないよ？」

「良かつたあ…ありがとうござります。二万円が昇天する所でした」

とりあえずティーポットが死守され、ほっと安堵した。

ティーポットをチェックして、破損もなかつたので弁償と言つ大事には至らない。

良かつた。

それにもしても、今日は何なの?厄日なの?

イケメンに絡まれても、正直、あまり嬉しくはない。好みじゃないから。

彼氏がいた頃は、同僚や院長夫妻からは、もつまし顔で男を選べとよく言われたつけ。

私はどちらかと言ひど、ほつこりとする親しみやすい愛嬌溢れる容姿の方が好きなのに、どうして駄目なのかしら。男は顔じゃないと思うんだけどなあ…。

「吉良さん？」

「え？ あ、はい、何ですか？」

考え事をして少し意識を飛ばしていた私を、榊紫苑は不思議そうな顔をして見ている。

「…吉良さん、やっぱり面白い発想するよね？」

「どうしてですか？」

「どうして…って…俺、自信なくなるよ」

苦笑した榊紫苑の言葉の意味が分からず、私は首をひねる。

「こんなに傍にいて、何にも感じない？ 俺、そんなに魅力ないかな？」

言われて、気付く。

抱き締められるような恰好になつていること。

密着し過ぎて、背後から伝わる体の大きさと、温もり。覆いかぶさる、見た目に反した男っぽいじつした手の感触に、変に相手を意識してしまい、一気に心臓が暴れだす。過度の接触による緊張で、体が強張る。

「や、榎さん、ち、近いですけど……」

いつもはしない榎紫苑の香水の香りが、鼻梁をくすぐる。間近にいることで、意識しなければ感じない程度の香りも、強く感じる。

通常よりもかなり薄い香りになつていて、この独特な香りの

ノートはシャネルのエゴイスト。

本来は名前そのままに自己主張の強い香りで、こんなに弱い匂いではないのに。

榎紫苑が纏うこのエゴイストは、控えめだ。

“どうしてだね？…って、違うー。”

自分が、他事で現状をはぐらかそうとしている事に気付く。思つた以上に動搖しているみたい。

けれど、見目の良いこの年下の男は、慣れたように微笑みかけてくる。

この程度の接触は日常茶飯事ながまるわかりな相手の平然さが、

何だか悔しい。

「吉良さん、ちっとも俺の事を気付いてくれないんだね？」

「や、気付きましたから、離れてください」

榎紫苑は、そのまま手を離し、私からすんなりと離してくれた。私は内心で安堵して、そつとティーポットを台の上に置くと、相手に向き直る。

「それで、私に何か？」

「今日は点滴をしないで帰るよ」

「え？ ビックリですか？」

そもそも、点滴だけをやりに来たはずなのに、ビックリして？ 考えて、一つ思い当たる。

コンビニの帰り道に、不愉快任せに意地悪を言つたことを。

「もしかして、院長が本当に点滴すると思つてますか？」

「それ、一瞬、本気にしたけどね。そういう理由じゃないから」

「お仕事ですか？」

「…単に、『飯を食べて元気が出たから、こらなくなつただけ』

そういうはなつても、顔色は全然、良くなつていないので。じつと、相手の顔を見れば、榎紫苑は愛想笑いをする。

「健斗も、今日はしなくて良いつて言つてくれたし」

「…そうですか。それなら良かつたです」

点滴なんてしないに越したことはないし、院長がそう判断したのなら、私が口を挟む事でもない。

「吉良さんのおかげかな」

「私の?」

「うう。料理上手なんだね。弁当、美味しかったよ」

お世辞でも、褒められれば、現金なもので嬉しい気持ちになる。

「お口に合つて良かつたです」

「ずっと外食ばかりだつたから、手料理も、あんなに食べたのも久しぶりだよ」

恐らく、榎紫苑は食事も満足にしていなかつたに違いない。

この顔色の悪さは、不眠だけが原因とはとても思えない。

不眠が続ければ、身体バランスを崩して食欲さえ失くしてしまう。だから院長は、私にお弁当を作らせたのだ。

彼が食事をするように。

榎紫苑が食べていたのは、ほぼ洋食。

和食は出し巻き卵くらいしか手をつけていなかつたから、院長がリクエストしたメニューは、彼の好物なのかもしれない。

「外食だけじゃ、体に悪いですよ?」

「俺、料理できないから」

「彼女さんに、お願ひして作つてもらつたらどうですか?」

何気なく言つたその一言に、榎紫苑は首をすくめる。

「俺の付き合つ子、みんな料理が出来ないんだよね」

「…そ、そうですか」

どれくらいの人数と付き合つたのかは分からぬけれど、一様に

料理が出来ないなんて、ものすごい確率。

もしかして、手料理 자체が好きじゃないかも。院長みたいに。
だから、出来ない相手を選んでいるのかしら？

「今日は楽しかったよ。美味しいご飯も食べられだし、笑わせても
らつたし」

「あれは、笑い事じや…」

「あそこまでされるのに、健斗に靡かないなんて、よっぽど彼氏に
惚れているんだね？」

榊紫苑の言葉に、私は首をひねる。

「彼氏？」

「違うの？この間来た時、慌てて帰ったから、彼氏とパートかと思
つていたけど」

「あの時は、美菜先生のご実家が経営されるエステサロンで、マッ
サージの講習があつて遅刻厳禁だつたんですね」

美菜先生と聞いた途端、榊紫苑の頬がピクリと引き攣った。

「美菜先生つて…健斗の奥さんのこと?」

「ええ」

「もしかして、美菜様とも交流があるの?」

美菜…様?

何で様付けなのだらうかと思ひながら、私は頷く。

「美菜先生繫がりで、院長と知り合つたようなものですから
「仲…良いの?」

美菜先生の信奉者か、苦手なのか、榎紫苑はどちらだらう。
前者だと返答の仕方を間違えると、捻じれた嫉妬を浴びる」とこと
なるから、注意して答えないと。

「時々、職場での院長の様子を報告はしています。榎さんは、美菜
先生と仲がよろしいんですねか?」

さし障りのなさそな事実を伝えて尋ねれば、年下の美青年は力
ない笑みを浮かべる。

「健斗と仲が良いから、色々、気にはかけてくれるけど…あの人の
愛情表現つて、何というか独特だから…」

言葉を濁したけれど、表情から察するに、彼にとつて美菜先生は
苦手な人のようなだった。

美菜先生はものすごく美人で、男性に良くもてるけど男性嫌いで、愛情表現が下手。女性にはそんなこと全然ないのだけど。

外見が華やかで歯に衣着せぬ率直な言葉もあって、特に男性には『女王様』みたいだつて誤解されがちなのだけじ、細やかな配慮が出来る素敵な人。

…シンデレって、院長が言っていた気がする。
シンデレがなにか、知らないけれど。

「でも、エステを受けに行くんじゃなくて、マッサージの勉強つてどうこいこと?」

「院長命令なんです。アロマテラピーとマッサージを使った不眠治療法の勉強をかねて…」

反射的に答えて、しまったと思う。

まだ、正式にクリニックで取り入れるとも決まっていない話なのに。

「アロマ?ああ、だから、吉良さんラベンダーの匂いがするんだ」

言われて、思わず自分の腕を寄せて匂いを嗅ぐ。自分では良く分からぬ。

「…匂います?」「近付くと、少しだけ」

私の姿を見て、榎紫苑は穏やかに笑う。

「ラベンダーと何か別の匂いもしたけど、その時で香が違うし、何か分からなくて。ずっと気になっていたんだ」

「それならたぶん、クラリセージかマンダリンです。寝室用で調香

したルームフレグラムの配合で良く使うのが、その一種類なので「調香?」

「香りを掛け合わせるんです」

「そんなことができるの?」

「エッセンシャルオイルがあれば…簡単ですよ?」

「ちなみに、何の効果があるの?」

「どの香にも一応、リラックス効果がありますね。気分が落ち着くと睡眠導入が行いやすくなるので、寝つきを良くしたい時に、体調に合わせてラベンダーベースで香を変えます」

流石に、クラリセージに通経作用があつて月経不順に効くとは言えないんだけど、ちゃんとリラックス効果もあるし、嘘は言つていな

「…それ、効く?」

珍しく興味津々な相手に、私はすこし言葉を考える。

アロマオイルの原料にもなる薬草は、今の様な化学薬品が発達していない時代は、医薬品として様々な形で用いられてきた。だからこそ、効果が気休め程度のものではないことは確かだけれど、過度の期待を持たせるのも危険。

「精神的な昂りやストレスで眠れないのなら、効果があるかも知れませんね」

「曖昧に言うんだね?」

「匂いの好みや体质もありますし、神経が異常に昂っていても効果は薄れます。万人に等しく効果を發揮するという訳でもないんですよ」

「ふーん」

神紫苑は、納得したような、しないような表情で私をじっと見下ろしていく。

「興味があるようでしたら、此処にも一応いくつかエッセンシャルオイルがありますから、試しに好みの香りを合わせてみますか？」

「…せつかくだけど、止めておくよ。俺の不眠の原因には効きそうにないから」

そう答えて、神紫苑は苦笑する。

彼の不眠の原因は、いったい何なのだろう。

尋ねようかとも思つたけれど、笑みの中に触れてほしくないとう明らかな拒絕もあって、私は言葉を飲み込んだ。

「でも…」

不意に神紫苑が近付き、思わず私は後退るけれど、シンク台に背後を阻まれる。

相手の指先が私の左頬を、撫でるように触れる。

私を見下ろす男の表情に笑みはなく、驚くほど真摯な顔をしていた。

神一族の美形に見慣れた私でさえ、神紫苑の卓越した美貌に息をのんだ。

相手の手を、振り払つことを失念するほどに。

「貴女にはとても興味があるから、色々、俺だけに貴女のこと教えてほしいな

低く囁かれた声はひどく淫靡で、乙女の心蕩かす様なその文句の後、新たな衝撃が私を襲つた。

重ねられた唇に、私の理性が粉々に砕け散つた。

アロマなママ知識メモ

クラリセージには女性ホルモン（エストロゲン）に似た成分が含まれているので、月経周期の乱れや更年期の様々な症状を和らげる効果がある、女性向きな精油とされています。

ただ、月経を促す作用があるので、妊娠中の方はご使用にならないでくださいね。

§

「…お前、紫苑を引っ叩いたのはどうこうア見だ」

院長は治療室の机に肘をつき、私を睨む。
私はうつむいたまま、返す言葉もなかつた。

「仮にも患者に手を上げるとほ、どうこう神経してやがる」「すみませんでした」

あの後、私は思いつきり神紫苑に平手を打つた。
言葉だけなら我慢できる。でも、キスまでされた。

冗談やからかいの類にしては悪趣味で、普通、相手は殴られても文句は言えない程度の。

私の最大の誤算は、私が勤務中で、相手は『患者』だつた事。
いかなる事情であれ、『患者』に手を上げるのはご法度なのに。
神紫苑は、左頬に大きな紅葉マークをつけて帰つて行つた。

「…クビにしてください」

院長からクビを言い渡されても仕方ないどころか、私が手をあげた相手は神の名のつく人。私の首を切らないと、院長の立場さえ危うくなってしまう可能性がある。
院長が深いため息を漏らす。

「お前、そんなに紫苑が嫌いか？」

「……」

「おい、顔あげろ」

そつと顔を上げれば、院長は椅子に座れと手で指示する。私が椅子に座れば、院長は眼鏡をはずして椅子に深く背を預ける。

「理由は何だ？お前が手を上げるなんざ、余程の事だろ？」

「……榊さんは、何もおっしゃらなかつたんですか？」

「紫苑はお前を咎めるなと言つただけだ。お前の事だから、あいつに手を挙げて俺に何か実害が及ぶとでも考へているだろ？が、その点の心配はない」

さすがにばつが悪かつたのか、榊紫苑は院長に何も言わなかつたらしい。

「でも……」

「そもそも、全面的にあいつが悪い以外に、理由が浮かばん

“え、断定つてどうこうこと？……そんなに榊紫苑は問題児なの？”

ものす”く不安が心をよぎった瞬間、院長が机を人差し指でこいつと叩ぐく。

「キスでもされたか？…しかもティープなやつ」「なつ！」

なんで分かったのだろう、この人。もしかして、見ていたの？

「あいつ、三日でさえ我慢できねえのか…」

狼狽すれば、院長は呆れたようにため息をつくと、ぼそりと何かを呟くけど、声が小さ過ぎて聞きとれない。

「院長？」

「あ？まあ、食われなくて良かつたな？」

「ど、どういう意味ですかっ！？」

衝撃発言に、私は思わず椅子から立ち上がる。

「榊一族の男を前に、油断したお前も悪い」

油断も何も、キスをされた意味さえ、私には分からない。もし分かる人がいるなら、ぜひ私に教えてほしい。

そもそも、榊紫苑が恋人でもない相手に、簡単にキスできるような節操なしだって知っていたら、絶対一人つきりになんてならなかつた。

「ホント、榊一族はケダモノばっかりですね」「さらつと毒を吐くな、吉良」

苦笑した院長は、頬杖をつきながら私をじっと見据えていた。

「紫苑の奴は、巧かっただか？」

「…何がですか？」

「kiss」

発音良く放たれた言葉に、脳裏に強制的に排除していた榊紫苑との情景が思い出される。

刹那、自分の顔が一気に熱くなる。

思い出したが最後。羞恥心で心臓が止まりそう。私は赤くなっているであろう顔を両手で隠して、身を屈めるように俯く。

「あ、あんなのもう、キスなんかじゃありませんっ！」

死んだって、巧かつたなんて言えない。

あんな官能的な口づけをされたことなんて、人生初。

気持ち良すぎて抵抗する気さえしばらく失せてしまったなんて、絶対言えない。

嫌だったのに、そんな風に思った自分がすごく恥ずかしい。

「どれだけエロティックなやつをされたんだ、お前…」

「き、聞かないでください！恥ずかしすぎて、死にそうなんですか

ら」

手を少し下ろし、顔を上げて院長を恨めしげに睨めば、院長はしかめつ面をしたまま、子供にするように、私の頭を優しく撫でる。

「犬に咬みつかれたと思って、さつさと忘れる」

「大型犬に咬みつかれたら、一生物のトラウマです…」

「だからと言って、特別診療からお前を外さないぞ」

「…看護師なら、私以外にも結城さんや、松波さんが居るじゃないですか…」

相手が榎一族だから、患者として接し辛いのはあるだろうけど、点滴だけなら、私でなくてもかまわないはずなのに、院長は鋭く私を睨みつける。

「紫苑の相手はお前以外、無理だ」

「どうしてですか。注射嫌いの榎一族なだけじゃないですか」

「…お前みたいな鈍い女でなければ、勤まるか」

意味不明なことを言われ、私は思いつきり首をひねった。
鈍いって何ですか、鈍いって。

納得がいかないまま、話は院長に押し通された。

院長の言っていた意味を私が知ることになるのは、それからもつと先の事…。

第五章 それを人は氣の迷いと言つ

自分が女に対して、節操がないと言つ自覚はある。それでも、その氣のない相手に手を出したことはないし、自分から手を出すことも、ほとんど皆無だ。

言い寄る女も、後腐れがない相手を毎回、選んで遊んできた。それは、致命的なスキャンダルを回避するための鉄則だ。

大なり小なり、芸能界に入っている人間は生き残るために打算的に動く。

いわば処世術だ。

その中で、「恋人」関係になった相手もいたが、どれも長続きはしなかつた。

『優しくしてくれるけど、本当に私のことを愛してる?』

と、言つのが別れた彼女たちに共通する台詞だ。
当然だ。

俺は、本気で惚れたことなど一度もない。愛した覚えも、愛された覚えもない。

血を分けた両親にさえ。

こと母親に関しては、快い感情はない。

女性という生き物を、俺が冷めた目でしか見られないのは、母親という人生最初に接触した異性の印象の悪さだろう。

世の中には、子供を愛せない親もいる。親を愛せない子供も然り。

「」の見栄と金の為に生き、子供を装飾品の様に扱い病にかかる扱いに困れば捨てて行方をくらませそれっきり。

親としてどころか、女としても奔放過ぎた自分の母親の事は、その強烈な印象と顔以外覚えていない。

顔は自分の顔を見れば嫌でも思い出す。思い出して、女と言ひ生き物に対して不快感が増す。

だから、女に自らが手を出すなんて、愚かなことだと思っていた。なのに…。

自分のマンションのリビングでテレビを見ながら、俺はわずかに痛む自分の左頬に手を伸ばした。

相手にその気がないと分かりながら、自分から手を出した愚かな結果が、赤い紅葉の痕を残す頬。

口の中を切らず、腫れなかつたのがせめてもの救い。
明日までには何とか痕も消えるだろうが、残された余韻は癒えそうにない。

女に平手打ちをされたのは、演技も含め始めてのことだった。

「我ながら、莫迦な真似をした」

吉良にキスをしたそもそものきっかけは、苛立ちからだ。

俺に対して男としての認識をほとんど持たない吉良に、安心していると同時に、気に入らない感情があったのは事実。

事あるごとに、吉良の口から健斗の事が出てくるのも、不愉快な感じがした。

恋人でも妻でもない吉良が、健斗に恭順な態度をとるくせに、恋愛感情がないといった事も、胡散臭かった。

健斗が吉良に対して、単なる従業員以上の感情をもつていては明白だが、健斗は俺以上に自分の腹の中を容易に見せたりはしない。

それも、健斗は彼女にかなり熱心している。
でなければ、弁当のときのようなポッキーゲームもじきの真似など、あいつはしない。

あれは、俺に対する明らかな牽制だとわかった。

だからこそ、健斗が吉良に体よくかわされたのには、笑わされた。結局の所、何が一番気に入らないのか、俺自身にも分からない。モヤモヤとした苛立ちを、とりあえず吐き出したかった。

それに、もし俺が健斗と同じ事をしたら、吉良はどう切り返して来るのだろうかという、純粋な興味もあった。

あそこまで、ディープな物をするつもりだつてなかつた。

「冗談だからかうつもりだつたのに、吉良の柔らかな唇に軽く触れれば、彼女は驚いた様に呆然と俺を見た。その無防備過ぎる表情に、悪戯心が疼いた。

男慣れしていないと一瞬で分かる彼女のその先の反応が見たくて、放心している吉良に再び唇を重ねていく。

重ねる度に深くなる口付けに惑つていく吉良の泣き出しそうな表情に、甘い誘惑を見て身体の奥底から震えが来た。

己の行動を制御できないほどの、衝動。

“吉良が欲しい”

そう強烈な欲望に溺れた。

片手で目を覆い、ソファに背を預けて天井を仰ぐ。

吉良があの時、抵抗して俺の頬を叩かなければ、あのまま彼女を抱いていた。

途切れ途切れに洩れる、喘ぎに似た苦しげな呼吸。怒りが入り混じりながら、怯えたように潤んだ瞳。

どこか辛そうでいて官能的な艶のある表情。

初めて見る、吉良の『女』に、自分に湧き上がる強い欲求に体が従つた。

「欲求不満か、俺…」

確かに、このところの禁欲生活だったが、それを無理に我慢した覚えはない。

体調の悪さから、その気が萎えていたし、元々、野獣のように女を襲う真似もしない。

あの時が、どうかしていたとしか思えない。

「…あの調子じゃ、次の診療には立ち会わないだろ?」

平手打ちをした後、激しい怒りを押し殺して冷静とも取れる態度で、俺を注意した吉良。

彼女は、謝罪を受け入れる余地など一択もない冷徹な眼差しを残して逃げた。

当然だ。あれば、やつた俺でさえやり過ぎだという自覚がある。次に会うこととは、ないだらけ。

そのほうが、いい。

俺のためにも、彼女のためにも。

21 紫苑 sides (後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。感謝！！

§

吉良に平手打ちをされた翌日、俺の携帯電話に一通のメールが入っていた。

差出人の名前は、榊美菜。

従兄弟の榊健斗の妻にして、俺の最凶の天敵。

天上天下唯我独尊、世が世なら独裁者になれたであろう女傑。そして俺が唯一、逆らえない女性。

「げつ、デビルメール…」

思わず美菜様の名前を見て、ぼそりと呟いてしまった。
こんな事を言つていたと本人にバレたら、確実に殺されるだろうと思わず、色々な意味で緊張が走る。

同時に、嫌な予感が脳裏をよぎった。

今の俺は、絶対に情けない顔をしているに違いない。

今が口ケの休憩中で、自分の車の中で一人きりだった事に俺は感謝し、恐る恐る、メールを開く。

あたくしに電話なさい。

今すぐ！

簡潔明瞭、命令形。

彼女から来るメールは、いつもこんな感じだ。
着信が入っていた時刻を確かめると、午前十時二十一分。
現時刻は既に、午後一時を回っている。
今回は、これでも早く見つけられた方だが……。

「…絶対に、キレてるな」

電話をしたくない気分が七割、仕返し怖さが十一割増しで、俺は
渋々、美菜様に電話をかける。
一ノール目で、相手はすぐに出了。

『貴方、何時になつたら日本語が理解できますの？』

開口一番、絶対零度の冷めた女性の声が俺の耳に届く。

「…あの、俺は一応、社会人」
『お黙り！しぐちゃんのくせに、口答えなんて十年早くよー。』

俺の言葉をわざと離れて、美菜様は俺を一喝する。

『このあたぐしを待たせるなんて、何時から貴方は偉くなつたの
「いや、じー…」
『言ひ訳無用…』

「…申し訳ありませんでした」

『貴方のその誠意のない謝罪なんて、その辺の雀にでも食べさせておしまいなさい!』

渋々、場を収める為に社交辞令的に謝れば、相手はそれを見抜いてしまつ。

俺が仕事で簡単に電話が出来ない事を知つてゐるくせに、この夫人はいつも無理難題を俺に吹き掛ける。

そして、難題を果たせない俺の言葉など一切無視して、俺を責める。

だから、彼女と俺は会話が成立しない。

否、彼女からの一方的な話に終始する。

彼女との会話に、俺の意思は無意味。

「用事がないなら、切りますけど?」

『電話をしたのは貴方でしょうー』

“いや、するよ!”と言つたのは、貴女ですけどね?”

言おうと思つたが、さりに叱責が飛ぶのが分かつてるので、あえて何も言つまい。

「それで、俺に何か用事でも?」

『吉良あげはの事よ』

途端に冷静な語り方になつた相手に、冷や汗が背筋を伝づ。

吉良経由か、健斗経由かは分からぬが、俺の素行が美菜様の耳に入つたようだ。

俺の女遊びに関して、容赦ない罵声を浴びせてきた彼女のお小言を聞かなければならぬのかと、必然的にため息が漏れた。

『あたくしを前にため息?』

失笑ともとれるその声に、俺は自分の頬が引きつるのを感じた。
何で怒らない?

決して怒られたいなんて言つマジヒスト的な性癖はない。ただ普通なら、此処で必ず美菜様の叱責が飛んでくるのが常。
何の前触れだ?

「…昨日食べた、彼女の手料理の味を思い出して」
『健から聞いているわ』

言い訳を呑けば、珍しく美菜様から普通の返事が戻ってきた。
奇跡か、それとも白日夢か?

『たくさん召し上がつたそうね?』

「まあ、お世辞抜きで美味かつたので」

『当然よ。味にうるさい健が唯一食べる女の手料理は、彼女の物だけ。不味い訳がありませんわ』

至極当然のように、美菜様は言い放つ。

彼女が家事全般に関する才能が皆無だとは知っているから、美菜様が健斗に手料理を振る舞えないのは分かる。

それはいいのだ。

問題は、俺など男であつても、健斗と仲が良いというだけでこの扱いなのに、美菜様は女性である吉良に対して、何の嫉妬も抱かないのか?といふ点だ。

「…電話の理由、健斗の浮気調査?」

電話口で、相手がかすかに笑うのが分かる。

『むしろ、健にはあげはと浮気していただかないと』

問題発言に、俺は声を失う。

“正氣か?”

美菜様は気に入った人間を、ファーストネームで呼ぶから、吉良は彼女に気に入られているはず。

だからと言つて、夫である健斗の浮氣を推奨するのはあり得ない。俺の天敵は、そんな心の広い女性ではない。

結婚前、遊んでいた女の全てを清算していた健斗に対して、愛人関係でも良いからと交際の継続を持ちかけてきた女が何人かいた。その女達は美菜様の逆鱗に触れ、美菜様の手によつて社会的制裁が加えられた。

それは一度と、健斗の愛人にならうと言つ女の存在が出ないほどの。

美菜様、一見すると容姿は艶やかで男受けが異常に良い軽い感じの女に見えるのに、貞操觀念なんていう榊一族には一抹も残されていない物を、しつかり持つてゐる古風な思想の人間なんだ。

俺が冗談半分で健斗との婚約期間中だつた美菜様を口説いたら、延々四時間もフローリングで正座させられた上に説教を食らつた。アレは本当に拷問だつた。

そんな女遊びに関して厳しい猛妻が、浮氣など許すわけがない。許すとしたら、何らかの策謀を以てだらう。

『だからしーちゃん、あげはには手を出さないで頂戴』

言葉はお願いだが、言葉の威圧感は、女王然とした命令に聞こえる。

吉良に対して、やはり何かをするつもりだ。

『昨日の様に淫らなキスなんてなさつたら、貴方の節操なしの口、一度と開口できないように縛縛いたしますから』

田の前に居なくても、彼女の凍てつくような彼女の表情が安易に想像できる。

電話の先の美菜様は、ダイヤモンドダストが吹きすさぶような、氷の頬笑み。

健斗の問題で、俺までとばっちりを食らうそつな気配だ。

「…普通、田那が浮氣しそうなら、邪魔するものだと思つけど?」

『あたくしを誰だとお思い?』

「…美菜様です」

『あたくしの計画の邪魔をなさつたら、俳優として生きていられなくしますわよ?』

声は笑つてゐるが、背筋が凍る。

こういう語り方をする彼女が一番、危険だと知つてゐる。

邪魔したら、本当に俺は俳優として抹殺されるだろう。

彼女は、日本の美容業界でトップに立つ西宮グループ総帥の一人娘。正確には、美菜様には弟が居たが数年前にスキルス性の胃ガンで夭逝している。このため、ゆくゆくはその西宮グループを継ぐ身にあると、健斗が言つていた。

健斗との結婚後、美菜様が形成外科医の仕事を減らして会社経営に携わつてゐるのはその為らしい。

そんな彼女の持てる権力と金を使えば、俺の俳優人生を左右するのはひどく容易な事だ。

「…ちなみに、計画内容を聞いても」

『貴方は言われた事を、素直に守ればよろしいの。警告は致しましたからね?』

黙つて大人しく見ていろと、暗に彼女は俺を牽制し、彼女は電話を切つた。

俺は、携帯電話を下ろし、小さくため息を漏らす。

美菜様と初めて普通に会話が出来たと思ったら、これだ。

小言を聞くより、精神的に疲れる。

それにして、浮氣するまで放置するのは、彼女がこれまで見

せていた電光石火の早業行動力と相反する。

それだけ、罠をめぐらして潰したいといふことなのだろうか？自分が気に入っていた相手だからこそ、憎しみも増幅するという構図か。

“…どうせ、もう会えない相手だからな”

眼の前にあるハンドルに肘をかけ、その腕の上に顎を乗せて考える。

普段なら、美菜様の命令には素直に従う所だ。

あの人と悶着を起こすと、始末に骨が折れて面倒だから、必然的にいつも『回避』を選ぶのだが。

今回は従うまでもなく、もう会うことはないだろう。

美菜様が吉良に何をするのか、気にならない訳ではない。あの人は、やる事が過激すぎるから、眼を離すと危険だ。とはいっても、俺がどうこうできるはずはない。健斗でさえ、美菜様を抑止できないのに。

看護師としての吉良は優秀で、何より点滴に痛みがなく恐怖心を俺に与えないのは魅力的で、併優業の話を一切しないのは高ポイントだった。

治療をするのに、失うには惜しい存在ではあつたけれど、吉良がその他大勢の一人である事に変わりはない。

俺と吉良の関係は、看護師と患者であつてそれ以上でもそれ以下でもない。

その関係すら途切れさせたのは俺。

看護師など、いくらでもいる。

なのに、この胸に巣食つモヤモヤは何だといふのだ？

苛立ちさえ覚える、この厭な感覚が消えない。

§

「カツー！」

監督の険しい声で、俺は我に帰る。

そこは、都内にある某ビルのとあるフロア。
俺の周囲には撮影クルーが仰々しく機材を持ちながら、渋い顔を
みせる。

田の前には、相手の女優が困惑気に俺を見上げている。

“ しまつた。またやつた… ”

また撮影の最中に、意識が飛んだ。

「お前、やる気あるのか！」

演技に厳しい事で有名な映画監督、周防修平が床に思いつき台
本を投げつける。

元から人相が悪かつたが、更に鬼と呼ぶにふさわしい、修羅の顔。
当然だ。

立て続けに、NGを十回も出せば、周防監督でなくともキレる。
美菜様からの電話の後、俺の演技はボロボロだった。

「すみません。もう一度やらせてください」

「集中力のねえ野郎に何遍やらせても無駄だー頭冷やしてこいー！上坂抜きのシーン、先撮るぞ！」

周防監督は立ち上がり、周囲のスタッフはその声に従い、移動を開始する。

俺はその場から身動きが取れず、己の不甲斐無さに額を抑える。どれほど体調が悪くとも、ほとんどNGなど出した事はない。なのに、今日は何度も同じ所で間違える。

恋人との別れのシーン。

別れの言葉が、どうしても出ない。

台詞は覚えている。

どう表現するのかも、頭の中出来上がっている。なのに、言葉を発する事が出来ないのだ。自分らしくない失敗に、苛立ちが募る。

「上坂さん、大丈夫ですか？なんだか調子が悪そうです」

視線を上げれば、ヒロイン役の子がそこに残っていた。
今売出し中の若手女優で、この所、人気が急上昇している。
見た目は可愛らしくスタッフの受けもいいが、男の前で態度が変わるし、男に対する節操のない噂話は良く聞いている。
業界で人気のある男と交際すれば、名が売れるからだろう。
まあ、処世術だから嫌いではないが、俺に何かと媚を売るようにな接触してくるので、やんわりかわしていた。

「…ああ、『めんね、結城さん。こんなにリテイク出して

愛想笑いを浮かべて見ても、自分の顔の筋肉が何所かぎこちなく動く。

重症だ。

笑うことすら出来なくなつてゐる。

だが、彼女は何も気にする様子もなく、少し物憂げな表情を浮かべる。

「そんな事…いつも、私がリティクばかりだから…気にしないでください。私に出来る事があつたら、何でも言ってくださいね。私は坂さんのお役に、立ちたいです」

普通の男が今の俺と同じ状態なら、くらうとくるのかもしれない。だが、どれだけ巧妙でも俺は気付いてしまう。彼女の中にある、打算的な仕草と言葉を。

「結城ちやーん！」

遠くでスタッフが彼女を呼ぶ。

「ありがとう。でも君は、向こうに行つた方が良いようだね」「…でも

渋るなりに、俺を上目遣いで見上げてくる相手に、内心で少し腹が立つ。

正直、こんな状態の自分の傍に人が居るのは、不愉快だった。

「監督が言つとおり、俺は頭を冷やして来るよ。一人で考えたい事もあるし、早く戻らないと、君まで監督に怒鳴られる…それは俺が嫌だな」

困つたように小さく笑みを浮かべれば、相手の頬は朱に染まる。この程度で俺に惑わされるような、俺を籠絡など出来ないのに。

「あ、あの、待ってますから…失礼します」

頭を下げ、スタッフの方へ走つていいく相手の後ろ姿を見送り、俺はそのまま逆方向へと歩き出す。

時を見計らつたかのように、マネージャーの熊井が俺の傍に駆け寄つてくる。

今までにないスランプに、熊井の表情が硬い。

「伊織」

「…悪い。クマ、一人にさせてくれ」

俺はそのまま人気のない場所に出ていった。

どれほど時間を費やしても、その日、嵌り込んだスランプから、俺は一度も立ち直る事が出来なかった。

§

『演技ができるまで、戻つてくるんじゃねえ！』

あの後、全く調子が戻らなかつた俺に周防監督が激怒し、俺は一日暇を言い渡された。

役を下ろされなかつただけまだつたが、監督の言葉は俺にとってかなり屈辱だつた。

演技をする事だけが、俺の特技であり生きる全てだつた。だからこそ、台本は隅から隅まで読みつくし、台詞も完全に頭に入れ、どう立ち振る舞う事が最善かを常に考えて撮影に臨んできた。なのに、頭で分かつていてるのに体が動かないジレンマ。美菜様の電話の後から、俺は俺ではなくなつていてる。

別れの『台詞』を口にしあうとする度、俺の思考を塞ぐように、脳裏に吉良が現れる。

強い拒絶と怒りを含んだ瞳で、泣き出しそうな顔をして俺を見ていた吉良の姿。

泣きそうな表情を演技していた目の前の女優とは比べ物にならぬほど、鮮烈で俺の心を揺さぶる。

媚びない、靡かない。俺を頑なに拒む彼女の姿が蘇り、台詞が瞬時に消える。

幾度、気を取り直して撮影に入つても、吉良の事がチラついて集中力が削げていく。

どうして吉良が俺を侵食する？

演技の最中に、他の何かが邪魔することなどなかった。

“ 美菜様は、俺にとつて鬼門だな ”

美菜様と吉良の話をしてから、俺の異変は始まった。午前中は何ともなかつたのだ。問題があるとすれば、それしか考えられない。

だが、問題は分かれど原因が分からぬ。

何故、吉良の泣き出しそうな表情を思い出して、言葉が出なくなるのが。

原因を突き止めて、どうにかしなければ、このスランプから立ち直れない気がした。

気付けば今、俺は健斗が院長を務めるクリニックがあるビルの前にいる。

来てはみたものの、今の時間は夕方診療が始まる直前で、人目に付く。

吉良が出勤しているのかも確認していない。

“ はあ…俺、何やつてんだろ ”

健斗に電話で確認を取ることもせず、変装らしい変装だつて何もしていない。

カラー・コンタクトを外した以外は、俳優『上坂伊織』の姿のまま。例え吉良に会つた所で、悩みが解決するのかも分からぬのに、何でハイリスクな真似をしているのだろう。

“ …駄目だ。出直そづ ”

芸能記者にゴシップを書き立てられでもしたら、癪に障る。

健斗に仕事が終わつたら連絡をくれるようメールだけして、戻る

う。

駐車場に戻りながら、スーツのポケットから携帯電話を取り出し、その画面を見た瞬間、視界が捻じれるよつて歪む。

「つ！」

そのまま倒れそうになつたが、何とか踏ん張り倒れる醜態だけは逃れた。

堪えたものの、体から一気に血の気が引いて行くのが分かる。目眩と、震えと共に、冷や汗が浮かぶ。

ふらふらと見知らぬ車のボンネットに手をついて、頭を押さえる。堪えていても、症状はおさまらない所が酷くなる。

“健斗に電話……”

近くにいて、処置の出来そうな相手は、従兄弟しかとつさに浮かばない。

ケータイ電話に視線を向ければ、体が大きく揺れる。

“倒れる……”

まるで他人事の様にそう思つた。

膝が崩れ、体が左に傾く。

アスファルトに、捨て身の状態で倒れていく。

激しい痛みと衝撃が、自分の体に襲いかかる。

…はずだつた。

そつはならなかつたのは、自分の体を左から支えた人の感触。

“ そつ言えばこんな事が、前にもあつたな……”

「大丈夫ですか…つて、榎さん…」

動搖と驚愕が入り混じった声。

それは聞き慣れた彼女の声で、何時もの香りも間近に感じられる。顔を見なくても、分かる。

どうして、クリニツクの中ではなく、此処にいるのだろう。

「…やあ、吉良さん」

眼を開き、愛想笑いをして相手を見下ろせば、私服姿の吉良が俺を支えながらむつとしている。

「毎回、辛い時に恰好つけなくて結構です…辛い時は、辛い顔で良いんです！」

ぴしゃりと叱りつけられ、俺は苦笑する。

彼女はずつと気付いていて、気付かないふりをしていてくれただ、俺のやせ我慢を。

吉良は、俺の首筋に手をのばし、軽く触ると、驚きに口を見開く。

「やつぱり熱がります。こんな状態になるまで動き回っていたんですか？」

「…熱？寒くて震えるくらいなのに？」

言われても、自分ではよくわからない。

「その悪寒と戦慄は、高熱が出る前駆症状です。とりあえず、クリニックに行きましょっ」

俺を支えて歩こうとする彼女に、俺は抵抗した。

「嫌だ…」

「何を言つてゐんですか」

「人がいる…健斗に迷惑がかかる」

「病人が迷惑なんて考えないでください！」

なんだか、今日の彼女は怒つてばかりだ。

昨日の今日、じや仕方ないけれど、俺だつてこればかりは譲れない。

「しーちゃんつたら、我がまま坊やね」

悪寒と別に、俺の背筋に寒気が走る。

「…その声」

「美菜先生！」

声のする方を見れば、メリハリの利いたグラマラスボディの美麗な女性がそこにいる。

気の強そうな釣り目がちな瞳が、不機嫌に俺を見る。

「相変わらず病院がお嫌いなのね…あげは、悪いけれど予定をキャンセルしてあたくしと一緒に、しーちゃんを我が家に運んでくださいかしら？」

「冗談じゃない。」

美菜様の手を煩わせたら、後でどんな仕打ちをされるか分かったものじゃない。

「…一人で帰ります」

「お黙り！貴方に拒否権はありません事よ！あたくしと吉良のティ

ナーを反故になさった罰は、ちゃんと取けていただきましからねー。」

ならばいっそ、俺を放つておいてくれと唸つたら、美菜様に頭を叩かれた。

抵抗むなしく、俺は吉良と美菜様に両サイドを拘束され、反拘束状態で美菜様の車に乗せられる。俺はそのまま健斗の家へと連行された。

第六章 弱つた大型犬にもご注意を

「三十九度六分…立派な熱です」と

院長宅の客間では、榎紫苑がベッドの上で真っ赤な顔をして、荒い息だった。

美菜先生がベッドサイドに腰をかけ、榎紫苑の脇から体温計を抜いて揶揄した。

既に榎紫苑には寒気がなくなっていたので、私は美菜先生とは反対側のベッドサイドに立って、榎紫苑の頭の下に氷枕を当てる。既に彼の腕には、ブドウ糖の入った補液用の点滴が入っている。

「疲れが出たつて所かしら。肌の荒れ方からして、食事も睡眠も満足になさっていいわね。せつかくの美貌が台無し」

美菜先生は、呆れながら病人の頬を軽くつねる。

「…商売道具を傷つけないでください」

「まあ。このようにくたびれた商品のどこに、商品価値が？あたくしが理解できるように、一万文字以上で説明して御覧なさい」

「いたつ…マジで、勘弁…」

「美を追求維持できない不摂生な美形など、滅んでおしまい！」

病人に対しても遠慮がない美菜先生に、榎紫苑も頭が上がらない

様子だつた。

なんだか、年の離れた姉弟の喧嘩みたい。

“それにしても、顔が商売道具つて…榎紫苑の仕事つて、モデルか何か？”

絢子さんや結城さんが喜びそつた美形で、モデル職も似合いそうな気がする。ただ、華やかな世界に興味がないので例え彼がモデルだとしても、私にはピンとこない。

「どうせ貴方の事ですから、家に帰らず夜遊びばかりしているのでしょうか？」

「…解つていてるなら、わざわざ聞かないで下さー」

「貴方、節度と自重いう言葉を「存知？」

「…すいません。俺、難しい日本語は分かりません」

謝つているのか、美菜先生に反抗しているのか複雑な返答の仕方だった。

“その答え方は、美菜先生相手にものすごく不味いと思つわ…”

せめて、「自分の体力を過信していました」程度にしないと、美菜先生の逆鱗に触れてしまつ。

案の定、美菜先生は極上の微笑みを湛えた。
妖艶でいて不敵で、内に秘めた悪性を滲ませる、院長曰く『魔女の微笑み』。

「しーちゃん、注射と座薬、どちらがお好み？」

「…どっちも嫌…です…」

唸るよつに神紫苑は答える。

「あげは、解熱薬を筋注するわ」

「はい」

「だから、嫌だつて…」

「口答えしない！」

声に力はないけれど、心底嫌そうにした神紫苑を、美菜先生は一蹴する。

神紫苑が拒否しようとしたと、同意しようと、初めから注射をすることを決めていた美菜先生の指示で、既に注射の準備は出来ていた。

「しーちゃん、お尻出しなさい」

「出来るかっ、そんなことひー！」

その言葉に、神紫苑が熱で真っ赤にした顔を恐怖に歪ませて飛び起きる。

が、熱のせいか、神紫苑の身体がくらうと倒れかかる。
点滴のルートが引つ張られそうになり、私は思わずベッドに片膝をかけて上り、神紫苑の体を支える。

彼を倒れるのは防いだけれど、支えると言つたが、彼は私の胸に横顔をうずめるようにもたれかかる恰好になつている。

高熱が出ているだけあって、神紫苑の体は異常な熱を帯びていた。

「…くえ、吉良さん結構胸あるね」

しつとそんな言わなくても良い事を口にした神紫苑を思わず殴り飛ばしたくなつたけれど、次に飛んできた美菜先生の言葉に、反射的に反応してしまった。

「あげは、そのまましーちゃんの頭と腕をホールドして！」

美菜先生の言わんとする事を即座に判断し、片腕で榎紫苑の頭を抱きしめ、残った手で美菜先生側の腕が動かないように肘を掴む。その隙に、美菜先生は榎紫苑のワイシャツのボタンをはずして、諸肌を見せるように半分、シャツをすり下げるよう脱がせる。

「何…俺を襲う気？」

抵抗はしないものの、何をされるのかを理解していない美青年は、捻くれた事を呟つ。

「半分だけ、合つてます」

「…せつかくなら、襲う方が良い…」

人の胸に顔をうずめたまま、抵抗する気力も体力もないのに榎紫苑はそう呟く。

負けず嫌いと呟つか、容姿に似合わず、かなり子供っぽい。

美菜先生はアルコール綿で彼の腕を素早く消毒し、彼の腕を摘まむとそこに注射針を突き刺す。

「うううー。」

針がずれないよう、痛みで身じろぎしようと彼の体をきつく抱きしめる。

すぐに注射は終わり、針を抜いた所をアルコール綿で押さえた美菜先生は、私に眼で合図する。

美菜先生が押えていた所を、私が代わりに押さえ、薬液が体内に吸収されやすいように揉む。

「相変わらず、容赦ないなあ……」

唸るよつに注射嫌いの男は咳く。

「貴方は痛い目にあつて一度良いのよ。これに懲りたら、自重なさい」

美菜先生は、点滴と注射に使つた道具を持つてその場から立ち上がり、部屋を出していく。

私は榊紫苑から離れる。

すこしフラフラしながらも、座つた状態を維持する事を確かめ、ワイヤッシュを正してボタンを閉じる。

本当なら、ワイヤッシュが皺になるので脱がせたかったのだけれど、

それよりも早く、美菜先生が点滴を刺してしまったから、仕方ない。皺と汗で汚れる事覚悟で、着替えは院長の物を借りてもらえば良いだろうし。

点滴の針がズレていなければ、腕を確認し、ぼんやりしている神紫苑をベッドに横たえる。

「薬が効いて熱が下がった頃に、食事と飲み物を持つてきます」

立ち去ろうとした私の手を、熱を孕んだ手が掴んだ。
見下ろせば、神紫苑が私の手を掴んでいる。

「…何ですか？」

「…なんで俺の事、助けてくれたの？」

「病人を助けるのが私の仕事だからです…病人はまず、きちんと休んで体を治すのが仕事ですよ」

腹も立つたけど、病人にお説教するのも気が引けるし、とりあえず元気になつてもらわないと。

「…吉良さん、大人だね…羨ましいよ…」

「貴方よりは年上ですかから」

「そういう意味じゃないよ…」

神紫苑は私の手を離し、そう呟いてかすかに笑つた。

その笑みが物憂げに見えたのは、彼の心情が揺れているからか、それともただ熱で力がなかつただけなのか、私には推し量る事は出来なかつた。

「貴女も少し、休憩なさつて」

神紫苑が眠ったのを見届けてからリビングに行くと、美菜先生は既に執事の小野さんにハーブティーを入れてもらつて、優雅に飲んでいた。

女の私から見ても、ため息が出るほど無駄のないプロポーションの美女。

しかもお金持ちで、医者なのだから神様は才能の与え方を間違っている気がする。

八人掛けの大きな大理石のテーブルを挟み、私は美菜先生の前の中席に腰を下ろした。

ロマンスグレーの小野さんは、ハーブティーを淹れた白磁のティーカップをそつと置いてくれる。

「ありがとうございます、小野さん」

唇の端をわずかに緩めて、小野さんは軽く頷いた。

五十年代後半の小野さんは、美菜先生専属の執事で、美菜先生が幼いころからずっと仕えていたのだとか。

「無理を言いましたわ、あげは」

「いいえ。そもそも神さんを見つけたのは、私ですから……」

「貴女が慌てて走つていくから、何事かと思いましたわ」

「すみません。体調が悪そうな人がいるなつて思つたら、体がつい

…

…

本当は、美菜先生とティナーを食べに行く予定だったのだけれど、駐車場で病人を拾ってしまった。

声をかけてみたら、榊紫苑だったというオマケつきで。

だつて、体調が悪そうな人がいたら、仕事外でも気になつて声をかけたくなつちゃうのは、看護師の性なんだもの…。

美菜先生は、凄艶に微笑む。

「それが貴女の素敵な所よ…それにしても、しーちゃん、貴女に色々迷惑をかけたようですわね？」

「ええ…まあ…」

歯切れが悪くなるのは、昨日のキスのせいかもしれない。

「昨日の事は、野犬に軽く咬まれたと思ってお忘れなさい。榊の人間のする事なんて、何時もろくでもない事よ」

夫婦に同じ事を言われ、無意識に苦笑いが出た。

院長と美菜先生、そういう思考はものすごくよく似てるの。

「…美菜先生、榊の人間は、好きでもない女性にも平氣でキス出来るものですか?」

過去、榊一族の男性を多く見て、女に節操がないのは良く分かるけど、その気のある女性にしか手を出していなかつた記憶しかない。

榊紫苑の様なタイプは、初めて見た。

美菜先生は眼を細め、ティーカップを机の上に置いた。

「健斗はあたくとのお見合いで当田に、その氣のないあたくしを抱きましたよ。」

衝撃的事実に、がちやんと、私のカップが音を立てて机の上に倒された。

「えやあああひー。」めんなさこつー。

食器は割れなかつたけれど、折角のハーブティーが盛大に大理石の机の上に広がる。

慌てて立ち上がり、小野さんが手早く布巾を持ってきて、濡れた場所を拭いてくれる。

「吉良様、お濡れになりませんでしたか？」

「だ、大丈夫です。すみません」

「いえ。代わりの物をお持ちいたしましょう」

そつなく机の上の惨劇を片付けて、小野さんは一礼して下がる。席に再び腰を下ろした私は、恥ずかしくて美菜先生が直視できな
い。

院長と美菜先生は研修医の頃に顔を合わせてはいるけど、そのあとで一族絡みでお見合いをして婚約、結婚という流れをとつては聞いていたけど……。

“院長、どれだけ野獣なんですか。お見合いの当田とか、ホントに

！」

「あげは、男なんてものは須らくケダモノ。榊の人間だからこそ、欲望に忠実だと思った様がよろしくてよ？」

確かに、美菜先生の言つ事には一理ある。

欲求を抑えることなんて、榊一族の人間にはまずない。我慢しながらも、欲しいものは榊の名で全て手に入れられる。だからこそ、行動が放埒なのだ。

院長然り、榊紫苑然り。

「あげは、健以外の男に操を捧げては駄目よ？貴女には、健の愛人になつていただかなくては困りますのよ？」

「……それは…院長への愛がこれっぽっちもないでの、どれだけ頑張つても、無理です」

「何を仰いますの！」

突然、美菜先生が立ちあがる。

「あたくしは、貴女と健の子供が欲しいのよ！貴女以外の女に、健斗の子供を産ませるなんて、あたくしは嫌ですからね！」

美菜先生は、二十代の時に巨大な子宮筋腫が見つかり、子宮を全摘している。

だから子供が産めない。

それを知っているのは「くわづかの人で、院長は承知の上で美菜先生と結婚している。

子供がいなくても良いと言つ院長に対して、美菜先生はどんな形であれ、院長の子供が欲しいと思つている。

でも、愛人に対して人工授精の代理母にしても、美菜先生のお眼

鏡にかなう女性が見つからない。

それで、付き合いが長くて気心が知れている私に、白羽の矢がむけられているのだけど。

何度も断りしても、美菜先生は諦めてくれない…私にも事情とうものがたくさんあるのだけど。

「いくらなんでもそれは倫理的に無理です、美菜先生…」

倫理的にまず無理だし、院長は好きだけどそれは恋愛感情じゃないから論外。例え驚く様な大金を積まれても、そんな関係になるつもりは毛頭ない。

「それに…家族はもういないんです」

私の家族はもういない。

借錢を作つて、それを娘の私に擦り付けて何年も豪遊して生きた両親を、私は捨てた。

私に兄弟は居なかつたし、親族は、借錢の問題で掌を返したように疎遠になつた。

数千万円にも及ぶ借錢を返すために、一人で頑張つて頑張りぬいて、大好きな看護師の仕事でさえ辞めて、夜の仕事をした。

それでも日増しに膨れる借錢が、私を追い詰めて昼夜構わず働いて、体を壊した。

どうしようもなくなつた時、手を差し伸べて助けてくれたのは院長と美菜先生だった。

今、誰も恨まずに、こうして看護師として生きていけるのは、二人のおかげ。

だから、院長や美菜先生の為なら、多少無理をしてでも願いをかなえたいと思うけれど、こればかりは無理。

「だから、どうしても、叶えられません」

美菜先生の表情が曇る。

「…謝らないでくださいまし。それに、人間の気持ちに絶対的な不变はあり得ませんもの。貴女の心が変るまで、気長に待ちますわ」

この場は諦めてくれるけど、完全にはやつぱりあきらめてくれない美菜先生に、思わず笑みがこぼれる。

「そうですね…人はいつか変わるものですね…でも、今はお一人様生活を満喫しているので、恋人も恋愛もまだ遠慮したいです」
「その気になつたら、すぐにおっしゃって。健ないくらいでも貸しますから」

慌てて私は首を横に振る。

「い、院長は美菜先生一筋なので、遠慮します。私は私だけを必要としてくれる人を探しますから！」

「ふふっ、あげはつたら欲張りさんですわ。でも、女はそうでなくては」

優雅に笑う美菜先生に、ほっとする。

そして、不意に思い出す。

「あ…美菜先生、お夕食どうしましよう？」

「そうね…今日は、午後からショフに休みをとれてしましましたし

…」

ディナーの為に予約したお店はキャンセルしてしまったし、まさ

か病人を放置して食事をしに行く訳にもいかない。

「私でよければ、何か作りますよ？ 榎さんのお粥も作らないといけないですし」

「まあ！ 久しぶりにあげはの手料理は頂けるのね。是非、お願ひしますわ」

「じゃあ、厨房をお借りしても良いですか？」

「勿論。お好きな物を使って下さいまし」

お言葉に甘えて、勝手知つたる程出入りしている榎邸のキッチンで、普段では滅多にお目にかかるない高級な食材たちを相手に、私はお料理を堪能した。

閲覧、ありがとうございます。

お気に入り登録、評価もあります。

少しずつ、見に来てくれる方が増えて嬉しいと同時に、何だかとても心臓がバクバクしております。

楽しんで読んで頂けるよう頂けるよう、出来る限り更新速度を落とさないよう頑張っていきますので、どうぞよろしくお付き合いで下さいます。

§

美菜先生と食事を済ませ、私は飲み物と小さな土鍋に作ったおかゆを持って、榎紫苑の眠る客室に入った。

相手は、眠つていなかつたのか目が覚めたのか、顔を上げて私を見る。

「気分はどうですか？」

「…すこじ、楽かな」

榎紫苑は、ゆっくりと体を起す。

ベッド横にあるボードの上に、私は手に持つていたお盆を置く。点滴は、美菜先生が食事の前に外してくれている。

ボードの上に最初に置いてあつたスポーツドリンクに、彼が手をつけた形跡はない。

私は電子体温計を取り出して、榎紫苑に手渡す。彼は何も言わずに受け取り、脇に体温計を挟む。

汗で彼の髪が濡れて、額や頬に張り付いている。シャツも結構濡れていって、かなり発汗したようだった。

「汗を拭いて着替えた方が良さそうですね」

「いっそ、風呂に入りたい」

「今日は我慢してください。着替えと体を拭ぐ物を、持つてきますから」

「待つて」

踵を返しかけた私は、相手に向き直る。

「何か欲しいものでも？」

「…そうじやなくて」

「？」

「その…ありがとう。駐車場で俺を助けてくれて。看病してくれて

予想もしない相手の素直なお礼の言葉に、驚かされた。

「本当は、俺と関わりたくないなかつただろ？」

その言い方が気に入らなくて、彼の額にデコポンを食らわせた。
そんなに強くは叩いていないけど、相手は驚いたようだった。

「あんなことされたら、気まずいに決まってるじゃないですか。好きでもない人に、キスなんて、軽々しくするものじゃありません！」

「…好きならいいの？」

筋違ひの事を言われ、自分の眉間に深い皺が寄るのが分かる。

「ダ・メ・で・す！キスしたいなら、恋人にすればいいじゃないですか。自分の行動を、きちんと反省してくださいよね」

「…やり過ぎたとは思つけど、吉良にキスした事は悪いと思つてい

頭が痛くなつてきた。

この人の理論が理解できない。

そもそも反省していないし、あまつさえ私を呼び捨てにしてくる。

「貴方、不眠症で思考回路がおかしくなつてゐるんじゃないですか？」
「…ああ、そうかも…仕事であり得ない大きなミスするし、自分の感情制御が出来ないんだよね」

「…ともなげに、さらりと怖い事を榎紫苑は言ひ。

ピピピッヒと、電子体温計が鳴り、榎紫苑は体温計を抜いて私に差し出す。

受け取つた体温計の指示する体温は、三十六度八分。

「下がつた？」

「ええ。でも、ちゃんと休んで下せ…ちよつとー。」

私がいる側とは反対のベッドサイドから降りた榎紫苑は、部屋の扉に向かつて歩き出す。

「風呂入る」

「人の話、これっぽっちも聞いてないんですか！？」

慌てて先回りして榎紫苑の前に立ちはだかれば、刹那、腕を掴まれたと思ったら視界が大きく揺らいだ。

気付けば天井と榎紫苑の顔が見え、ベッドに体を押さえつけられていた。私の上に榎紫苑が馬乗りになつてゐる。

慌てて暴れてみても、びくともしない。

覗きこむ男の表情は、それまで見た事のない色氣のある顔で、思わず息を飲んだ。

何て言うのだろう、エロい？大人の魅力というか、情事に誘つているような淫靡な感じが、背筋をゾクゾクさせる。
やだ。こういうのものすごく苦手で、全身に鳥肌が…。

「な……何してるんですかっ！」

「……キスしていい？」

「だ、駄目に決まってるじゃないですか！」

やつぱり人の話をまるで聞いてない。頭か耳が、絶対ザルになっちゃってる。

しかも、無駄に色気がムンムンしてる！

ここで負けたら、昨日より酷い事が起きる予感がひしひしする。絶対、負けちや駄目だ、私。

「仕事でミスしたの、吉良のせいだよ？」

「どうして私が…？」

「仕事中、吉良の顔がずっと浮かんで、仕事に手がつかないんだ」「勝手に思い浮かべないでください。出演料とりますよ」

「体で払うよ」

「意味分かりませんからっ！」

「分かるよつに実演しようつか？」

「そつといつ意味じやあり…っ！」

左の首筋に、柔らかな感触が触れたと同時に、軽く突き刺すよつな痛みが走る。

思わず、全身がびくつとはねた。

“首に、キ、キスされたっ！？”

「貴女の匂い、好きなんだ」

耳朶もとで淫靡な声で囁かれ、一層、背筋に走った悪寒が悪化する。

なのに蠱惑的で、まるで恋人にでも語るかのような甘い響きに、

自分の頬が熱を持つ。

”な、なんなの！？この、エロフェロモン垂れ流し！？”

この男は、危険すぎる。
天性の女つたらしだ。

相手のあまりの色気に気を取られていたら、耳朵を甘咬みされた上に、舌でいやらしくなぞりあげられた。

「いやあ」

不意を突いて襲つてきた衝撃に、思わず自分の口から洩れた声が酷くあの時の声に似ていて恥ずかしくなる。

それ以上に、脊髄からゾクゾクとした震えが走つて身体が強張る。

「随分、そそる声だね？」

「ちょ、ちょっと…セクハラで訴えますよ、榎さんっ…」

そのまま首筋にまた口づけてきた相手を、精一杯の虚勢を張つて相手を引き剥がす。

てっきり、からかつて笑つてているのだと思つた相手には、笑顔なんてなかつた。

真摯に見つめてくる青灰色の瞳には、遊び心なんてなくて、昨日のキスの最中に見せた雄々しい男の表情に、思わず怖くなつた。

神慣れをしていない女の子なら、うつかりその魅力にそのまま流れされていたのかもしれない。

「貴女が頭から離れない。泣きそうな貴女の表情が、俺をおかしくさせる…今だって、貴方に触れたくて、キスしたくなる」

逃げたいのに、体はがつちり押さえられて身動きが取れない。で

も、相手の頭のネジは飛んでいるから、全然、会話にならない。本当に口付ける気なのか、迫つて来る榊紫苑に私の恐怖心はマックスに達する。

“ わせるのですか？！”

「がつー！」

次の瞬間、榊紫苑は顔面を押さえて私から離れた。私の頭突きが、彼の高い鼻梁にクリーンヒットしたのだ。慌てて私は起き上がって、彼から離れる。

「貴方は寝てないから、頭のネジがぶつ飛んで、アホになってるだけですっ！」

ベッドの上に仰向けて転がった榊紫苑は、しばらくじっとしていた。

「つう…頭突きとか、マジか…」

ゆつくり手を下ろし、天井を見ながらぼんやりしていくけれど、突然、榊紫苑は何を思つたか笑い出した。

“ どうしよう…頭揺らしたから、余計におかしくなっちゃった！？”

「ああ、そうか。…ちょっとわかつたよ」

一人で納得したように、相手は私を見て笑う。

思わず、異様な光景に私は一步後ずさつてしまう。

頭のネジ…の説明で、納得してくれたのかしら？それとも今の衝

撃で本当にアホに…？

「な、何がわかったんですか？」

「泣き顔のままの貴女が、嫌だつたんだ…泣かせたくない」「はい？」

やつぱり、脳に受けたダメージが大きかつたのかしら。言つていい事とやつている事の整合性が取れていません。

「それと虹良からする匂い、気分が落ち着く」

どう見ても、鎮静してリラックスしているよつにせ、見えないけど。

むしろ、麝香ムスクでも嗅いでしまつたかのような、Hロスを醸し出していたのに。もしかして、それが彼の素？

“顔が商売道具で、女の扱いに長けていて…榎紫苑の仕事つて、ホスト的な何か！？”

そう言えば、何時もクリーチクに来るは深夜過ぎだつたり、明け方だつたり。微妙な時間だつたわ。

「…なんか、すつきりした」

私がモヤモヤしだしたのに、勝手に自己完結した美形男は、ベッドから体を起こす。

「すつきつついでに、やつぱ風呂」

「…もう、勝手に入っちゃつてください」

止める気もなくなつた私は、ため息とヒヤヒヤ俯き、部屋から出で行く相手を見送つた。

「…はあ。とりあえず、シーツも汗で濡れてるから換えておかないと。それから…」

効果はいまいち期待できないけれど、ルームフレグランスを調香しておこひ。

これ以上、不眠が続いて、おかしなことをされても困るから、試しに持たせてみよう。

美菜先生も確か、同じエッセンシャルオイルを持っていたから、それを借りればすぐ作れるし。

お粥はとりあえずキッチンに下げる…。

そんなことを考えながら、小さな土鍋の乗つた盆を持ってキッチンへ戻る。

「あら、しーちゃん食べなかつたの?」

キッチンで冷蔵庫を開いていた美菜先生が、私を見てそう尋ねる。

「熱が下がつたから、お風呂に入るやつです。あ、美菜先生、調香したいのでエッセンシャルオイルを貸してもらつても良いですか?」「ええ、それは構わないけど…」

美菜先生が、じつと私を見つめてくる。
しかも、表情が険しい。

「なにか…?」

美菜先生は、自分の左首筋に指をあてる。

「此処、付いてますわよ。キスマーク」

最初、何の事か分からず首を捻り、冷蔵庫のステンレスに映し出された自分の左首筋を確認する。

そこには、小さく丸い赤い後がくつきりとある。

しかも、服でも髪でも隠しきれない所に。

それは、榎紫苑が口づけてきた場所だった。

とつやに自分の首筋に手を当てる。

自分の血の気が、一気に引くのが分かる。

「しーちゃんつたら、あたくしの警告に逆らつなんて、良い度胸じやありません事？」

そんなことを美菜先生が言っていたけれど、私の耳にはあまり届かなかつた。

“ なんて事をするのよ、あのエロ倒錯男！ キスより性質が悪いじやないのよつー ”

次第に、ふつふつと怒りがこみ上げていた。

「 … つ、榎紫苑の莫迦あああああつ！」

その絶叫は、浴室にいた榎紫苑の耳にも届くほどだつた。

30（後書き）

文字通り、いろんな意味での実力行使の力技が此処に…
イロイロ期待された方、すみません。一応、このお話はコメディ
なので…ヒロインがヘッドバッドと云つ暴挙をお許しくださいませ。

第七章 時にはハンターの様に

「…つ、榎紫苑の莫迦あああああっ！」

シャワーを浴びている最中、そんな吉良の絶叫がかすかに聞こえた。

声の調子から、かなり激怒しているのは明白。
大方、首筋に付けた痕にでも気付いたのだろう。
降り注ぐ湯に打たれながら、俺は自然に口元が緩んだ。
見える場所に、わざと残したのだ。

しばらく困ればいい。

俺の行動を、無視できなくなるくらい。

俺の事が、脳裏から離れられなくなるくらい。

§

シャワーを浴びた後、さつき寝ていた客室に仕事用の携帯電話を忘れていた事に気づき、俺は取りに戻った。

扉を開けた瞬間、部屋からさつきまではなかつた芳香が漂つ。

吉良の纏つ匂いと同じ香りとほぼ同じである事に、すぐに気付い

た。

中を見ればそこには、吉良がスプレー・ボトルで何かを噴霧していた。

彼女の首には、美菜様のスカーフが巻かれている。応急的に、痕を隠したのだと分かる。

「…居たの？」

あのまま怒つて帰つたものだと思っていた俺は、彼女が居る事に驚いた。意外に神経が太いのか？

床に丸めて置いてあつたベッドマットと、シーツを吉良は拾い上げる。

ベッドに視線を向ければ、シーツが変わっていた。

「居ますよ。仕事ですか？」

「仕事？」

「特別労働として、院長からお給料をもらひ「」になつたので、どんなに貴方が嫌でも、お金の分だけは働きます」

「給料つて、いくら？」

「今回は、通常の看護師の時間給の三倍です。貴方から受けたセクハラを考えれば、安いくらいです」

淡々と言葉を返す吉良に、見えない鋭い棘を感じる。

余程、頭に来ているのだろう。

それでも仕事をこなすのは、仕事に対するプライドなのか、その時間給のためなのか、俺には良く分からない。

そもそも、看護師の時間給なんて俺は知らない。

「…今回は、つてことは、何度かそう言つ勤務を？」

「貴方の診察の時は、全部、特別勤務です」

「…吉良って、どうして俺の診察に立ち会つ」としたの?」

「給料が良かつたからです。老後を考えたら、蓄えは多くしておかないと」

“二十代で既に老後の心配?”

何というか、吉良の考え方は独創的だ。

「金を持っている男と結婚すれば、別にそんな心配しなくていいんじゃないの?」

「一人で生きていくつて決めたので、結婚も恋愛も、要りません」

そう言つた彼女の言葉には、かなり強い決意が含まれているのを感じた。

一瞬、垣間見えた、誰も寄せ付けない雰囲気が、その言葉の根底にある物の根深さを語つてこむよつでもあった。

「彼氏も?」

「いたら楽しい事も増えますけど、居なくとも不自由する事がないので。今は欲しいとも感じません」

彼女のその一言が、俺の中に黒い靄を作る。

吉良はシーツを抱えながら、部屋の出入り口を塞ぐよつに立つていた俺の前に立つ。

そして、手に持つていたスプレー・ボトルを俺に差し出す。

何でもない、小さなスプレー・ボトルの中には、透明な液体がたくさん入つてゐる。

「今日、此処で休んで効果があるなら、このルームフレグランスを寝室で使ってください」

「「」の部屋の香りと同じもの？」

「ええ」

「これも仕事の一環？」

「… そうなりますね」

少し間をおいて答えた吉良は、ずり落ちそうな剥がしたシーツ類を抱え直し、ボトルを手にした手を更に俺の前に付きだす。

仕事だから。

そんなことは当然のことなのに、気に入らない。

当然の様になされる彼女の気遣い。

仕事となつた途端に、先程の気まずさすらなかつた事の様に包み隠して俺と向き合つ、大人の対応に、酷くイライラする。

「… 横さん？」

「あ、ああ。ありがとうございます」

俺は差し出されたフレグラムスポットルに、そつと手をのばす。

そして吉良の手ごと掴んで彼女の体を引き寄せる。

バランスを崩した吉良は、持つていたシーツを落とす。

俺は驚いている吉良の腰に腕を回し、そのまま、彼女の顎を捉えて唇を重ねる。

「んんっ！」

床に、ボトルが落ちる音がする。

吉良が俺を押し退けようと抵抗すれば、俺は彼女の唇をこじ開け、深く口づける。

逃れれば追い、誘い出して絡めて、思考を遮断するように腔をゆっくり犯していく。

吉良の抵抗は次第に消えていき、代わりに耐えるように俺のシャ

シをきつく握りしめる。

触れては重なる唇の隙間から、苦しげに零れる苦悶の吐息が甘く
氣だるいものに変わる。

重ね交差する熱も、上気する呼吸も、堪えるように苦悶する表情
も、劣情を露り立てる。

“… そういうや、 じい 健斗の家だつたな”

吉良との口付けの最中、先の行為を望み片手で部屋の扉を閉じ、鍵をかけた時、わずかな理性が俺に重要な事を教える。だが、頭の中で派手な警鐘が鳴るのに、心地良く心を浸食する快樂に抗えない。

いつもなら、主導権は自分にある。快樂に溺れることなく、じい か一線を引いて冷静な自分がいる。

けれど、吉良とのキスは違う。

駆け引きを忘れ、彼女の不慣れな口付けに何故だか溺れていく。吉良の体を壁に押し付け、長く口づけを繰り返しながら、彼女の首に巻かれていたスカーフを緩めて解く。

露わになつた首筋にある、まだ鮮やかな赤みをさした痣に唇を寄せる。

いつもの淡く芳香するラベンダーの香り。なのに、今日のそれは貪りつきくなるほど甘じ果実の香のようでもあつた。酷く、劣情をそそる。

彼女の体を太ももから上へとゆるゆると撫でながらひらひらとしたチュニックの内側へ手を忍ばせる。同時に、残した意味を確かめるように自分で作った赤い華を舌で撫であげれば、吉良は媚態を帶びた短い悲鳴を上げ、彼女の体がびくりと震える。

キャミソールの内側から彼女の肌は滑らかで柔らかく、それでいて贅がない。白衣越しにスタイルが良いと思つていたけれど、実際、そのぐびれた腰のラインは申し分のない曲線を描く。

ゆつくりと彼女の体のラインを確かめながら上昇する俺の手を、吉良が掴んだ。

「…や…です」

顔を上げれば、朱に染まった顔の吉良が、涙が滲む双眸で俺を睨みあげる。

表情はどこか熱に浮かされて色香を映し、俺の心を揺さぶる。

「いい加減にしてください…美菜先生と院長に報告しますよ」「報告なんて、するまでもないよ。どうせ、吉良の喘ぐ声が部屋の外に漏れるから」

「よ、他所様の家で、何をするつもりですか…節操なし…なんでこんなキスをするんですか」

吉良は、体に力が入らないのか、弱々しい声でそう窓めて尋ねてきた。

「仕事も手に付かなくなるくらい、理性食い破るくらい、俺の中に貴女が居るから」

寝不足で思考がおかしくなった訳でもなければ、美菜様の電話が全ての発端でもない。

あれは、引き金にすぎなかつたのだと分かる。

美菜様に牽制された時、頭では理解できても、感情が吉良との関わりを断つ事を拒絶していた。

それは、吉良が俺にとって、都合のよい有能な看護師だったからではない。

俺は仕事と私生活の境界線さえ見えないほど、ずっと何かを演じていた。

人に会つ度、相手に合わせて自分を演じて心を隠していた。特に女性には。

人に裏切られて、捨てられるのは一度だけで十分。女など信用できなかつた。

利用価値を見出せなくなつたからと、幼い俺を簡単に捨てて消えた母親の呪縛が、無意識に俺に鎧をまとわせる。

誰にも心を開かない。覗かせない。

それは、俺の事を一番、理解しているであろう健斗にさえ。

本当の自分が何なのか、自分の心が本当に感じている事が分からなくなるくらい、心が麻痺をしていた。

なのに、一人になるのはどうしようもなく怖い。

孤独は不安で、一人で眠る事さえできない。

睡眠薬を使っても、徐々に効かなくなつて薬の量が増えるばかりで、眠れない。

眠れなければ、誰かと過ごして不安を消すしかない。

自分が誰とも分からぬ何かを演じたまま、息を抜く場所すらわからぬ。

そんな自分に、どこかでウンザリしていた。

『セクハラで訴えますよ?』

出会つて間もない吉良に言われた一言。

上坂伊織でもなく、榊の一族としてでもなく、ただの『榊紫苑』

としての俺を見て反応を返した彼女に、俺は安堵した。

愛想笑いでも作り笑いでもなく、心の底から自然にその時、笑えた。

事務的な会話がほとんどだつたけど、最初と変わらない接し方の彼女と会話するわずかな時間だけ、自分を取り繕わなくて良かつた。そして、彼女が纏う香りが、仕事の事も他所に置いて、眠ろうと焦燥する気持ちも減らしてくれた。

診療の時間の間だけが、俺の安息だった。

「俺、貴女が気に入つている」

彼女への感情を言葉にするなら、それは『好意』だ。

他の女には芽生えなかつた、女性の中でただ一人、吉良だけに芽生えたもの。

「……誰が、誰を…？」

「俺が、貴女を」

吉良は不思議そうな顔をしていた。理解できていないのだらう。鋭いようでいて鈍感な彼女には、難しいのか。

「…記憶のじ」をじう探しても、その選択肢に行きつく思い出がないんですけど」

困惑したよつこ、至極真面目に吉良はそう答えた。

「そう？俺としては、今の給料の倍出すから、健斗の所を辞めて俺専属の看護師になつてもらいたいくらいだけど」

途端に、吉良の表情が不快に歪む。

「ヘッドハンティングですか？貴方、院長の従兄弟でしょ？何考えているんですか。看護師なら、他を当たつてください」

「俺は貴女だから欲しいんだよ」

「嫌です」

「即答？」

「貴方が大つ嫌いなので、無理です」

間髪いれず率直に言葉を返した吉良に、思わず苦笑が漏れる。

激しく嫌われたものだ。それで引き下がるつもりもないけれど。

「今はそれでも良いよ」

「今も未来も、変わらつもりはありません。分かつたら、離れてください」

逃げ場のない拘束された状況でも、彼女は視線を逸らさない。まるで、逃げたら負けると言わんばかりに、睨むよう。

あのまま体に教え込んで籠絡した方が良かったのかもと、少し後悔したけれど、簡単に靡かれたら今すぐに吉良への興味を失つてしまいそうだったのも事実。

それに、あの泣き出しそうな顔は見たくない。じっくり攻め落とすしかないだろう。

健斗にすら女として靡かない吉良を落としたら、従兄弟はどう顔をするのか。

俺を拒む吉良が、俺に堕ちたらどう変わるのか。

想像するだけで胸が躍る。しばらくは、退屈しなくて済みそうだ。

「俺は、欲しいものは諦めない主義だから、覚悟してね」

彼女に軽く口づけて挑発的に笑えば、吉良は「貴方なんて、大っ嫌いっ！」と絶叫した。

その後、吉良は逃げるようじて榎邸を後にし、入れ替わるようじて屋敷の主、榎健斗が帰宅した。

美菜様は吉良を車で家に送る為に外出し、不在だった。
健斗は吉良が作り置きした料理で遅い夕食を済ませ、リビングのソファーに腰を下ろし、英字の医療雑誌を読んでいる。
俺は健斗の隣に腰を下ろした。

「…お前、吉良にまた手を出したってな？あれには、遊びで手を出さなつて言つただろ？」

雑誌に向かってそのまま、健斗は呆れたよじて叫びつ。

「本気なら良い訳？」

健斗が俺をじろりと見る。莫迦な事を言つなど眼が訴えかけてくる。

「なあ、健斗。俺に吉良をくれよ」

「…お前ら親子は同じ事を言つやがるな。吉良は物じやねえ」

まるで射殺すような鋭い瞳が、レンズ越しに俺を貫く。

比較対象とされなくない人間と同等に扱われた健斗の言葉に、自

分の表情が硬くなるのを感じた。

「…どういう意味だよ」

「お前の親父も、三年前、吉良をよこせと言いやがった。無論、断つたがな」

一重の意味で、俺は驚いた。

絶縁状態の俺の父は、榊一族の本家の長。医療法人『聖心会』の現会長でもある。

日本の医師会にも絶大な影響力を持つ会長の要請を、傘下の医者が断ることなど、医者としての死活問題。

そして親父が吉良を知り、彼女を欲したという事実は、少なからず俺を動搖させた。

「まあ、お前の親父は吉良を看護師として、純粋に手元に残したかつたらしいがな」

「あの親父が?」

「吉良は元々、優秀な『器械出し』だったからな」

「器械出し?」

聞き慣れない言葉にて、俺は首をかしげる。

「オペで、メスをはじめとする手術器械を医者に手渡す仕事だ。『いづみ病院』で会長一派が高難度のオペをする時には、必ず吉良が指名された」

医療にも榊一族の内情にも全く関知しない俺には、良くは分からぬが、吉良が親父に入られているというのは分かった。

人材コレクターの親父が欲しがる人間だ、吉良は俺が思うより有能なのかもしれない。

「吉良は元々、本院に勤めてたのか？」

「ああ。あいつがオペに入ると、いちいち指図しなくても器械が出てくるから、無駄な時間がなくなりて医者の集中力を妨げない。だから、オペがしやすい」

「すごい事なのか？」

「退職をしてオペから退いても、未だに『聖心会』や他の病院からもヘッドハンティングされるくらいにはな」

さつき、吉良が俺の言葉をヘッドハンティングと勘違いし、露骨に不快感を示した理由が分かった。

「…何でそんな有能な人が、健斗の所で働いているんだ？」
「俺と美菜に勧誘されて、逆らえると思つてたのか？」

健斗は嘘か真かそう嘯き、鼻で笑う。
確かに強力な一人に勧誘されたら、逆らえないだろうが、腑に落ちないこともある。

「吉良も健斗も、親父の命令を無碍にして平氣なのか？」「紫苑、切り札ってのは、何時使うか知つてるか？」

不敵に自信たっぷりに唇の端を歪めた従兄弟に、俺はため息をつく。

裏で何かやつたのだ。

しかも、医療界の首領でもえ引き下がるほどの何かを盾に。

「会長にも、お前にもくれてやるつもりはない。ひとつ諦めて、他の女でも探せ

「嫌だ」

「餓鬼か、お前。会長や凱と対峙も出来ない癖に、吉良を手に入れられると思うなよ?」

凱…その名前に、俺の心が酷く澁む。
奴は俺の三番目の中母兄で、歳は健斗と同じ、脳外科医で今はアメリカにいるらしい。

正妻の子供である凱は、妾腹の俺が気に入らなかつたらしく、俺は散々いびられた。

凱は健斗と歳が同じこともあり、何かと比較対照されてきたせいか仲が悪く、健斗は意趣返しか俺に何かと目をかけてくれた。
他の異母兄弟とも仲の悪かつた俺にとっては、健斗の方が実の兄貴より親しみやすい。

「あの腹黒の話なんかするな、胸糞悪い」

奴の事を思い出すと、自分の感情が歪んで黒くなる。
あいつの執拗な嫌がらせのおかげで、俺には癒えない心の傷と忘れようもない根深い恨みがある。

「お前、ドス効かせて喋るな。おまけに人相まで悪くなつてゐぞ」「あいつ思に出すと、悪意しか芽生えないんだよね」

指摘されたので、一応、改めたが、俺の不愉快指数は奴のせいで上がりつぱなしだ。

「だいたい、親父はいざ知らず、何で凱まで引き合つてに出すんだ。
嫌がらせか」

「吉良は凱の、一番のお氣に入りでもあつたからな」

俺の腹の底で、黒い澁がまた沈殿する。

健斗は手に持っていた雑誌を閉じ、ガラステーブルの上に置くと、代わりに煙草を手に取る。

「昔、あいつらが出来ていると言つ噂もあつたが、吉良も凱もその事について絶対に口を割らねえ。一人の態度を見るに、多少なりとも浅からぬ仲なのは事実だ」

煙草に火をつけ、紫煙を吐きだした健斗は、煙草の先端から流れれる煙をじっと見つめた。

「凱の手の付いた女、お前抱けるのか？」

露骨な問いかけに、自分に笑みが浮かんだ。
それが失笑だと分かる。

「そんな女を、何で健斗が大事に出来る訳？」

俺と同等、いや、それ以上に凱と健斗の間には確執がある。
健斗の言葉が事実なら、この従兄弟は絶対に吉良を重用しない。

「美菜が惚れこんだ女なら、凱の昔の女だつと愛せる」

妻である美菜様への惚氣なのか、吉良への恋慕の自白なのか。予想しない返答に、俺は何とも言えない気分になった。

“ 何だ、これ… ”

不意に、胸が圧迫されるような感覚に襲われる。

痛いような苦しいような、胸に何か重たく大きな物が膨れ上がる様だった。

何故自分がそんな感覚に襲われるのか、理解できない。

「…それ、本気か？」

訊ねてみても、健斗の読み取れない表情と態度に、全く判断がつかない。

大方、健斗がこいついうもの言いをするときは、問い合わせた答えを期待できないのだ。

本人に、答える意思がない時の対応だ。深く突っ込んだ所で、健斗は答えない。

しかも、はぐらかしとは言え、健斗の口から不味い言葉を色々と聞いてしまった。

「…美菜様が惚れこんでいるって…吉良の事だよな？」

「他に誰がいる。美菜の最優先事項は、俺でも自分自身でもない、吉良だ。吉良にふさわしくないと思つた男を、徹底的に排除するために、美菜は俺まで利用した盲愛っぷりだ」

ひんやりとしたものが、背筋を走る。

まずい。吉良が其処まで美菜様に好まれているのは、想定外だ。

“今ですらこの様なのに、吉良向けの報復をされたら、俺…死ぬんじゃないか？”

「もしかしなくとも、美菜様から吉良を愛人にしろとか言われてないよな？」

「なんだ、美菜から聞いたのか？」

煙草を咥えながら、健斗は何でもない事の様に訊ねてくる。

「俺の愛人になれば、吉良を他の男に取られる心配はない。しかも俺の物は自分の物つてのが、あいつの持論だ。形は何であれ、手に入れられれば良いんだよ」

独裁者的発想なのか、盲目的な愛情故の発想なのか。健斗も理解しがたいのか、困惑した顔をしていた。

「女に命令されて女を口説くなんて、らしくないだろ」

「それを口実に、欲しい女が手に入るなら煽られたふりをするのも悪くない」

「お前…」

途端にしつと答える健斗に、その氣がある事を知る。

美菜様と結婚をして女遊びを一切やめた男だが、どう転んでも神の人間だ。一人の女で満足できるほど家庭的でもなければ、保守的でもない。

しかも、欲しい女」ときた。

「何にせよ、吉良はお前の手に余る。分かったら吉良で遊ぶな。本気なら尚更。美菜や会長に確実に潰されるぞ」

手に余るどころか、俺の苦手な人間リストの一トップが、見事に揃い踏みで吉良の外堀を固めている。

「吉良が俺に惚れたら問題はないんだろう?」

健斗はゆっくりと煙草の煙を吸い込み、指で挟んだ煙草を下ろした後、俺の方を向いて紫煙を吹き掛けてきた。

俺は顔をそむけ、顔の近くにある苦手な紫煙を手で払う。

刹那、胸倉を掴まれ健斗に引き寄せられた。

何事かと思つて相手を睨めば、健斗が唇の端を吊り上げて不敵に笑う。

「本氣で惚れてもいない癖に、ふざけた事ぬかすな。吉良を泣かせたら、お前だらうと破滅させるぞ」

いつもの皮肉な笑顔のまま、吐きだされたのは怒り剥き出しの低い声音。

最後の言葉には、間違つ事なき殺意の念が含まれていた。

その眼光にも、普段の人をくつて遊ぶ戯れの情は一切ない。

本気で俺を殺しかねない、従兄弟の警告に、思わず俺は息をのむ。不機嫌になるのはしょっちゅうだが、感情をむき出しにして怒りを表現する事は殆どない健斗の怒り。

「お前、もしかして吉良の事」

「ああ、愛している。…分かつたら、これ以上、俺の神経逆撫でするんじやねえ」

言いかけた俺の言葉を、衝撃的な発言で封じ込めた健斗は、容赦ない力で俺を突き放してそのままリビングから出て行つた。

残された俺は、しばらく思考が止まつたまま、身動きさえ取れなかつた。

34 (後書き)

すいません。タイトルナンバーが間違っていましたので修正しました
(^-^)

§

思考が巡る。

ぐるぐると、俺の感情を絡め取りながら、螺旋を描いて。仕事が全く持つて手に付かなくなつたことから、今日の厄災は始まつた。

親父が吉良の実力をかつているとか、吉良が凱とただならぬ仲だとか、美菜様のお気に入りだとか…とにかく、健斗が吉良を愛していると宣言するとか…。

矢継ぎ早に振り込んでくる情報。

今日はいつたい何だ。

運命なんていう下らない時間軸が、吉良に関わるなどでも警告しているのか。

俺はただ、氣負わずに穏やかに居られる時間が欲しいだけ。

それさえも、許さないなどという傲慢な権限が、一体誰に、何処にあるといつ。

“くそつ…何だってこんなに苛々するんだ”

健斗の宣言を聞いた時、自分で想像するよりも酷く心にダメージが残つた。

言葉を失うほどに、己の時を止めてしまひはじ。

従兄弟が吉良を同僚以上に見てることなど、最初から分かっていたのに。

臆面もなく言い切つた健斗に驚き、言葉を失つた。

お前には絶対に渡さないと言わんばかりの態度に、次第に苛立ちが募つた。

“お前の女でもない癖に”

心の中でそう悪態づき、俺は、ベッドの上で寝がえりを打つ。部屋に淡く立ちこめるハーブの香り。

吉良が調香したと言ひ、ルームフレグランスの匂い。

ラベンダーとマンダリンが混ざったその香りを、瞳を閉じてゆっくりと鼻梁に取り込んでみる。

ラベンダーの作用か、少しだけそれ立つた気持ちが鎮静する。

“確かに氣休め程度ではあるのかもな……”

劇的な効果はなくとも、緩やかな効き目はあるようだつた。だが、吉良の傍にいるような安寧はない。

吉良が纏っている香りとは、わずかに違うからか。彼女が使用しているシャンプーやボディーソープの仄かな香りが足りない。俺は他の人に比べて匂いには敏感な性質だから、そつと小さな匂いの変化でも気になる。

彼女から漂う芳香は、もっととしとやかで甘美だ。

例えるなら花の様だ。楚々としていたながら、匂い立つ香りで蝶や蜂を誘い込む。

吉良の香りは俺を優しく抱擁して、柔らかな女の肌と人の温もりを想像させる。決して淫靡ではないのに、俺の中から欠落していた欲情を呼び起こす。

触れて蜜のかのじよの甘さを知つたら幾度だって吉良を求めずにはいられない中毒性の高い媚薬の様。

それを思えば、此処に宿る香りは人工香料の様で他人行儀。

仕事と割り切つて俺に接する彼女と同じ、そつけない匂い。

そう思つと、無性に苛立つ。

彼女が仕事なのは当然で、俺は穏やかに過ごせねばそれではよかつたのに。

吉良を手に入れたい。

まるで子供がおもちゃを欲しがる時の様な、わがままな感情ばかりが湧いてくる。

欲しくて、欲しくてたまらない。

俺だけを見て、俺の為だけに心を向けて欲しい。

そう願う。

けれど、どこかでそれを拒絶する。

“所詮、女なんてあの女と同じ。慾深く、利己主義で、男も子供も己を飾るものとしか見ない。信用などできるか”

相反する思いが、俺のなかで蠢めぐ。

飽きた玩具を捨てるように、他の男と消えた母の影に、思わず俺はベッドを殴りつける。

スプリングが重く鈍い音で軋む。

あの女がとつた自墮落な行動のツケは、全て榎本家に押し込められた俺が受けた。

一度と、本家の敷居など跨ぎたくもない。

あの苦痛ばかりの安らぎのない日々に追いやつた母を、赦さない。その母と同じ女という生き物を、信用などしない。

どうせ、吉良も同じだ。

本性など暴いてみればあの女と変わらない。

そう思い、要らぬと拒めば、どこかで欲しいと望む。

その終わりを知らない葛藤が、俺の中に苛立ちを募らせる。

“結局のところ、俺は吉良をどうしたい？”

自分の本心が分からない。

何故、他の女には感じなかつた物を、吉良にだけは感じるのだろう。

良い思いも、不愉快な思いも。

だから：俺は惑つたま。

終わりのない螺旋思考に落ちて…。

第八章 普段おとなしい人間はキレると危険

人生稀に見る怒りを爆発させてから、一日が過ぎた。

私、怒つても、翌日以降にその怒りを持続させた事がなかつたんだけど、今回はちょっと特殊みたい。

忘れたくても、鎖骨に近い首筋に残された消えない痕が、私にその時の事を思い出させる。時間が経っているのに、榊紫苑に触れられていた感触がまだ私の中に残つてゐるみたいで、思わず身体がゾクリと震える。

一度ならず二度までも…一度なら、なかつた事に出来た。榊のいつもの戯れが少しだけ過剰だつただけだつて。

なのに、お風呂上りに迫つてきた二度目のアレは危うすぎる。

頭の中は嫌だつて訴えているのに、身体が榊紫苑のキスに抗えなかつた。

あの人とのキスは危険。手慣れていると言うか、巧いのだと思う。抗う気持ちさえ削いでしまうほど。

節操のない榊紫苑も嫌だつたけど、そんな男の口付けに一瞬でも囚われてしまつた自分はもつと嫌で、許せなかつた。

心のささくれ立つたものが嫌でも刺激されて、恥ずかしいよりも苛立ちが止まらない。

“あ、まずい…眉間にしわが寄つてる”

鏡を見なくても、自分の眉間に深く刻まれる不愉快ゲージが分か

る。

大きく深呼吸をして気分を切り替え、掃除に集中する。

「あげはちゃ～～んっ！」

朝、クリニックの待合室で掃除機をかけていた私に、受付事務員の藤堂絢子さんが私にタックルをかけるように抱きついた。

「うわっ！あ、絢子さん、び、どうしたんですかっ！？」

危うく倒れそうになりながら、掃除機の電源を切つて、背後にしがみついている絢子さんを見る。

十四歳になる息子が居るとは思えないナイスバディな絢子さんは、更衣もせず私服姿で、半泣き状態で私を見上げる。

「うう……伊織があ……」

「はい？伊織？？」

「伊織が入院しちゃったのぉ」

「……伊織って……何処のですか？」

「上坂伊織よおつ！」

要領を得ない私にギュッと抱きついて、お氣に入りの俳優の名前を叫んだ絢子さんは、さめざめと泣きはじめる。

「ああ、泣かないで下さい、絢子さんっ！」

「……朝っぱらから、百合の世界か？」

「一ヒーカップを片手に、怪訝そうな顔をして院長が診療室から顔を見せれば、絢子さんは院長を睨む。

「今日休みます」

「大泣きしながら出勤出来るくらい元気な奴に、休暇なんざやれるか」

「愛しい人のピンチなんですか？」

「どうせアイドルとか言つ、虚像だらうが」

「伊織は俳優ですか！」

泣くことも忘れてそう力説した絹子さんに、院長は鼻で笑う。

「で、そのお前の愛しい俳優とやらは、どうピンチなんだ？」

「昨日の撮影中に高熱で倒れて、病院に搬送されちゃつたんですよ。過労だつて…だから、しばらく入院加療するつて報道が」

「体調管理もできない野郎、一人前とは言えねえな」

いつもながらの辛口の院長こ、絹子さんは恨めしそうに院長を睨む。

「売れつ子なんだから、色々忙しいんですね」

「ま、お俺には関係ない。そいつの女でもないお前も関係ない。仕事はやれ。以上だ」

「きいいいいつ！鬼つ！」

「あ、絹子さん、落ち着いて…」

「吉良、ちょっと来い。絹子は代わりに掃除してろ」

「悪魔つ！人でなし！あんたには優しさがないのかつ…」

「あると悪つか？」

鼻で笑つた院長に、絹子さんはプリプリ怒つている。

「それが終わつたら、ひとつとマイク直せよ。付け睫毛が片方外れてるぞ」

「……！そんな大事なことは、早く言えつ、一ノの野郎！」

言葉遣いがすっかり悪くなつた絢子さんは、低く怒鳴つて、慌てて化粧室に走つていく。

いつもながら、嵐の様な迫力美人。

すっかり地が出ている絢子さんが、実は元ヤンだったのは一応、彼女の中では秘密事項なんだけど、院長のせいでスタッフには周知の事実になつてしまつている。

イケメン好きな絢子さんだけど、年下は好きだけど、年上には興味が湧かないらしい。だから年上の院長にも食指が向かないのだとか。

事あるごとに今みたいなやりとりがあるけれど、診察時間帯に口論になることはないし、険悪な雰囲気を引きずる事もない。

お互い大人だから、その辺はとてもドライ。

絢子さんは美菜先生が他所の病院から引き抜いてきただけあって、医療事務としての能力スキルも、接客的な能力もとても高い。

そして何より、美菜先生と院長好みの美人。

私以外はみんな美形なの、この職場。だから仕事中、私の姿は普通すぎて浮くのよね。

「おい、吉良」

彼女の後姿を見つめていた私の傍に、いつの間にか院長が立つていた。

しかも、顔が異常に近い。

触れてしまいそうなほどに至近距離に、クリーチクの美形筆頭の顔があつて、思わず私は体をのけぞらせた。

36 ～吉良sider～（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。
寒くなつてしまひましたので、皆様、お風邪を召しませんよう
自愛くださいませ。

「な、なんですか…院長」

「上坂伊織つて野郎、お前どいつ思つ?..」

そう問われ、私は首をかしげる。

どうと言われても、絢子さんが大ファンの、かなり有名な若手俳優」と言う事しか知らないし、顔も良く覚えていない。

フルネームを言わされて、ようやく誰かわかるくらい。

私、仕事以外の環境で人の顔と名前を覚えるのが苦手で、芸能関係の人の事が全く分からぬ。上坂伊織という人は、絢子さんがいろいろ話をしてくれるから、何となく記憶にあるけど、仕事に直結しない人は手当たり次第忘れていくの。

その代わり、仕事で携わった人の事は細部まで覚えているの。だからよく、街の中で久しづりつて声を掛けられても、誰だか解らない人が居て困るの。院長には、日頃からもう少し浅く広く人間を覚える努力をしろって叱られるけど、どうやっても覚えられなくて…。

あ、そう言えば上坂伊織つて、良く週刊誌にゴシップ記事を書かれているとか、絢子さんが言つていたつけ。

貞操觀念が総崩れで、無駄に顔だけは良かつたという印象だけがある。

“…あれ…なんだか似たような印象の人間が、最近、身近にいたような気がする…”

ちらりと榎紫苑の顔が脳裏をよぎって、再び、眉間に力がこもる。

慌てて頭を振った。

あんな女性の敵、二人も三人も要らない。
気のせい。気のせいつてことにしておけ。

「どうした、吉良」

「え、あ…いえ…芸能人なんて、関わることもない私には無縁の人
ですから…まあ、お大事にとしか言いようが…」

不意に、院長がものすごく変な顔をした。
なんだろう。少し憐れんでいるような、小馬鹿にしたような…と
りあえず、良い感じはしない表情。

「…何ですか、その可哀想なものを見る目は…」

「お前、相変わらず芸能関係の知識が疎いまだな?」

「な、なんで…」

図星をさされ、私は怯む。

一応、覚える努力はしているのだけど、テレビすらほとんど見ない私には、芸能界の人間は、誰が誰だが良く分からない。
名前は聞けども、顔の繋がらない有名人が幾人か認識できているだけ。

「お前に知識があれば、その反応はあり得ない」

意味深な事を言われたけれど、何を指して言つてるのか、私には
皆田見当もつかず、首をひねる。

「どうして?」

院長は深々とため息をつきながら、呆れ果てた様に首を横に振る。

「お前、その鈍さで紫苑の口説きもスルーしただろ」

今一番聞きたくない名前をさうりと言つた院長は、私の白衣の襟首に指をかけ、軽く引っ張る。

空気と人目に晒されたそこには、絆創膏で隠した榊紫苑の置き土産がある。

「こんなものを簡単に付けさせるくらい鈍い女だからな、お前は」「つーー院長！何、人の襟開いてるんですかっ！」

ふしだらな手を跳ねのけよつとすれば、逆にその手を掴まれる。

「その気もねえのに、あいつを誑じこむな」

まるで私が榊紫苑を誘惑しているかのような口ぶりに、私の中にある太い何かがブツツと、重く大きな音を立てちぎれた。

黒い何かが、私の中に満ちていく。

眼鏡の奥の院長の瞳が、わずかに大きくなる。

「榊のスケベ遺伝子と、電光石火の行動力を棚に上げて、私に説教ですか院長」

心を侵食する暗闇とは裏腹に、自分の表情に極上の笑みが浮かぶ。人間、心底頭にくると、冷静なまま怒りがこみ上げるのみね。

「それとも私がふしだらで、下半身に節操のない猿女とあっしゃりたい？」

「いや……」

「訳のわからない理由を並べたててキスをする、キスマーカは付け

る。嫌だと言つても、何度も絡んでくる。一体、榊一族はどんな教育をしているんですか？」

「…そりや、紫苑の奴が単に欲求不満だつただけだ」

精彩を欠く返事をする院長は、握っていた私の手を離し、わずかに後ずさる。

逃すものかと、私は院長の白衣の襟を掴んで、自分に引き寄せる。

「そんな下種な理由、理由になりませんよねえ？」

「…あいつ、お前に好きとも惚れたとも言つてねえのか？」

「そんな榊の口説き常套句、信用の欠片もありませんよね？」

「…言葉は軽いが、嘘は言わねえよ」

「その軽さが問題なんですよね？」

間近にある院長の表情は殆ど変わらないけれど、強張つている。

「お前、マジで落ち着け。何しでかしてるか、分かつてんのか？」

「お説教しているんですよ、院長。分かりませんか？」

「…無茶苦茶キレてるだろ、お前」

当たり前でしょう。我慢も擦り切れ、許容の臨界も既に突破しているの。

「…私、大つ嫌いなんですよ。榊紫苑が。嫌いな男に迫られて、迷惑してるんです」

何が悲しくて、何度もキスされなければならないのか。

特別勤務を外してくれと言つても、院長は外してくれない。一度と会いたくないのに。

「おはよ…ひつ…」

視線を向ければ、白衣に着替えたパート看護師の結城さんが、待合室と廊下の狭間で怯えた顔で後ずさっていた。
その結城さんの後から入ってきた、社会福祉士の五藤さんが、結城さんとぶつかった。

「おわつーなに、結城…げつー。」

二人は、私と院長を交互に見て、顔をひきつりせつ固ました。

「おはよーいわこあす」「おはよーいわこあす」
「お、おはよーいわこあす、し、しこじし歸郷ー。」

「ひ」と笑みを零せば、五藤さんが冷や汗を垂らしながら、普段使わない役職名で私を呼ぶ。

「…院長、何やらかしたんだ？…じゅつち…じゃない、師長ひつれいふりに「ブラック降臨してますけど」「わ、悪い事言いませんよって、はよ、あげちゃんにお謝りやす」「…お前り、最初から俺が悪いと決めつけてるだろ」「ひ」と笑みを零せば、五藤さんが、こなにに怒りませんです。

「ほり、滅多に怒りはらんあげちゃんが、こなにに怒りませんです。結城さんと五藤さんと、ほぼ同時に頷く。

健斗先生が、いけずしさったんと違いますの？」

「普段、院長に対してキレイで我慢できる方が不思議ですよ。普通だったら、刺されてますつて。早く、謝った方が良いですよ」

“どれだけ日頃の行いが悪いんですか院長…”

一人の容赦ない突っ込みに、さすがの院長もぱつが悪いのか、呆れたのか閉口する。

院長が口撃で閉口するのは、余程、自分の身につまされる事があったか、反撃の計画を立てているか…。

院長が何を企んでいよつとも、私は自分の身の危険 主に榊紫苑を早急に解消しなければ、身も心も食べられそう。それだけは、絶対に嫌！

「ともかく、貴方の従兄弟をどうにかしてください。お願ひしますね、院長」

「…ああ…分かつた…善処する」

「頼みますよ？」

「念押しするな。やると言つた」とはやる

不承不承といった様子で答えた院長から、私は手を離して乱れた白衣を整える。

「それから、ついでに掃除機もかけてくださいね？」

「ああ？ それの何がついでだ」

露骨に嫌そうな顔をした院長に、私は容赦なく掃除機を突き付けた。

「師長、それ俺がやらせてもらいます！」

「五藤さんは、やり残した相談室に置いてある資料の整理をお任せしますね？」

慌てたように五藤さんが私の手から掃除機を取り上げようとしたけれど、その資料整理と言う言葉に固まつた。

土曜日に院内の勉強用資料の整理整頓を伝えたのに、途中で投げ出した状態で机の上にあるのを、掃除で見つけてしまつた。あの状態の部屋で、社会福祉士としての相談は受けられないでの、早急に片付けてもらわないと。

「おー一人とも、お・ね・が・い・し・ま・す・ね？」

念押しするように、極上の愛想笑いを浮かべれば、五藤さんは壊れた振り子人形の様に頸を縦に振る。

「じょ、了解っす！就業までに終わらせますっ……！」

対して、院長は短くため息をつく。

まるで子供のわがままを前にして、呆れかえるように。

「わかった、わかった。やりやあ、良いんだろ？」「わかった、わかった。やりやあ、良いんだろ？」

「院長。私、明日から一週間、有給休暇使用して良いですか？」

勤め始めてから一度も有給休暇を使つていなかつから、かなり未消化分が溜まつている。

私が居なくともシフトも、おおよその業務も回るようになつてはいるけれど、院長の業務だけは私が居ないと、院長が色々困る事になる。

主に、面倒くさいと言つ理由で私に仕事を委託している院長の怠

情が成したツケなのだから、自業自得と言えばそれまでだけ。

院長は、かなり気難しい。コーヒー一つにしてもマメの分量や水の種類が違うと不機嫌になるし。仕事中は必要なことを最低限しか言わないから、一つの言葉で幾つもの意味を考えて行動しなければ仕事が回らないから大変。

診療中に滞りが出来ると患者様をお待たせてしまつので、そうなると院長はイライラが止まらなくなる。そうならない為に私たち看護師が診療介助に入るのだけど、月曜日や土曜日の診療は患者様の来院数が格段に上がる日は、忙しさで院長も普段以上に必要な言葉を喋らなくなるので、判断に困る事が多くなる。

でも、どうすればいいか院長に尋ねるとブリザードが吹き荒れるから、誰も院長に質問が出来なくなる。そうなると、必然的に師長職の私に、判断が回される。ほとんどの事は私の判断でも問題はないし、院長の判断が必要な事項はきちんと院長から確認を取る。

怖かるつと、其処を押さえて確認をすれば院長は院長の機嫌は悪くならない。

つまり、月曜日と土曜日の診療時間帯は戦場になるので、細かな仕事を引き受けの私が欠けると院長の手が何度も止まる羽目になつて、院長の仕事が回らないという構図が出来上がる。

「…掃除機、かけさせてもらいます」

院長が使つたことのない言葉遣いで承諾の返事をし、私の手から掃除機の柄を奪い取り、手に持つていた「コーヒーカップを代わりに私の手に乗せる。

そして、おもむろに掃除機をかけ始める。

仮にもクリーチクの長が掃除をするという一種異様な光景に、五藤さんも結城さんも掃除を代わるべきか困惑している様子で、院長を見ていた。

「くれぐれも、院長に手を貸さないで下さいね？」

二人に念押しをすれば、一人はびくつと身を跳ねさせて、何度も

首を縦に振る。

「ブラックな吉良つか…じゃない、師長には死んでも逆らこません！俺は俺の仕事を完遂させてきます！」

「ほ、ほなら、うちもそろそろ診察の準備します」

それくたと結城さんも古藤さんも、その場から立ち去る。

入れ替わるよつこ、絢子さんが戻ってきて、院長の姿に飛び出す

る。

「ちよっとーー台風が来るつー…ビーフショット、雅樹に傘持たせてないわよつこ…」「うぬわこや、絢子」

雅樹まやきに傘持たせてないわよつこ…

愛息の身を案じて叫んだ絢子さんを、院長は一瞥しそのまま立派られた役目を無言で完遂させた。

§

「お疲れ様でした」

診療を終えた院長に、いつものようにコーヒーを淹れて運べば、やや疲れた様子でそのコーヒーを受け取る。

土曜日と言つこともあり、患者さんの数がいつも以上に多くて診療時間も一時間近くオーバーしてしまった。

院長が見るからに疲れていたので、お茶請けに頂き物のチョコレートを二つ添えてある。

それを見た院長が机に肘をついたまま、額を指で押さえながら深いため息をつく。

「お前、まだ怒ってるのか。いい加減、機嫌を直せ」

「…いえ? 別に今は怒ってませんけど?」

「だったらどうじで、チョコレートを添えた」

甘いものが全般苦手な院長は、不機嫌にそう尋ねてくる。

私としては、掃除機を院長にかけてもらつた時点での怒りはなくなつているのだけど、院長はそうは思っていないらしい。

診療前に掃除機をかけさせたことを、ひそかに根に持つているようでもあつたけれど…。

「疲れた顔をしていたので。チョコレートには疲労回復効果がある

んですよ？それは、院長でも大丈夫なビターチョコレートです。

院長は怪訝そうな顔をし、チョコレートの包装を開き、それを口にする。

「…まあ、甘めは及第点だ

一応、召の通つた美味しいと評判の高級チョコレートなので、まづいとは言わなかつたけれど、早々にコーヒーで口の中にあるチョコレートの余韻を流し落していた。

「後五分したら、掃除するのでお部屋開けてくださいね」

「ああ」

私が診療室を出していく間際、机の上に置かれた院長の携帯電話のバイブルーションが聞こえる。携帯電話を手に撮つた院長は、ディスプレイに表示された文字を見て、眉間に深い皺を寄せて通話ボタンを押した。

「ああ、俺だ。どうした？」

院長の通話の邪魔にならないよう、そつと診療室の扉を閉め、そのまま給湯室に戻ると、結城さんがハーブティーの棚を「じやじやしていた。

「あ、あげちゃん、カモミールとローズマリーの茶葉がもうあらしまへんのよ。発注、もう無理やうか？」

カウンセリングの時に用意するハーブティーの茶葉を整理してい
た結城さんが、困ったようにそう尋ねてくる。

「え？たしか昨日、その一つ届いてますよ？昼休憩中に院長が受け取りしてましたから」

「健斗先生、何処にしまわはったんやろ…」

そういえば院長は、「しまっておいたぞ」とて、珍しく気を利かせて行動してくれていたけど、ハーブティーの茶葉なんて触つた事のない院長は片付ける場所を知らないはず。そうなると、どこに、隠したのだろ。

“下手に探すより、聞いた方がこれは早そうね”

「院長に確認した方が良いですね」

「そんなら、うち、聞いてきま…」

結城さんの声を塞ぐように、大きな音がクリーックに響き渡る。音からして、診療室の扉を勢いよく開けたのだろうけど、ちよつと大き過ぎる。

「な、何やろか…」

私と結城さんは顔を見合させ、給湯室から顔を出し、診療室のある廊下に視線を向ける。

「吉良つー！」

「は、はいっ！」

白衣を脱ぎ、激怒した様子の院長が私の名前を呼んで歩いてくる。見るかに般若の形相と、下手に関わったら殺されそうなほど危険な殺氣を立ち昇らせて、院長は大股で近付いて来る。

何度かこれを見た事のある私は、かろうじて動く足で廊下に出る。

院長が本気で怒つている所を見たことがない結城さんは、顔面蒼白して硬直している。

“さつきの電話で何があったのかしら……”

がしつと腕を掴まれ、そのまま院長に引っ張られる。

「え、ちょっと、何ですか！？」

「病院行くぞ」

「は、えっ！？ 何処のですかっ！？」

「紫苑の奴、入院先で治療拒否して暴れてやがる」

「あの人、入院したんですか！？ といつか、嫌ですよ。榊紫苑の所

なんて！」

「つべこべ言うなー 美菜でさえ手に負えねえんだ。犯すぞお前！」

「お、横暴ですっ！」

美菜先生絡みになると、この院長は傍若無人ぶりに拍車がかかる。気迫に気圧され容赦なく引きずられる私を、結城さんが心配そうに見ている。

「あ、あげちゃん…」

「ハーブティーは帰つたら何とかするので、あ、後片付けと戸締りだけ、しっかりとお願ひしますー！」

「お、お気張りやすー！」

遠くなる結城さんの声を耳にしながら、私と院長はクリーチクを後にした。

§

強制的に院長が運転する車で連れてこられたのは、榊が経営する『聖心会』系列の病院と連携関係を結んだ外部の病院。

普段は安全運転だけど、怒り心頭だった院長の運転は暴走と言うに相応しく、私は軽く車に酔つて頭がクワンクワンしている。

良く警察に追われず、事故も起じさずに無事にたどり着けたと心底、思う。

「気持ち悪…」

だけど、そんな私の事などお構いなしで院長は車から私を引きずり出して、私の腕を掴んだまま病院の中に突き進む。

病院内に入つてすぐ、院長に声をかけて来たのは、恰幅の良い中年の医師だった。

たしか院長の医学生時代のお友達で、内科医の丸田先生だ。何度もお会いしたことがある。

簡単に挨拶をした後、丸田先生は院長と私を、榊紫苑が入院している病室まで案内してくださいさつた。

榊紫苑は四階病棟にある特別室と呼ばれる、ホテルの一室の様なキッチンもお風呂も付いた豪華な造りの病室に入院しているらしい。特別室は普通の病室とは離れた場所にあり、扉で廊下が区切られている。

扉の先は、廊下に赤絨毯が敷かれた何とも病院とはかけ離れた異様な世界で、いわゆるお金持ちとか政治家とか、お忍び入院を必要

とする人など、VIPな患者様が入られる事が多い。

だから優雅な雰囲気なのだけれど、男性の錯乱した叫び声が異常に廊下に響き渡った。

思わず私は、気持ち悪い事も忘れて、廊下の先にある特別室に向かつて駆け出していた。

「待て、吉良!」

呼びとめられたけれど、足を止められなかつた。

怯えるような、威嚇するようすでいて救済を求めるその声を、無視なんて出来なかつた。

開いたままの病室の扉をくぐり、私は思わず絶句した。

榎紫苑が、男性看護師一人に背後から羽交い絞めにされても尚、それを振りほどこうと暴れていた。

部屋の中は、散々暴れつくしたであろう烈しい惨状。

ベッドの位置もゆがみ、花瓶も床に落ちて、水は零れて花は踏みにじりられてボロボロ。

点滴ボトルをつけたまま、点滴スタンドも倒れ、ところどころに血の飛沫や血痕がある。

病衣を着た榎紫苑の左腕は血で染まり、だらだらと血が滴る。恐らく、点滴をしている途中で無理やり引き抜いたのだろう。

落ち着くようにと男性看護師が大声を張り上げるが、榎紫苑は自由を拘束されたせいでより一層、体を動かして相手を振りほどこうとする。

「あげは…」

その異様な光景に目を奪われていたら、右隣から美菜先生の声がした。

声のする方を見ると、体を看護師に支えられた美菜先生が、氷の

入った袋を左の頭に当てる。

美菜先生は、どうしてよいのか分からず困惑したような顔のまま、私を見ていた。

「ど、どうしたんですか！」

「しーちゃん、強引に点滴をされてパニックを起こしてしまったの…それを止めようと/orして、ちょっとと彼の腕が当たつてしましましたのよ」

「うううとどうじやありませんよ、体が飛ばされて壁に頭をぶつけられて、脳震盪起^{おこ}しかけたんですから。本来は、安静にしていただかないといつます」

傍にいた看護師がそう答える。

納得がいった。だから院長があんなに激高したんだ…。

そりやキれますよね、院長。大事な美菜先生が怪我をしたら、私がだつてキれます。

偶発的事故だつたとしても、かよわい女の人には拳を当てるなんて、ダメ男の極み！

「あっ！近付いたら駄目ですよー！」

そんな声が聞こえた気がするけど、私はもがく神紫苑の傍に歩いていく。

沸騰した頭ではあっても、自分が何をするのかをきちんと理解はしている。

「神紫苑ー！」

持てる肺活量の全てを使って、私は彼の名を一喝するように呼ぶ。一瞬、と暴れる男の動きが止まる。

それと同時に、私は手のスナップを利かせ容赦なく相手の頬にきつい一撃を食らわせる。

「つう…何しやがる！」

叩かれて横を向いた榎紫苑は、ゆっくりと首を動かし鋭い双眸で私を見た瞬間、驚いたような顔をする。

「…吉良…？」

「そうよ。貴方、そんなに暴れ回つて何をしているの、美菜先生にまで怪我をさせて」

一か八かの荒療治で、パニック症状はどうにか止まつた相手に、努めて優しくそう声をかける。けれど、優しい言葉はかけなかつた。私に言われて榎紫苑は周囲を見回し、美菜先生を見て驚愕し、部屋を見渡してから表情を蒼白させた。

「…俺…また…やつた？」

“…また？”

その意味が分からず、それについての返事は出来なかつた。
けれど、彼の顔には後悔の念がありありと浮かんでいたので、咎めることは止めた。

「何がそんなに嫌か知らないけど、とりあえず血を止めましょ！」

暴れなくなつた榎紫苑の腕を見、彼を羽交い絞めにしていた後ろの男性看護師に『離しても大丈夫』と、目くばせすると、二人はそつと榎紫苑の体を開放する。

私は近くにあつた処置道具の中から無事だつたアルコール綿を取り、血だらけの神紫苑の左腕を掴んで、血があふれ出る抜針部位をアルコール綿で押さえる。

押された彼の腕は熱を孕んでいた。

この分だと、かなりの高熱がある筈。

「血が止まつたら、まず迷惑をかけた人に謝つて、それから体を綺麗にして休みましょう」

病院の看護師さんが差し出してくれたガーゼで神紫苑の腕に付いた真新しい血を拭いながら、子供に言い聞かせるように、ゆっくりそう説明する。

神紫苑は悄然としたまま、黙つて頷く。

「…」めん

「それは、私ではなく、後でこの病院の人たちと美菜先生に伝えてあげてください」

力なく頷いた神紫苑は、まるで咎められて泣きだしそうな子供のような顔をしていた。

なんだろう、自分は悪くないはずなのに、変な罪悪感が胸の中に芽生えてしまう。

「痛い所は？暴れた時に、どこか怪我をしていませんか？…ちよ、ちよっと神さん！」

神紫苑の空いた右腕が私の背に回り、体が強く彼に引き寄せられる。

その状況に、私は自分の学習能力の無さを恨んだ。
あまつさえ、神紫苑がＴＰＯどころか、人目さえもわきまえない

図太い神経の持ち主だと、未だ以て見抜けなかつた。

この男の腕に幾度囚われたら、私は学ぶのだろう……。

でも抵抗したくとも、看護師の性で止血途中の場所を離す事ができない。

それに、榎紫苑の体が震えている。

熱のせいなのか、それとも心因的なことなのか……。

「……「めん……やつぱり、貴女じゃないと…俺…駄目だ…」

迂闊にも意識を他所に向けていた私の耳朶元で、榎紫苑がぼそりとそう呟いた。

「え？ 榎さん？ 榎さん！」

そのまま圧し掛かるように、体から力の抜けていった榎紫苑の体を抱えた。

第九章 クレーム・ランヴェルセは甘くて苦い

病院は嫌いだ。

点滴も、注射も、病院も、それに随伴する医療従事者を含む全てが。

白くて何もない薬品臭い部屋に一人置き去りにされ、熱にうなされて悪夢ばかり見た。

待てども戻つてこない母親に捨てられたと気付いたのは、肺炎をこじらせて死に掛け朦朧とした意識の中。

『母親はまだつかまらないの?』

『子供を捨てて海外にトンズラしたわよ』

『じゃあ、雄副院長は?』

『学会でドイツ。連絡したけど、日本には戻つてこないそうよ』

『仕事人間の副院長らしい。子供程度じゃ、動じないって事か』

『まあ、ろくでもない愛人の子供じゃ、愛情も湧かないわよねえ…』

『副院長には既に後継者になる御子息が居るし、こんな身体の弱い子供、邪魔なだけだろ』

『このまま死んでも、死んでくれてよかつたとか思うかもな』

微かに届いた声。

“僕…捨てられた…の?…要らない子?”

子供心に深く傷ついた言葉。嘘だと信じたかつた半面、俺にそつけない両親の態度にやつぱりそつかとも思った。

救いようのない絶望感が、弱つた体と心を蝕んでいく。

俺は体中管に繋がれて、身動きが取れない俺の周りを医者と看護師が囮んでいた。

ぼんやりとした視界の中、見下ろす大人の威圧感と蔑みの感情が皮膚を刺し、弱りきつた俺を恐怖に貶める。

“殺される”

まるで俺の死を待つかのように冷笑を浮かべ見下ろす白い悪魔たちに、俺はそう感じた。

彼らが俺に施す点滴や注射の中に、俺を殺すものが入っているのではないかと、怖くて怖くて、いつも怯えた。

針を刺される痛みが、心臓をナイフで一突きされる瞬間と同じ恐怖を与え続けた。

ぱたりぱたりと、管の中を落ちていく点滴の雫が、誰もいない孤独を刻む時計のようであり、俺の体に入り込む毒の進入する音のようでもあった。

いつ殺されるのか、体が完治するまで恐怖は続き、それは心に根深く突き刺さった。

大人になった今も、病院、医者、看護師をみるとそれを思い出す。特に、点滴は駄目だ。

心が恐怖を思い出し、錯乱する。

誰も信用できなかつた。特に、親父の手先のような医療従事者など。

『なんだ、生きていたのか』

一命を取り留めた俺に、帰国して顔を見せに来た親父のその一言を、俺は忘れない。

俺を捨てた母親がろくでなしなら、死を期待していたかのようだ。

暴言を吐いた父親は人でなしだ。

そんな男が生業とする医者も、それに関わる医療の全てが信用できない。

なのに……どうしてここつらは俺に点滴をする?

嫌だといつてこらのに、どうして押さえつけて強引に治療を押し付ける?

俺はそんな事、望んでいない!

こんなところ（病院）に、誰が連れてきた……。

俺を、殺すつもりか!?

『神紫苑!』

俺の苛立ちを切り裂くように、冷冽でよく通る女の声が俺の中に響く。

聞き馴染んだ声に似ている。

“誰だ?”

そう思つた瞬間、強い衝撃が俺の左頬を襲つた。

最初は衝撃だけ。でも、一呼吸置いた瞬間、強烈な痛みが来た。同時に、わけも分からぬ痛みに怒りが込み上げる。

相手を睨みつければ、そこにいるのは柳眉を逆立てた長身の女性。見慣れた白衣姿の彼女に、目を疑う。

俺、熱と恐怖で頭がおかしくなったのか?

それとも、夢を見ているのか？

何処までが現実で夢なのか、区別できない程の…。

目の前にいるのは、ただ一人、俺に医療行為で恐怖心を与えた看護師。

彼女は健斗の病院に勤めているはずなのに、どうして此処にいるのか理解できない。

吉良は俺が何をしたのかを諭す様に、話しかけた。

怒りながらもそれを堪えて、俺の体を気遣う言葉をかけてくる。それだけで、心が落ち着いていく。

どれだけ嫌いと言つても、彼女は患者である俺を見捨てない。

俺に向き合つて、俺を覗て言葉をくれる。

嫌々でも、渋々でも、看護師としての彼女は、医療行為に嫌悪して怯える俺をそつと救つてくれる。

榊一族の不要な人間としてでもなく、有名な俳優としてでもなく、一人の患者として向き合つてくれる。

媚びる為ではないと分かるほど、徹底して仕事を中心とした行動は心地好くもあり、何故だか苦しくなる。

健斗と彼女の気兼ねないやり取りが、羨ましいとさえ思つ。

“ もつと、吉良に近付きたい… ”

俺の腕を取り、止血してくれる吉良が近くで遠い。
無意識に、俺は吉良の体を抱き寄せた。

その温もりも、仄かに鼻梁をくすぐる彼女の香りに安堵する。
誰も俺に与えられない、俺自身でさえ見つけ出せない安らぎをくれるのは、吉良しかいない。
彼女でなければ駄目なのだ。

俺を傍で見てくれる看護師は…。

§

目が覚めた時、馴染むとまではいかないも、見た事のある天井がまず見えた。ゆっくりと視線をめぐらせれば、ディスプレイも人任せのショールーム仕様の寝室。

部屋の装飾になんて一切興味はない。ほとんど、帰つて来ることすらない名前だけの家。それでもベッドだけは、寝心地重視で選んだキングサイズのベッドを買つた。

眠れるわけがないと分かつていても、僅かな期待を込めて買ったこのベッドにすら、片手で余るほどしか横になつた事はない。

そして、当然の様に心地良い眠りなど迎えた事もなかつた。そんなベッドの上に、俺は居た。

“俺の部屋？”

遮光カーテンの細い隙間から、オレンジの光が差し込む。窓の方角は東。夕日である筈はない。

どれだけ時間が経過したのか、どうして自分の部屋に居るのかが把握できなかつた。

“撮影中に気分が悪くなつて、気付いたら病院に居た様な気がしたけど…あれも夢か？”

ぽんやりと宙を仰ぎ見ていた俺の視界の右端に、嫌なものが映る。どうやら俺の右腕には点滴が入つてゐるらしい。

刹那、体の中を這いずり回るみづに恐怖が湧き上がり、身体が大きく震えた。思わず右腕の管を引き抜こうと、上体と左手を動かした。

が、思わず手を止める。床に座り込んだ格好でベッドにもたれかかりながら、うつむかって眠っている女性が居たからだ。

“…吉良？”

俺は彼女の手首を握りしめていた。

彼女は俺の動きに目を覚ましたのか、パッと顔を上げる。ノーメイクのせいか、目の下にはマタニティマークは出来ているのがわかる。

寝ていなかつたのか？

「気がつきました？」

空いた手の指で目をこすりながら吉良はそう尋ねて来る。彼女の服は、白衣ではなく、私服。それもかなり簡素でラフな格好だ。機能性重視という感じだけど、服のデザイン性を疎かにしている訳でもなく、趣味は悪くない。

そんな所を冷静に見てはいたけれど、一体何がどうなつているのか、状況が全く分からぬ。

「…また夢？」

「…何処から夢だと思つてるんですか？」

呆れたよつよつぶやいた吉良は、俺が握ったままの手を持ち上げる。

「そろそろ、手を離してくれません? 夜中からずっと、いつなんですかけど」

俺は訳が分からぬまま、吉良の手を離す。彼女の手首には、少し赤い痕が残つている。

自由になつた手を、吉良はそつと俺の首に伸ばして触れる。

「少しば熱も下がつたみたいですね。なにか飲みたいものとか、食べたいものあります?」

「…それより、どうして貴女が此処に?」

「昨日の昼、貴方が入院した病院に、院長に無理矢理連れて行かれたんです」

「…何のために?」

「暴れている貴方を止めるためにでしょ?」

「ああ。あれも現実か…錯乱すると、夢と現実の境界線が解らなくなる。」

と言つことは、俺はまた点滴で我を失つて暴れたと言つ事だ。

「…吉良が俺を止める? 無理だろ…男が五人がかり押さえ込むくらいなのに」

病弱だった体を鍛えるために始めた空手で鍛えられた腕つ節と筋力が、自制の効かない状態になると、俺を暴徒に変える。

唯一、一人で俺を止められるのは健斗だけ。

健斗も空手は有段。おまけに、趣味の山登りのために体の鍛錬には余念が無い。

体重を絞り込んで着痩せしてインテリ然と見えるが、その実、健

斗は意外に筋肉質でパワー系だ。

ただし、そんな健斗に止められると、力技だから互いに無傷では

済まなくなる。

吉良のように華奢な女性に、その正攻法で俺を止められるわけがない。

「救急外来に配属されていた頃は、痛みで錯乱している人が暴れて処置にならないことがあって。その対処法が役に立つだけですよ」

「ともなげにやう答えて苦笑した吉良に、俺は彼女が何をしたのか思い出す。

「パニック状態を止める為に、強い衝撃を貴方に与えたかったんです」

「…あれば、痛かったよ」

確かに、あの一撃は立派な衝撃だ。吃驚して一瞬頭の中が飛んだ。だが、次に放った吉良の言葉のほうが俺には衝撃的だった。

「ですよね…ホントはあの方法じゃなくても良かつたんですね…ごめんなさい」

「…吉良もどう?」

「違いますから。院長みたいなカテーテゴリー分けはしないで下さい」

出来る事なら痛みのない手段の方が良かつたけれど、今更どういう言つても仕方がない。ただ、これまでの吉良の言動を鑑みて、俺は吉良の性格が隠れどもだと確信をしている。

「美菜先生に怪我をさせたから」

言われて、大事なことを思い出す。

おぼろげだけど覚えている。俺、美菜様を殴り飛ばしたんだ。

身体から一気に血の気が引く。

理性の無い状態で暴れていたから、かなりの衝撃だったはず。

「美菜様、大丈夫だつた？！怪我は！？」

思わず吉良の両肩を掴んで、詰め寄る。吉良は困惑した様に笑い、肩にかかった俺の手を離して距離とどる。

「外傷はタンコブだけでしたし、CTも、脳波も異常は無かつたです。ただ頭を打っているので、大事をとつて一泊入院させるって院長が」

「…良かつた」

「ただ、貴方が酷く暴れてしまつたので、貴方の方は病院側から強制退院を言い渡されてしまつたんです」

「…だらうづね」

あれだけ派手に暴れれば、当然だ。

頻回に吉良に点滴をされても、多少の怖さはあっても暴れることは無かつたから、点滴に対する耐性も付いてきたのだと思い込んで、今回は完全に油断していたのかもしれない。

「だから俺の家に？誰が連れてきたの？」

「院長と私で。院長はリビングのソファで寝ていますよ」

「…此処で治療したの？」

「別の病院、探したほうが良かつたですか？」

問われて、俺は答えられなかった。

病院など行きたくないのが本音。だが、弱みを人に晒したくない。吉良はしばらく俺の答えを待っていたようだが、返事が無いので首をすくめた。

「院長が此処で自分が治療すると言つて、丸田先生に治療方針を確認していたので、此処で治療するのは確定事項なんですね」「で、俺の世話でも命令された？」

吉良は頷いた。

「とりあえず昨日から、二十四時間体制で貴方の看護を命じられました

「…泊まるつもり？」

「冗談じゃない。

マスクにも俺が此処に住んでいることを悟られないように、細心の注意を払っているのに。

恋人だろうが、女を自分の部屋にあげたことも無いし、いくら気を許した看護師でも泊まるつもりなど毛頭ない。

とはいっても、既に一泊していようとだつたけれど。
吉良は困ったように首を竦める。

「彼氏でもない人の家に、気安く泊まれませんよ。昨日は院長も居たし、貴方は高熱でうなされてるので仕方なくです」

「…健斗が一緒でも良いんだ？」

「院長が一緒でないのなら、昨日だって泊まりませんでしたよ？」

吉良は何がいけないのかとばかりに、不思議そうに首をかしげる。

「健斗も手が早いから、危険だと思つけど？」

理解していない吉良に、率直に問いかければ、彼女は更に首をひねる。

「貴女、男に対して警戒心が弱過ぎるよ」

「突然キスする貴方よりは、ずっと紳士ですよ」

吉良はさらっと、キツイ事を言つ。しかも、紳士を強調して。
今でこそ健斗は落ち着いたが、俺より健斗の方が紳士だなんてあり得ない。

「もし貴方の熱が落ち着かなければ、今日は院長だけが泊つていきますから」

「…それ、俺に死ねど？」

「点滴以外の診療なら、院長はまともですよ？」

その宥め方もどうかと思うが、吉良が泊らないと分かり、ほっとする。

「健斗、美菜様の方に付いて居なくて良かつたの？」

「本当は院長、美菜先生の所に付いて居たかったみたいなんですが、美菜先生は貴方を見る様について、院長を病室から追い出したんです。だから院長、ちょっと不機嫌なんですよね。起きたら気を付けてください」

健斗が相手なら、どう回避しようとも地雷に足を踏み込む気がするが、それは言わずにおこいつ。今回は、健斗に殴られても文句は言えないのだから。

吉良はゆっくりと腰を上げる。

「とりあえず食事の用意をして来るので、まだ休んでいてください」

踵を返そうとした吉良の手を、俺は思わず止めた。

「…ちよつと待つて。」、「…、調理器具とか食材は一切置いてないけど？」

「ええ。見事に何もありませんでしたよ、調味料から包丁一本、お茶碗に至るまで。なので、必要なものだけ、簡単に揃えてあります」

手際が良いと書つかなんとこつか…揃えてもうつても、俺は一切使いこなせないのだけれど。

「それと…今更ですけど、勝手に家の中の物を見たり、物を使っても大丈夫でした？」

「本当に今更だね」

「院長が大方、場所を知っていたので、水場とこの部屋で少し探し物はしましたけど…」

見渡しても、俺が知っている風景と何ら変わりはない。

此処に何度も来た事のある健斗が、ある程度の物の場所は知っているはずだから、探し回る必要もほとんどないはず。

何より、必要最低限の物以外、物は置いてない。使うほど長居もしない。

「…鍵の掛かっている部屋以外なら困らない。まあ…あまり我が物顔でウロウロされるのは嫌だけど、それなりに自由にしてくれていよいよ」

そこには、台本とか仕事上で使用したものが収納されているから、誰が訊ねて来ても良いように鍵は常に掛けている。

それ以外で、家にあるので見つけられて困るものは一切ない。

「水場くらいしか使わないと思います。分からぬるものや、判断に迷う場所については貴方に確認をします」

「そんなに生真面目にしなくとも大丈夫だよ」

「そうですか?」

そこまで徹底して仕事モードで動く心積もりの吉良なら、大きな過ちも犯さないだろうし、逐一、いろいろ聞かれるのは正直面倒くさい。

「逆に俺が疲れるから」

「わかりました。しばらくお部屋の物をお借りします」

吉良は少しほつとした顔をして、礼儀正しく礼をして寝室を出て行つた。

そんな吉良の後ろ姿を、俺はなんだかモヤモヤした気分で見送った。

§

休んでいろと言われたけれど、結局俺は吉良の言ひ事を聞かなかつた。

点滴をしたまま一人で居るのが、たまらなく居心地が悪くて怖かつたからだ。

俺は五分もしないうちに、点滴を吊り下げた帽子掛けを持つて廊下に出る。

十一時間以上を睡眠に費やすと言つ、普段ではあり得ない状況のせいが、体中の関節と筋肉が異常に痛い上に体がだるかった。

普段感じない疲労感が、どつと押し寄せたようだった。

“でも、こんなに眠ったの初めてかも”

疲労に追い詰められるように眠つても、一、三時間程度。浅い眠りを繰り返すだけ。

深く意識を落として眠ったのは、どれだけ振りだらう。

そんなことを思いながらリビングに行くと、健斗が三人掛けの皮張りのソファの上で窮屈そうに眠っている。

リビングと続きになつているダイニングキッチンを見れば、吉良が料理の最中だつた。

大理石のカウンター テーブルを挟み、何かを盛り付けている彼女が、不意に顔を上げて俺を見る。

呆れたような、やっぱりといふような顔をして小さくため息を漏

らす。

「…人の言う事を全然聞かないんですね?」

「人が料理する所って、俺、見たことがなくて」

それが目的ではないけれど、嘘ではない。

俺の母親は料理など一切しない女性。榎の家では料理人が作つた物を食べるだけ。恋人関係になつた女性には、料理などさせたことはない。

だから、どのように料理をしているのか、興味は多少あった。

俺がダイニングテーブルの椅子に腰を下ろすと、吉良は首を竦め、引き出しから何かを取り出した後、冷蔵庫からも何かを取り出して盆に載せて俺の傍に来る。

「良かつたらどうぞ」

白磁の陶器の小鉢が一つと、ガラスの小鉢が一つと銀のスプーンが俺の前に出される。

陶器の小鉢の中にはカラメルソースのかかつたカスタードプリンと、ガラスのそれにはグレープのゼリーがある。

思わず、吉良を凝視する。

幼稚過ぎてイメージにそぐわないので公に出来ないが、プリンは俺の大好物だ。特に、カスタードプリンは。

これは偶然なのだろうか。それとも…。

「もしかして、甘いものは嫌いですか?」

「別に嫌いではないけど、どうしてこれが出てくるのか解らなくて」「食欲がなくても、喉越しの良いものなら食べられるかなと思つて、作つておいたんです」

確かに食欲はないけど、吉良が言つ様に、これなら食べられそうな気がする。

「…どうして一種類？」

「嗜好の問題もあるので…もし一つとも黙りでしたら、ピーグルトとアイスクリームもありますよ?」

「いや、これで良いよ」

何だろ?、この用意周到さ。かゆい所に手が届くと言つたが、嗜好問題まで考慮して人の行動の一 手先を考える手の回し方は、俺には無理だし全然思いもつかない。

吉良がこいついう行動をとつてくれているから、俺は何時も病院で嫌な思いをあまりしないのかもしねり。

俺が思うより先に、いつも吉良が行動して対処してくれるから、嫌とか、怖いと言つ感覺をあまり感じなかつた。

これまで全く感じなかつたけれど、吉良はやはり凄い人間なのかもしねり。

俺はスプーンを持ち、カスタードプリンから手をつける。プリン自体の甘さは少し控えめで、カラメルの苦みと甘みがほんのりプリンに絡んで、卵の風味もバーラの香りも程良く活きている。プリンとして喉越しも良い。

俺が食べた歴代のプリンの中でも、お世辞抜きで美味しいと思える。

どこの店の物と言つても、遜色はない。

気付けばあつという間に容器は空になつた。

「お腹、空いてまし…わつ、な、何ですか!?」

傍に居た吉良の手を取り、俺は両手でその手を握ると、彼女に顔を寄せる。

吉良は困惑したように、身を逸らし逃げようとする。

「ち、近いです、榎さん」

「めぢやくぢや 美味いんだけど、ホントに貴女が作ったの？」

「と、友達にパーティシェが居るんです。その子から、洋菓子のレシピを教わったんです。必要なら、レシピ書きましょつか？」

「いや、俺作れないから…どうせなら、また作って」

「まだありますから、もつひとつ出しあしょつか？」

「あるだけ出して」

手を離し、姿勢を戻した俺がそのままいつと、吉良は少し驚いた顔をする。

「あるだけ？あと四つはありますけど」

「全部食べる」

「…気持ち悪くなりますよ？」

「食べる」

俺からしたら、五個くらいは普通なのだけど…

そう言つたら、吉良はどういふ反応をするのか気になつたけれど、止められそうだからあえて言つのは止めた。

少し考えた後、吉良は冷蔵庫に行き、あるだけのプリンを出して持つてきてくれた。

「知りませんからね？」

念押しをして、吉良はキッチンに戻り料理を再開した。

俺は久しぶりのクレーム・ランヴュルセを堪能した。

§

部屋の中にお米の炊けたふんわりとした匂いと、魚のこんがり焼けた匂い、空腹感を誘うみそ汁の香りが広がる頃、俺の従兄弟はダイニングにやってきた。

その頃には既に身支度を整え、一部の隙もない。寝ぐせの付いた頭の俺とは、対照的だ。

健斗は、ダイニングテーブルの上に置かれた青菜のお浸しと、鮭の切り身の塩焼き、出し巻き卵を見ながら、俺の前にある空の器を見て、渋い顔をする。

「お前、 paddin' 許すが、 朝から氣色悪くなる喰い方するな」

無駄に良い発音でそう齧めてくる健斗は、俺の隣に腰を下ろす。「健斗ー」や、朝から胸やけするような量じゃないか

朝食なんて、寝起きにコーヒー程度の俺には、健斗の朝食量は拷問だ。

「朝しつかり食わねえから、そんな貧相な体力なんだよ、お前は」「朝からプリン五つも問題ですけど、朝から一人前もどうかと思いますよ?」

言い合ひ俺達の傍に、吉良がお盆を持ちてやつてくる。

健斗には大盛りのご飯とみそ汁。

俺の前には一人前の土鍋に入ったお粥と、別皿で梅干しと焼き鯉の切り身が、蓮華を添えて置かれる。空いた器は綺麗に下げられる。

「まだお腹に余裕があつたら食べてみてください……あ、薬だけはちゃんと飲んで下さこね」

吉良は食事を強要する訳でもなく、少しだけ、後から薬を添える。

俺と健斗の前に食事はあるけれど、吉良の分はないことになり。

「吉良は食べないの？」

「榎さんのベッドのシーツ交換と、部屋の掃除を先に済ませてきます」

「ママだね。よくすタイプ?」

「金の分だけ働くのは当然だらうが。……おい吉良、みそ汁の出汁、

鯉節から削らずに削り節を使つたな。風味が悪い」

既にみそ汁をすすり始めていた健斗がそう言い放つ。料理の味についての吉良は困ったように首を竦める。

「院長の家なら鯉節を削りますけど、此処にはそういう調理器具や食材はありませんから諦めて下さい」

「お前の所為か」

味につるとい従兄弟が、舌打ちしながら俺を睨む。文句を言つながらも、みそ汁を残すつもりはない様だった。

「調理器具ぐらい完璧にそろえておけ」

「使いもしない物は置かない主義」

「生活能力ゼロ男が」

「食通崩れでいちいち、料理に文句付けるのが好きな男よりもしだら」

突つ掛かつて来る従兄弟に、思わずイラッとする。

「まあまあ。私、掃除に入るので、榎さんはお薬忘れずに飲んで下さい。院長、食器は後で片付けますから、終わったらそのままお願いします」

それだけ言って、吉良は俺達の返事を待たずには部屋から出て行く。俺はその後ろ姿を何気なく追つて見ていた。扉の先に彼女が消えてからも、何となく、そちらを見ていた。

やっぱり彼女は精神的に、俺よりずっと大人なのだ。

じついうつ口意識は嫌いじゃない。むしろ好感すら抱く。なのに、心のどこかで彼女のそんな態度が気に入らない。理由が解らないから余計にモヤモヤする。

「次の診療から吉良を外す」

吉良の事に気を取られていた俺は、健斗の言葉に視線を彼の方へ向けた。健斗は食事をとりながら眼鏡の奥から俺を鋭く射抜く。

吉良が居なくなつた途端これだ。

「そんな真似、絶対に認めないから」

俺は蓮華を手に取り、湯気を放つお粥をひと匙掬い口に運ぶ。

“「つまつ…」

病院のお粥の様な嫌な匂いも味も、全くしない。お米の甘みと風味がはつきり分かる。

これなら食べられる。どんどん、喉を通りしていく。

健斗は、箸と茶碗を机に下ろす。

「昨日の一件で、お前は美菜に怪我をさせた。その制裁は受けてもらひだら」

「…美菜様を怪我させたのは、悪かつたと思ってるよ」

「謝罪をする相手が違うだらうが

突き放すように健斗は言い放つ。

殺氣を帯びた眼光に、健斗が怒りを堪えていたことが容易に知れる。良く、吉良が居る間それを隠していたと思つ。

昨日だって、吉良が居なければ病院の時点で容赦なく殴り飛ばされて、俺も怪我をしていてもおかしくなかつた。

「後で、謝りに行く」

「当然だ。だからと言つて、お前への制裁は覆さねえ。吉良は外す

不意に放たれた従兄弟の宣言に、自分の眉間に深いしわが出来るのが分かる。

「認めないって言つてるだる」

「お前の意思など知つたことか」

俺は乱暴に蓮華を粥の中に置く。

「吉良より使える看護師が居る訳？俺を暴れさせないで点滴できる

よつな人間が、他に居るのかよ

「居る訳ないだろ」

「何だよ、その嫌がりや」

「嫌がらせでなければ、制裁にならんだりうが

鼻で笑つた健斗の言ひとは尤もだが、気に入らない。よつによつて吉良を俺から元を離すなんて。

「それに仕事中、お前が手を出したくなる程、女を感じさせた吉良にも問題はある」「ある

「…は？ 何だよ、それ」

「勤務中に女を感じさせるような看護師、患者の傍に置けないだろ。お前もそれだけ飯が食えるなら、点滴も必要ない。吉良をこのまま返す」

俺は思わず、机を拳で殴りつけた。

吉良に非があるよつな言い方に、俺は無性に腹が立つ。

「ふざけるな。吉良がその類の女じゃないって、お前が一番分かっているだろ！ 別に吉良が媚を売るよつな真似をしたから、手を出した訳じゃない！」

「だったら、何で手を出した？ 吉良が遊びの恋愛に不向きだと、お前にだつて分かるだろ。つまみ食いするほど女に不自由もしてないくせに、何をやつてこむ

淡々と訊ねた健斗に、俺はとつさに返事が出来ない。

… 節度を持つた吉良の態度が、気に入らなかつたから。

… 吉良の優しさが、看護師という職業上の物だから気に入らなかつた。

それは全て、吉良に自分の意思で『俺』といつ存在に向きて合つて

ほしかつたからだ。

そう思つ感情を、どう言えば良いのかわからない。

健斗は俺をじっと見据え、返事をしない俺に深くため息を漏らす。

「お前みたいな奴が一番面倒くせえ」

「なんだよ、それ。要は俺が吉良に手を出さなければ良いだけの話だろ。お前に点滴を打たれるなんて、絶対嫌だからな。俺が今日、吉良に手を出さなかつたら、診療から彼女をはずすなよ」

また健斗に何度も針を刺され、腕が真っ青になる苦痛に耐えるのかと思うと、全身が粟立つ。それだけは絶対に回避しなければ。俺の身の安全と精神的なストレス回避の為に、看護師としての吉良を失う訳にはいかないのだ。

意味のわからない吉良への感情に気を取られている場合ではない。そんな俺の焦りとは裏腹に、健斗は嫌味たらしい程に不敵な笑顔を浮かべた。

「ここの先も手を出すな。あいつは俺と美菜のものだ」

その一言に、俺はまた訳もなく苛々した。

でもその理由は自分でも分からぬままだった。

第十章 謎は多過ぎると胡散臭い

「おい、吉良」

シーツの張り替えをしている最中、院長が寝室の入り口に姿を見せた。

手を止めて姿勢を正して院長に視線を向ければ、複雑な顔をして部屋の中に入ってきた。

「今から美菜を迎えに行く。今回の紫苑の行動で、美菜の親父さんがかなり機嫌悪いからそいつも宥めて来る」

美菜先生のお父様は、美菜先生を溺愛しているし、美容業界の首領で榊一族に負けないくらい、各方面に力を発揮できる人。だから娘が怪我をした上、入院と言つ事だけでもかなりの問題。なのに、怪我を負わせた側が院長の従兄弟で、その院長が美菜先生に一晩付き添わなかつた事も、きっと機嫌を損ねたのだろう。

いくら美菜先生が榊紫苑を見てと追い立てようとも、完全看護で付き添いが要らないと病院側が言つても、我が娘命の美菜先生のお父様には、その辺の事情は通じない。

「…大丈夫ですか？」

「こつちは、どうにかする。夕方までには戻るが、それまでは此処であいつの世話を頼む」

「もしかして、それまで一人つきりでいると…？」

事情は分かるけれど、そうなると心許なくなってしまう。

「変な真似したら、殴るなり縛り上げるなり好きにしろ……そんな顔をするな。多分、手は出さねえよ」

「すいません、信用が置けません」

「お前が診療に立ち会わるのは、あいつにとつて死活問題だ。お前が心配するなら、あいつをベッドに縛り付けておいてやるが？」

流石に其処まではと、私は思わず首を大きく横に振った。

§

“…とは言つてもなあ”

洗い終わったシーツを干しながら、院長が言い残した言葉を思い出していた。

院長に何と言われようと、神紫苑に対しても私の印象は最悪だし、度重なる前科のある男を相手に信用なんて出来ない。

今回は、美菜先生の事があつて院長が神紫苑に手をかけられないから引き受けたけど、出来れば神紫苑関係の仕事は今後、遠慮したい。

高時給でおいしい仕事で、老後の貯蓄稼ぎにはぴったりだったんだけど、貞操まで売り渡すつもりはないから。残念だけど、これつきり。

院長にも、戻ってきたらはつきりそう言おう。

そう決意を新たにし、とりあえずベッドに戻つて大人しく寝ている神紫苑と、極力接觸しないように注意して行動しよう。

「…吉良」

呼ばれて慌てて振り返れば、ベランダの出入口にベッドへ戻つたはずの榎紫苑が居る。

決意した先から、どうして彼からやつて来るのかしら…。

「な、なんで起きているんですか」

「C h e R a n v e r s e 作つて」

「クレーム・ラン…ヴェルセ?」

流暢なフランス語の名前に、私は首をかしげる。

英語どころかフランス語もいけるらしい相手が放った名前に、馴染みがない。初めて聞くけれど、『クレーム』と付くからには、洋菓子の名前なんかしら。

「ああ、『jめん。P u d d i n gの』じ」と

「…まだ、食べるつもりですか」

「明日食べるから、作つておいて」

内心でほつとある。皿も食べると言こだしたら、どうしようかと思つた。

これ以上のプリン攝取は、いくらなんでも食べ過ぎだもの。

「わかりました。お皿(はん)の後に作ります」
「お願い」

そう言つて、榎紫苑は満足そうに笑つて部屋の中へ戻つていき、

私は残つた洗濯物を干しにかかる。

あの嬉しそうな笑顔だけを見ていると、子供みたいでとても無害

そうな人に見えるけど、中身がたいへん危険であることを知つていいので、絆^{ほだ}されたりしない。

それから掃除をしたり、昼^ひ飯の下準備に取りかかつてみたりしたのだけれど…。

「…あの…どうしてそこにあるんでしょ?」

榎紫苑は寝室には戻らず、掛け布団だけ持つてリビングのソファに寝そべりながら、じつと私の行動を監視するようになっていた。

家主のまわりつく視線に耐えかねて、私は声をかける。

「気になるから」

「心配しなくとも、貴方の許可なしに家の物は触りませんよ」

「ただ、吉良を見ていたいだけ」

色気を含んだ微笑でそう言われ、ぞわっと自分の背筋を這い上がった寒氣を堪え、私は愛想笑いを浮かべる。

「…」こんな凡庸な姿勢をした年上の女を見て、楽しいですか?
「貴女を見ていれば、何か分かるかと思つて」

ソファの上で胡坐をかき、背もたれにもたれかかりながら、この家の主は難しそうな顔をして神妙に答える。

この男の思考パターンだけは、どうしても読み取ることが出来なくて、行動も予測不能。

下手をすると、院長よりも浮世離れした思考の持ち主なのかもしれない。

いや、院長はすることはトリックキーでセクハラ発言も良くするけれど、意外に常識的で守るべき一線はちゃんと守っている。

話をしながら、私は包丁を動かして料理に使う材料をカットする。

「…何かつて、何ですか？」

「貴女を抱きたい衝動に駆られる理由」

「つつ！」

良いのは顔だけの男が放ったセクハラな一言に、思わず包丁を持った手がぶれた。

かつら剥きをしていた大根の皮を突き破り、包丁が私の指をかすめる。

親指の腹に縦に赤い線が入り、血が滲んだ。

思わず包丁と大根をまな板の上に置き、左手の親指を押さえて顔の前まで持ち上げる。

「な、何て事を言つんですか、貴方は！」

リビングにいる相手を睨みつければ、既にそこに相手はいない。

“え？ 居ない…って、近つ！”

気付いた時には、榎紫苑は大股で私の傍まで近付いていた。

警戒して身を引くよりも早く、彼が素早い動きで私の左手を掴んで更に私の腕を持ち上げ、自分の顔の前に私の手を持っていく。

榎紫苑は、じわじわと血が滲む傷を見て眉根を寄せて目を細める。

「女性が傷なんて作つたら駄目だよ」

「貴方が莫迦なことを言つからです！」

誰のせいでも手元が狂つたのか、この美青年は全く理解していない。親指が、拍動と共に鈍い痛みをもたらして、余計に気分が悪い。手を振りほどけようとしたけど、相手の手はびくともしない。

「手当てをしないと」

「この程度、舐めておけば大丈夫です！」

見目の優雅さに反して腕の力の強い相手が次の瞬間にとった行動に、私は絶句した。
私の左手の親指を口に含んだのだ。

“いやああああああーっ！た、食べられ…ゅ、指つーーー！”

しかも、舌で傷口を撫でる。

一瞬にして私の体中の体温が失われ、身体が硬直する。

“あ、あり得ない…あり得ない！なんて真似してるの、この男っ！”

まるで、愛撫するかのように優しく皮膚に舌が絡みつき、時にきつく吸い上げられる。

行為も媚態を帶びていれば、榎紫苑の表情もどこか官能的で痛みなどどこかに吹き飛ぶ。

ただ指の腹に絡む感覚だけが、心臓の拍動と共に私の中で膨れ上

がる。

悪寒なのか、恐怖なのか、甘い痺れなのか、私に満ちてくる感覚が理解できないまま、脳内を駆け巡り、思考はショート寸前。

心臓は破裂するのか潰れるのか解らないくらい苦しい。

声を出そうにも、どうやつたら声が出るのかすら分からなくなつて、ただ相手を見上げて行為を見ている事しか出来ない。

相手にされるがままに。

離してほしいのに、それが言えない。

恥ずかしくてどこか怖くて泣きたくなる気持ちと、親指を侵食する危険な艶めかしい感触に溺れて行きそうな自分の体が震えるのが分かる。

長いのか短いのか分からない時間の後、人の指を弄びながらゆっくりと見下ろしてきた年下男の瞳と目が合つた。

まるで淫靡な世界に誘つかのような挑発的で熱を帯びた視線が、不意に悪戯っ子の様なものに変わる。

「大根の味がする」

そう言われた瞬間、ようやく自分が現実に引き戻され、血液が体中を勢いよくめぐり出したような気分になつた。

全身が熱い。

特に顔はもう発火するのではないかと思ひくらいい。

“こんな嫌がらせ極まりない羞恥プレイ、院長にだつてされたことないのに！”

きつと、今の私の顔は真つ赤だ。しかも、泣きそになつてゐはず。

「…そんな顔すると、襲いつよ？」

慌てて相手の手から自分の手をもぎ取り、神紫苑を睨む。

「あ、貴方には、節操つてものがないんですか」

「どうらかって言つと…ない…かな？」

「う…このザル頭の工口美青年つ！貴方、脳内が一面お花畠で、しかもショックキングピンク一色なんでしょう！だから、節操がないんでしょ！」

「俺だつて、相手くらいは選ぶよ？」「

「そ、それなら、私で遊ばないで下さい！」

「…遊んでいるつもりはないし、手当てをしたのにどうして怒るのか分からぬいけど？」

「な、何が手当てですか」

「だつて吉良、舐めておけば大丈夫つて」

「それは傷が大したことがないという意味であつて、本当に舐めて治療はしません！」

「あれは、そういう意味か…日本語つて表現が湾曲しているから難しいね」

本当に意味を知らなかつたのか、見た目は完全に外国人の神紫苑は、至極真面目な顔をして頷いて納得をした表情を見せた。

「…い、一応、その…手当て、ありがとひゞやこます」

流暢に難しい日本語を喋るから、本当にどじまで眞実かはわからなけれど、一応、「手当て」をしてくれたのでお礼を言つてみる。が、神紫苑は眉間にしわを刻んだかと思うと、片手で口元を押えて顔を逸らす。

「いや、お礼は言わないで。正直、間違えてかなり恥ずかしいから」

しつとした顔をしていたのに、実は恥ずかしかったらしい美青年の頬がわずかに朱に染まっている。この人でもこいつの顔をするのかと思つと、なんだか頬が緩む。

「…なに、俺の間違いがそんなに面白い？」

「そうではなくて、貴方が自然な表情をするのは珍しいなと思つて」「え…？」

むつとしていた彼の表情が、愕然としたものに変わる。心なしか顔色も悪い。

“あ、もしかして踏み込まれたくない部分だったのかしら…”

珍しく、榎紫苑が動搖している。

「榎の人だから、処世術で身に付けているのかもしませんが、いつも本心を隠して感情を表情をされるので」

院長も榎のパーティーや診療中に同じ表情をする。診療中に限つては人間が営業用の別物になつてている事を患者様は知らないけれど、スタッフの皆は豹変する院長を見慣れていても詐欺行為だと叫ぶくらい露骨。

でも、パーティーの時は、表情の変わる仮面を付けているみたい。それは道化のメイクにも似ている。

常に張り付いた笑顔の奥にある瞳は、全く笑つていない。瞳を見ても心の奥底が分からなくてどこか身構えなくなる。

榎紫苑も表情を良く変えて喜怒哀楽を表現するけれど、瞳の感情までは変わらない。私の前でも、院長の前でも。

付き合いの長い仲の良い相手なら、素になつても良いはずなのに、それが榎紫苑には全くない。

「…それはきっと、吉良が俺を良くも悪くも特別扱いしないから」「…？それは、榊の人間としてVIP待遇していないと言つ意味ですか？」

意外にも、榊紫苑はあっさりと私の話を肯定した。そして、同時にチクリと言われた気がした。

患者である以上、私は、どのような相手であれ対応の仕方に差はないよう心がけている。無論、榊紫苑に対しても。

それを咎められているのだろうかと思つたのだけれど、榊紫苑はわずかに笑う。

何処となく自嘲氣味に。

「俺をVIP扱いする人間なんていないよ」

何故と、訊ねてはいけない氣がして、私はただ相手を見た。

「健斗から聞いていいでしょ？俺、一八の時に榎から勘当されたんだ。だから、吉良も普通に接していたんじゃないの？」

「いえ。そのお話は初めて聞きました」

さも私が当然の様に知っているだろ？と訊ねる相手に、私は首を横に振る。

院長に榎紫苑の事を聞いても話を逸らすのは、この話を避けて通れなかつたからかもしれない。

院長が話したがらないことは、私もあえて深くは訊ねなかつた。彼の事を知りたいと言う好奇心も興味もさほどなかつたから、私が知る彼個人の情報なんてほとんど無いに等しい。

「貴方個人に一切の興味ナシです」「…もう少し、俺に興味持つてくれないかな？」

本当に困つたような顔をした相手は、首を竦めた。
嫌いだとほつきり宣告しても応えた様子はないし、興味がないと言つのに興味を持てと持ちかけるし。
やつぱり、榎紫苑とはどこか会話が通じない。

「そうしたら、たぶんキスしたりしないと思つんだ。貴女の興味を引きたいが為の行動だと思うから」「そつなんですか…ん？…えつ…？」

興味を引くためにキスをするとか、その発想が榎の口遺伝子のなせる技だと危うく納得しそうになつた。

「自分のしたことに対する確信が持てないってどういうことですか？しかも、

はた迷惑な興味の引き方をしないで下さい」

「普通のアプローチの仕方は知らない。女性と色恋なしに付き合つた事もないから」

「男性のお友達くらい居るでしょう？」

「仕事仲間はたくさんいるけど、プライベートまでの深い関係の人間は片手で余るかな…」

「その人とは、どうやって仲良くなつたんですか？」

「まあ、趣味が一致したからとか…かな。基本的に、広く浅く付き合つ主義だから、自分からは踏み込んだ事がない」

要は、自發的に積極性を持つて親しい友人は作つて来なかつたということね。

「…男の人と仲良くなる感じで、女性に接してみてはどうですか？」

「俺、無駄に顔が良いから、女性の方からいつも恋愛感情ありきで寄つて来るんだよ。だから、女性とは男の様にはいかない。だから女性とは色恋絡みの付き合いだけしか、した事がないし、言い寄る女が途切れた事がないから、自分から口説く事もなかつたし」

榊紫苑のこれまでの、私に対する一連の拙い接し方の原因は、此処にあるのだろう。

ともすれば嫌味に取れる彼の言葉を、私が嫌味と感じなかつたのは、彼の声にありありと嫌悪が浮かんでいたから。

「限られた交友関係しか築けないのも、大変ですね」

「そうだね。俺がこんな容姿じゃなかつたら、もっと違う人生だつたのかもしれない…でも、この容姿だから、家を勘当されても仕事にありつけた。そつくりな顔をくれた事が、母親に対しても唯一、俺

が感謝の念を抱けることだよ

母親と言つた彼の表情が、酷く暗いものに変わる。
あまり母親との関係が良くなかったのか、榊紫苑の酷く憂鬱に沈
んだ表情をこの時、初めて見た。

女性にもてそうだけれど、どこか女人を冷めた目で見ていた印
象があつたのは、母親との間に何かあつたからなのかもしれない。

「…とにかく、『飯まだ?』

私が口を開くよりも早く、榊紫苑はそう尋ねて来た。

まるで子供の様な質問をした相手に、私はなんだか脱力する。

「すぐ作りますから…貴方は絆創膏を持つてきてください。傷を保
護したいので」

「…あつたかな。探してみるよ」

血の止まつた左手の親指を見せて、料理を中断させた張本人をキ
ツチンから追い出す。

行動に一貫性がない榊紫苑を相手に話をするのは、なんだかひど
く疲れてしまい深くため息が漏れた。

良く言えば、独特的世界観を持っている。悪く言えば、空気が読
めない。

“…でも、手を怪我した時…一応、心配はしてくれたから、たぶん
そこまで悪い人じやないとは思うけど…”

手当の仕方が、誤解、とはいへ、ものすごく歪んでいたので、優
しさが帳消しなのだが。

手当をされた時の事を思い出し、榊紫苑に触れられていた指が異

常に熱く感じた。

思わず左手を右手で包むように押されて、私は胸元に引き寄せた。また顔が熱くなり、心臓の拍動数が一気に跳ね上がるのが分かる。嫌なのに、神紫苑がもたらす快樂に溺れそうになる自分。

“神さんが変な事ばっかりするから、私の頭の中までピンクになってしまったのかなあ…それとも欲求不満？…それはやだなあ…”

性交渉に対しても自分は淡白だと思つていただけに、不安だった。恋人でもない相手からの行為に、淫らな感覚を誘い出されたから。欲求の為だけに好きでもない相手と交渉するという概念もない、まして自分にその気なんてまるで無かったのに。

神紫苑の行動にうっかり嵌つてしまいそうになつた事実は、私の頭を鈍器で殴りつける程の衝撃だった。

“ダメダメ。もう、変なことは考えない。仕事に集中しよう”

意識すればするほど、神紫苑の顔さえ見られなくなりそうだったので、無理やり頭の中から出来事を排除しようと無理矢理、他事に集中しようと意識を向けた。

私にとって、仕事をしてお金を稼ぐことが最優先事項だったので、気持ちを切り替えるのにさほど時間は要しなかつた。

§

あれから私はうどんを作り、まだかとせかす榊紫苑と二人で食べた。

榊紫苑はたっぷりの野菜と卵の入ったそのうどんを、しつかり一人前を腹の中に収めた。院長並みの食欲で。

“この分なら、夕食はもう少ししつかりしたものを準備しても大丈夫かも。一、二日分の保存がきく料理も作って念のため置いた方がいいかしら…何にしても、後で買い出しに行かないとい…”

食べられないことを前提にしてあまり食材を買わなかつたので、良い意味で予想を裏切ってくれた榊紫苑の為に、少し食材の買い足しが必要だつた。

この人、あまり食事をしないつて聞いたけど、食べると大食漢の部類かも。そうなると、作り置きの料理の量も増やした方がいいのかもしれないけど、それは後で榊紫苑に確認してからにしようと決めた。

食後、榊紫苑はやつぱりベッドで寝る気配がなく、リビングの六十インチを超える大画面のテレビで映画を見ていた。

微熱はあつたものの、食事もしつかり食べて薬も飲み、ソファに寝転がつて体を一応は休めていているので私はあえて何も言わなかつた。

見えない所で動き回つて安静が保てないのも困るし、仕事をしな

がら様子が見てられると思えば悪くなかった。

“ なんだろう… 」の子供の面倒を見ているよつた感じ… ”

その大きな子供が要望したプリンを作りながら、不意に思い出す。お弁当を食べていた時も唐揚げとか、わりと子供が好きそうな庶民メニューばかり食べていた事を。

感情を隠している普段の榊紫苑から、子供が大好物を前にした時の高揚と嬉々とした様子が見て取れた。だから、好きな食べ物だとは単純に分かるけど、彼の容姿だけで判断すれば、もつと高級志向で洗練された料理を食べているイメージがある。

だから、予想外と言えば予想外だけど、庶民的な料理でも文句を言わずに食べてくれるのは、作る側としてはとても助かる。

何より体力回復のためには、まず絶対から食事をしつかり食べてもらう事が、大前提だから。この分なら、榊紫苑の体調もすぐに戻るはず。

ああ、でも今作っているプリンも、また一気に食べてしまうのどうかとすると、ちょっと心配になる。

何事も、度が過ぎると良い事も悪くなる。

特に、榊紫苑は行動の端々が妙に子供っぽい。天の邪鬼と言えばそれまでだけど。

そう思いながらも、生地をココット型に入れ、オーブンで焼きながらカラメルソースを作りあげて冷蔵庫で冷やす。

プリンが焼き上がるまでに時間があつたので、干したシーツを取りこんでアイロンをかけようと思つたけれど、アイロンがない…。榊紫苑に尋ねれば、「いつもクリーニングに出して済ませているから無い」 のだとか。

洗濯物は全てクリーニングだなんて、まったくもって不経済な話よね。

洗濯機はあるのに洗剤類が一切なかつたり、物干し竿は備え付け

の物があるけどハンガー類が一切ないとか、まるで生活感が無かった。

だから、アイロンがなくてもさほど驚かなかつたけど、皺の寄つたシーツはどうじよづ。

「…なんでシーツと睨みあつてるの?」

顔の前で持ち上げて広げていたシーツを下ろせば、榎紫苑が正面に座つている。

「…のままにしたら、絶対に貴方はアイロンをかけないだろつなと思つて」

「良いよ。最悪、クマ呼んで何とかするから」

「…クマ?」

「ああ、マネージャ…」

榎紫苑は慌てて口を噤んだ。

おそらく、マネージャーと言つつもりだつたのだろう。それを隠すように視線を逸らした相手に、何となくやましさが窺える。

やつぱり、言い辛い業種の仕事をしているに違いない。

「ホストの?」

医師や医療関連の業種につく榎一族の人間にとつて、ホストというウォータービジネスは十二分に言い難い職種のはず。

そう尋ねてみると、相手は明らかにうろたえた様子で私を見る。

「どう見ても、普通のサラリーマンには見えませんし、かといつて、お医者様特有の雰囲気もありませんし」

「どう見ても、普通のサラリーマンには見えませんし、かといつて、

「…」

「それに榊一族ですから、女性の扱いはお上手だし、容姿と話術で女性を説しこむのもお手の物つて感じがします」

片手で額を押さえ、深いため息を漏らした榊紫苑は、しばらく沈黙する。

ショックを受けているようだけど、何にショックを受けたのか私はわからぬ。

「…榊さん?」

ゆっくりと顔から手を離したイケメンは、立ち直れない様子で私を見る。

「ホストになつたから、厳格な榊の家を勘当されたのかなつて、思つたんですけど」

「…吉良の洞察力と想像力には負けるよ」

そう言つて笑つた彼には、既に表情の暗さはない。

ただ、嬉しくて笑うと言つよりは不機嫌を隠すように笑つているように見えて、ちょっと怖い。

「これから話す事、口外しないでね?」

院長似の似非紳士スマイルに殺氣が籠つていて怖かつたので、何度も首を縦に振つた。

「俺、いわゆる妾腹だから兄弟仲が最悪で、親父とも折り合いが悪かつたんだ」

「…それで反発したんですか?」

「それもあるけど、医療界に入つても、折り合いの悪い兄貴達に医者の道を潰されるのは目に見えていたから」

榎は医者がほとんどのヒリート集団故に、派閥もあるし派閥同士の確執も多かつたのを、聖心会の本院で勤務していた頃に見ている。

例え兄弟でも折り合いが悪ければ、水面下で足を引っ張り合つ泥仕合をしている。

だから、榎紫苑が言つことは、実際に起こつた事象で否定は出来なかつた。

医者になれば権力闘争どころか、身の潰し合い。
医者にならなければ、榊のヒューラルキーでは最下層になる。
同じ医者でも、専門する科が『外科』に属さないだけでも、冷や
かな目で見られると言つのに……。
そう考えれば、辛い選択だったと思つ。

「家にも居たくなかったし、あいつらとは関係の無い所で早く自立
したかったんだ」

「何時から働いているんですか？」

「本格的に働き出したのは、高校卒業と同時かな。家もその時に出
たんだ」

そう告げた榊紫苑の表情は、後悔など一抹もなかった。
むしろ清々しさを感じる笑みを浮かべていた。

「一応、榊を名乗ることは許されているけど、今も本家から末端の
分家筋にまで、俺の存在は無い物として扱つよつて命令が飛んでい
るから」

「本家から？」

「榊で医療系や官僚系の職業に従事しないのは俺だけだから。前代
未聞の異分子を、徹底的に排除して晒しものにしたいんだよ。次の
同胞が出ないよう」「同胞が出ないよう」

医者家業、殊に外科医至上主義の榊一族の統率を保つため……と、
言つことなのだろうか。

ある意味、閉塞的な世界観を持つ榎家なら、あり得るのかもしない。

院長でさえ、精神科医として今の病院を起こす時に、かなり一族の人たちから嫌がらせやら、揶揄と侮蔑を受けていたし。

「俺としては、あいつらと縁が切れて清々しているし、生活には不自由もしていないからこんな幸せなことはないんだけどね」

「…え？」

思わず疑問の声が出た。彼の言葉に、大きな謎が。

「えっと…何？」

「じゃあ、此処のお家賃は？」

「俺の給料で賄っているけど？」

「…立地とか、部屋の無駄な広さを考えたら、どう見積もっても月百万円近いですよね？」

そう。榎紫苑が住んでいるのは高級住宅街で、しかも一人暮らしには無駄なだだっ広さの四LDK。

外観も、内装も安物分譲物件とはわけが違うし、マンション内のセキュリティーもハイクラス。

「家賃、そのくらいの金額だったかな?…まあ、大したことないよ?稼ぎは良い方だから」

私の住んでいるアパートなんて、このマンションのリビングより狭いのに。

この広さら、大家族だつて住めるじゃないの。それを一人で済むだなんて。しかも、金額の桁が違うのよ?

「お金の無駄遣いよーつ……。」

心の底から、私はそう叫んだ。

部屋の広さも、家賃も、もっと有意義に使うべきなの!」。

「…え？ 無駄遣い？」

榊紫苑は怪訝そうじやうつ私に尋ね、私は大きく頷いた。

「百万円ですよ??庶民がそんな大金手にしたら、浮かれて踊っちゃうんですよ!私の給料、何ヶ月分だと思つてるんですかっ!」

何とも困った顔をして私を見ていた榊紫苑は、突然、笑い出した。しかも遠慮も無く、お腹を抱えて笑っている。

「や…吉良、やこ」あ…」

拳句には、笑い過ぎて呼吸が出来なくなつて、涙目になりながらもまだ笑い続けている。

いわゆる大爆笑。イケメンが台無しなくらいもがいて笑っている。何が彼のツボにはまつたのか分からなければ、彼は笑いから抜け出すのに五分を要した。

「…満足しましたか?」

「ああ、うん」

目元の涙を手で拭いながら、榊紫苑はようやく姿勢を正して私を見た。

「何が面白かったんですか?」

「いや、浮かれて踊る吉良を想像しちゃったよ」

何であえて私で踊る所を想像してくれたのだろう、この美青年。私が生活感あふれる庶民だから？それとも、滲みでる貧乏症のせい！？」

「……すみませんね、庶民飛び越えた貧民で」

努めて愛想笑いで答えてみたけれど、榊紫苑がまた噴き出した。

「…今度は、何のツボにはまつたんですか？」

「吉良って、もつと真面目一邊倒な人だと思っていたけど、発想が意外にお茶目だよね」

「…はあ」

お茶目？

何処がどのようになに？

あえて、自虐的な嫌みで応戦したはずなのに、榊紫苑は、どうしてそう言つ解釋にたどりついたんだろう。

「貴女と話してみると、なんだか乐でいいや」「樂？」

楽しいではなく、樂つてどういう意味なのだろう。

首を傾げた私に、榊紫苑は笑いながら頷く。

「普段の様に考えて笑わなくても良いし、俺とは色恋沙汰にならなさそだから、肩の力が抜けると言つか……」

その割に手を出してきたのは誰？って、言いそうになつたけれど、

言つたら変な地雷を踏みそりなので踏みとどまる。

単に、手を出してもあしかづいて分かつていてしかつかいを掛け

ているだけなのだろうから、これは、あえて無視すればいい。

問題は、「考えて笑う」と言つ答へ。異様過ぎれる。

仕事で意図的にそうしていても、日常ではそこまでしない。

彼の言葉は恒常に多様な場面で、そうして生きていると聞かしの証

明だ。

「もしかして榊さん、いつも心で感じる前に頭で考えて反応しています？」

「言われたらそろがもしれないけど…それがどうかした？」

「…榊さん、今ものすく生き辛いんじゃないですか？」

「どうして？」

「やせ我慢も大事ですけど、ちゃんと弱音を吐く場所を作らないと、気持ちがパンクして心が壊れちゃいますよ？」

自分でも気付いていなかつたのが、自覚していたことを指摘された為か、榊紫苑の表情が露骨に変わつていつた。

第十一章 存在の証明

『やせ我慢も大事ですけど、ちゃんと弱音を吐く場所を作らないと、気持ちがパンクして心が壊れちゃいますよ?』

何故、彼女がそんなことを言つのか、俺には分からなかつた。生き辛いとか、そういうことを考えたことはなくて。けれど、これまでの生活に息苦しさを感じてはいた。

「やせ我慢なんて、結構きつい事言つね?」
 「そうではないと言い切れます?」
 「俺、脆い人間に見える?」
 「見えません」
 「俺はずつとこのスタイルで生きている。貴方にどうひつ言われる筋合いはないよ」

俺の事をよく知りもしないで、ずかずかと深入りしていくのが、一番嫌いだ。

特に先程、放たれた彼女の言葉は、男としてのステータスしか見ない他の女と違つて、俺の心を酷く抉りつけた。

吉良は、困ったように笑う。

「…ずっと気を張り詰めてばかりだから、貴方は眠れないんですね」「?」

何をどう迫つてその結果に行きついたのか、俺には見当もつかない。

「貴方、表面上は人当たりが良いんですけど、人をあまり信用していないでしょ？だから、いつも人を警戒していませんか？」

その正鶴を射た問いかけに、俺は反射的に仕事用の笑顔を浮かべてしまふ。

同時に、吉良の人差し指が、俺の顔近くに突き付けられる。

「それです！」

「それ？」

「本音を言わないで、ずっと健前だけ。言いたいことを我慢して、そつやつて愛想笑いを浮かべて誤魔化していませんか？」

そうだ、この人は俺の営業スマイルを見抜いていた。なんだか、吉良に俺の手の内を読まれているようで、診療中の健斗を相手にしているようで、やりづらい。

「なに、健斗の受け売りでもしたいの？」

吉良が今言った言葉は、もう十年近く前、健斗の診療を初めて受けた時に言われた言葉とほぼ同じだった。

従兄弟の時は軽く受け流せたけど、彼女に言わるとなんだか腹が立つ感じだった。

「それとも、貴女に俺の本音でも晒せばいいの？」

「私ではなく、榎さんが気を許せる人間であれば、誰でも良いんです。でも、貴方は仲の良い院長にも本音は言わないようですしだ」

「…ドSに攻撃材料を渡すわけがないだろ?」

吉良が曖昧に笑う。

「普段なら、そうでしょうね。でも仕事中は人格どころか人間が別物ですから、優しくて頼りになりますよ」

それは健斗を褒めているのか?

とりあえず、吉良が健斗を医者として認めていることは分かる。だが生憎、俺の診療中は普段の従兄弟の性格のままだ。彼女の言葉を鵜呑みに出来ない。

それに、今の健斗を頼りにする吉良の言葉は気に食わない。

「だとしても、健斗にだけは絶対言わない」

不覚にも露骨に不快感をあらわにしてしまった俺に、吉良は不思議そうに首をかしげる。

「そもそも、吉良は俺に進言しながら、自分は俺の話を聞く気はない訳?」

「貴方にその気があるのなら、仕事中にカウンセリングとして伺いますよ?」

「プライベートではお断りってこと?」

「患者さまとプライベートの共有は一切しません。それに、仕事中の私には守秘義務と言つ制約があります」

「それは、吉良は俺との話を秘密にしてくれるってこと?」

「ええ」

「健斗にも?」

「…貴方がそう強く望むのなら、院長にも言いませんし、他言は一切しません。ただ、貴方が何かしらの犯罪で警察沙汰になった場合、

警察などに貴方の情報を提供する場合はあります

「いや、別に警察に世話になる様な事はしていないから、大丈夫だけ…」

流石に、間違つても警察沙汰になる事態はないだろう。

世話にならない様に、細心の注意を払つて生きてきたのだから。

「問題は、貴方を大嫌いと宣言した私を、貴方が信頼して初めて成立する話だということです。私は貴方に無理強いするつもりはありませんし、貴方の意思にお任せします」

つまり、仕事上なら話は聞くけれど、それ以外はお断り。守秘義務で秘密は最低限守られるが、貴方は好きじやないから相応の覚悟をして望め。

ということか、もしくは、自分からは断れないから、俺が断るよう仕向けているのか。

そんなことを言われなくとも、俺の答えは決まっている。

「悪いけど、吉良だらうと健斗だらうと、弱音を吐くつもりも本音を吐きだすつもりもないよ」

吉良はただ、頷いた。その答えを予期していたかのようだ。

「だけど、吉良と話をしたいとは思つ」

彼女の大きめのダークブラウンの双眸が一瞬大きく見開いたあと、何度も瞬いて長い睫毛が揺れた。

予想外の事に、どうすれば良いのか分からぬ様子で。

「前に言つただろ、貴女と話をしていると楽だつて

「…はあ

要領を得ない感じで、吉良はそつ答えるがまだ頭の上にクエスチョンマークがいくつも浮かんでいるよつた顔をしていた。

「…それとも、貴女の事が知りたくてたまらないから、貴女の全てを教えてつて率直に言つた方が良い?」

俺の前に突き出されたままの吉良の手を取り、上坂伊織の口説きモードでせう告げ、軽く手の甲に口づける。

途端に、吉良の大きめの瞳が更に驚きで大きくなり、頬に朱が差す。

「な、ななななんで、て、手に、キスをつ…?」

言葉よりも行動に反応した吉良は、俺よりも四つも年上だなんて全く思えない程、うろたえて恥ずかしがっているのがまるわかりだ。つい、もつとからかつてみたくなる。

「食後のデザートがなかつただろ?」「え?あ…ゼリーなら有りますよ?」

この期に及んで、吉良はそんな見当違いで眞面目な言葉を返して来る。

「そんなものより、貴の方が良い…甘くて淫靡な貴女が食べたい

そんな真似をしたら、健斗は有言実行で吉良を俺の診療から外すだろう。けれど、彼女が乗り気になってくれるなら、このまま抱いてしまつても良い。

口説き落とす手段は、言葉だけではない。完全に俺に溺れさせるなら、身体に教え込む方が手っ取り早い。理性的で恋愛の話になると途端に鈍くなる吉良には、こちらの手段の方がより効果的で、背徳であればあるほど、落ちた後は溺れやすい。

俺に溺れれば、吉良の方から俺の診療に付きたいと言わせるのは容易いから。

「俺に食べられてみる?」

間合いを詰めながら、耳まで真っ赤に染めた吉良に、俺は誘う様に熱っぽく囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3185x/>

Parfum

2011年11月27日10時46分発行